

柳 II 遺 跡

(YANAGI II ISEKI)

小 久 白 墳 墓 群

(KOKUJIRAFUNBOGUN)

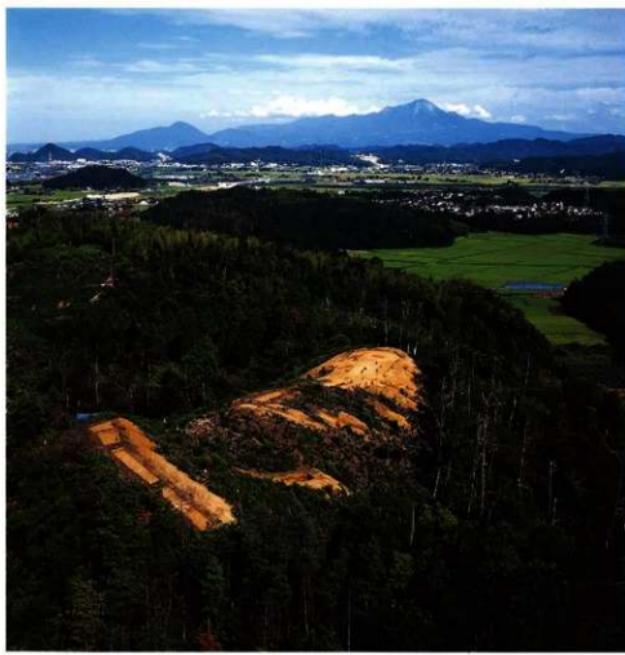
神 庭 谷 遺 跡

(KANBADANIISEKI)

一般国道9号(安来道路)建設予定地内
埋蔵文化財発掘調査報告書 西地区IV

1996年8月

建設省松江国道工事務所
島根県教育委員会



上…空からみた柳II遺跡・小久白古墳群・神庭谷遺跡（南から）

下…小久白古墳群全景（西から）



上…柳II遺跡全景（西から） 下…柳II遺跡II区 S B 07・04・05（北から）

序

建設省松江国道工事事務所においては、安来地区の一般国道9号の交通混雑を緩和して、円滑な交通を確保し地域社会の発展に資するため、一般国道9号のバイパスとして安来道路の建設を進めています。

道路整備に際しては、埋蔵文化財の保護にも十分留意しつつ関係機関と協議しながら進めていますが、避けることのできない埋蔵文化財については、道路事業者の負担によって、必要な調査を実施し、記録保存を行っています。

当安来道路においても道路予定地内にある文化財について島根県教育委員会と協議し、同委員会のご協力のもとに平成元年度から発掘調査を行っています。

本報告書は、平成7年度に実施した遺跡調査の結果をとりまとめたものであります。本書が郷土の埋蔵文化財に関する貴重な資料として、学術ならびに教育のため広く活用されることを期待すると共に、道路事業が埋蔵文化財の保護にも十分留意しつつ進められていることへのご理解を頂きたいと思うものであります。

最後に、今回の発掘調査及び本書の編集に当たり、ご指導ご協力いただいた島根県教育委員会並びに関係各位に対し深甚なる謝意を表すものであります。

平成8年8月

建設省中国地方建設局松江国道工事事務所

所長 井上 啓一

序

島根県教育委員会では、建設省中国地方建設局の委託を受けて、平成元年度から一般国道9号（安来道路）建設予定地内遺跡の調査を行っています。この報告書は、平成7年度に実施した柳II遺跡・小久白墳墓群・神庭谷遺跡（安来市荒島町・久白町）の調査結果をとりまとめたものであります。

安来道路の建設が進められている安来平野の西端一帯は、国指定史跡仲仙寺古墳群、造山1号墳など県内の代表的な大形の墳墓・古墳が密集して築造されている学術上極めて重要な地域です。今回調査を実施した柳II遺跡・小久白墳墓群・神庭谷遺跡は、造山古墳群に近接しています。柳II遺跡からは縄文時代から古墳時代にかけての遺物や集落がみつかり、また小久白墳墓群からは弥生時代後期の墳墓群が発見されるなど、この地域の歴史をより深く理解するうえで数々の貴重な資料を得ることができました。

本報告書が多少なりとも安来平野周辺ひいては島根県の歴史を解明する契機となり、また広く一般の方々の埋蔵文化財に対する理解と関心を高めるうえで役立てば幸いです。

本書を刊行するにあたり、調査にご協力いただきました建設省中国建設局松江国道工事事務所をはじめ関係各位に厚くお礼申し上げます。

平成8年8月

島根県教育委員会

教育長 清原茂治

例 言

1. 本書は建設省中国地方建設局の委託を受けて、島根県教育委員会が1995年度（平成7年度）に実施した、一般国道9号（安来道路）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査の調査報告書である。
2. 本書で扱う遺跡は安来市荒島町及び久白町に所在する柳II遺跡・小久白墳墓群・神庭谷遺跡である。
3. 調査組織は次の通りである。

調査主体 島根県教育委員会

事務局 文化財課 勝部 昭（課長）、森山洋光（課長補佐）

埋蔵文化財センター 穴道正年（センター長）、佐伯善治（課長補佐）、
渋谷昌宏（同企画調整係主事）、田部利夫（島根県教育文化財団嘱託）

調査員 卜部吉博（埋蔵文化財調査センター主幹）、片山寛志（同教諭兼文化財保護主事）、
福島 浩（同）、丹羽野 裕（同文化財保護主事）、池淵俊一（同主事）、
岩橋孝典（同）、梅木茂雄（同臨時職員）、東森 晋（同）

遺物整理 青戸房子、石川真由美、加藤往子、門脇卓子、来海順子、熊谷妙子、佐伯明子、
佐々木孝子、佐々木順子、砂口光枝、陶山佳代、高橋啓子、田中路子、三奈木康江、
原英知子、守屋かおる

4. 遺物の実測は調査員の他、稻田和久（埋蔵文化財調査センター臨時職員）が行った。また写真は
池淵俊一、岩橋孝典、東森 晋が撮影した。

5. 発掘作業（発掘作業員雇用等）については、島根県教育委員会から中国建設弘済会へ委託して
実施した。

社団法人 中国建設弘済会島根支部 布村幹夫（現場事務所長）、吉岡勇治（技術員）、

寺田 透（技術員）、原 博明（技術員）、与倉明子（事務員）、周藤美奈子（事務員）

6. 植野浩二（奈良大学文学部助手）氏には、報告書作成にあたって有益な助言をいただいた。

7. 挿図中の方位は、国土調査法による第3座標系の軸方位である。

8. 本書に掲載した「遺跡位置図」は建設省国土地理院発行の地形図を使用した。

9. 本書で使用した遺構記号は次の通りである。

S B 堀立柱建物跡、S D 溝状遺構、S I 堆穴住居跡、S K 土壙、S R 自然流路

10. 握図の縮尺は図中に明示した。

11. 本書の執筆編集は、調査員が協議分担して行った。それぞれの分担は目次に明記した。

12. 所載遺跡の出土遺物及び実測図、写真は島根県埋蔵文化財調査センターで保管している。

目 次

第1章 調査に至る経緯	(ト部吉博)	1
第2章 位置と環境	(片山寛志)	2
第3章 柳II遺跡	(池淵俊一)	4
第1節 調査の概要と経過	4	
第2節 I区の調査	6	
第3節 II区の調査	23	
第4節 小結	44	
第4章 小久白墳墓群の調査	(岩橋孝典)	54
第1節 調査の概要と経過	54	
第2節 小久白墳墓群I区の調査	54	
第3節 小結	62	
第5章 神庭谷遺跡の調査	(福島 浩)	65
第1節 調査の概要と経過	65	
第2節 調査の成果	65	
第3節 まとめ	69	

図 版

柳II遺跡	図版 1~22
小久白墳墓群	図版23~27
神庭谷遺跡	図版28~29

挿 図 目 次

第1図	柳II遺跡・小久白墳墓群・神庭谷遺跡の位置と周辺の遺跡	2
第2図	柳II遺跡・小久白墳墓群・神庭谷遺跡周辺地形図	5
第3図	柳II遺跡調査前地形測量図	6
第4図	柳II遺跡遺構配置図・I区土層図	7~8
第5図	柳II遺跡S B01実測図	9
第6図	柳II遺跡S B02・03実測図	10
第7図	柳II遺跡S B02・03遺物出土状況図	11
第8図	柳II遺跡S B02・03出土土器実測図	12
第9図	柳II遺跡S K01~03実測図	13
第10図	柳II遺跡S K04実測図	14
第11図	柳II遺跡S K04出土土器実測図	15
第12図	柳II遺跡S K05実測図	15
第13図	柳II遺跡S K06~09実測図	16
第14図	柳II遺跡S K10・11実測図	16
第15図	柳II遺跡S D01~04実測図	17
第16図	柳II遺跡S D05実測図	18
第17図	柳II遺跡S D08実測図	18
第18図	柳II遺跡S D06・07・09実測図	19
第19図	柳II遺跡S D10実測図	19
第20図	柳II遺跡加工段状遺構1実測図	20
第21図	柳II遺跡I区土壤・溝出土土器実測図	20
第22図	柳II遺跡I区遺構外出土土器実測図	21
第23図	柳II遺跡I区出土古銭	22
第24図	柳II遺跡II区最終遺構面遺構配置図	23
第25図	柳II遺跡II区北壁土層図	24
第26図	柳II遺跡II区7層上面遺構配置図	25
第27図	柳II遺跡II区7層(暗黄褐色砂質粘土)中出土土器実測図	26
第28図	柳II遺跡S I 01実測図	26
第29図	柳II遺跡S I 01・S K14出土土器実測図	27
第30図	柳II遺跡S B 05実測図	27
第31図	柳II遺跡S B 05遺物出土状況図	28
第32図	柳II遺跡S B 05出土土器実測図	28
第33図	柳II遺跡S B 06実測図	29
第34図	柳II遺跡S B 06出土土器実測図	29

第35図 柳II遺跡S B07実測図	30
第36図 柳II遺跡S B04出土土器実測図	31
第37図 柳II遺跡S B07出土土器実測図	31
第38図 柳II遺跡S B08・09・SK15実測図	32
第39図 柳II遺跡S B08・SK15遺物出土状況図	33
第40図 柳II遺跡S B08出土土器実測図	34
第41図 柳II遺跡SK15・S B08出土土器実測図	34
第42図 柳II遺跡S B08付近土器群A・B・SK09出土土器実測図	36
第43図 柳II遺跡S B08・SK15出土玉・石器実測図	37
第44図 柳II遺跡SK12実測図	38
第45図 柳II遺跡SK14実測図	38
第46図 柳II遺跡SK13実測図	38
第47図 柳II遺跡SK13出土土器実測図	39
第48図 柳II遺跡II区ピット中出土土器実測図	40
第49図 柳II遺跡II区遺構外出出土土器実測図	41
第50図 柳II遺跡I・II区出土石器実測図	42
第51図 柳II遺跡時期別遺構配置図	44
第52図 弥生時代前期の横位納置（左）・逆位納置（右）土器棺墓	46
第53図 出雲部における弥生～古墳時代中期の掘立柱建物	48
第54図 小久白墳墓群調査前地形図	55
第55図 小久白墳墓群I区遺構配置図	56
第56図 小久白1号墓実測図	57
第57図 小久白1号墓SX01実測図	58
第58図 小久白墳墓群SX02実測図	59
第59図 小久白墳墓群SX03実測図	60
第60図 小久白墳墓群SX02上面出土遺物実測図	61
第61図 小久白墳墓群SX03上面出土遺物実測図	61
第62図 神庭谷遺跡調査区配置図	66
第63図 神庭谷遺跡遺構配置図	67
第64図 神庭谷遺跡I区包含層出土遺物実測図	68
第65図 神庭谷遺跡II区包含層出土遺物実測図	68

表 目 次

図版目次

図版1・柳II遺跡全景（西側上空から）

- ・柳II遺跡全景（真上から）

図版2・柳II遺跡調査前（西から）

- ・柳II遺跡調査後全景（西から）

- ・柳II遺跡調査後全景（東から）

図版3・柳II遺跡I区S B01（北東から）

- ・柳II遺跡I区S B02・03（北から）

- ・柳II遺跡I区S B03（北から）

図版4・柳II遺跡I区S K01（北から）

- ・柳II遺跡I区S K02（北から）

- ・柳II遺跡I区S K03（北から）

図版5・柳II遺跡I区S K04検出時（北から）

- ・柳II遺跡I区S K04底部除去時

- ・柳II遺跡I区S K04土層断面（北から）

図版6・柳II遺跡I区S K04群検出時（北から）

- ・柳II遺跡I区S K05（北から）

- ・柳II遺跡I区S K05土層断面（南西から）

図版7・柳II遺跡I区S D05（北から）

- ・柳II遺跡I区S D06（北から）

- ・柳II遺跡I区I-2・3間上層断面

（南から）

図版8・柳II遺跡II区全景（真上から）

- ・柳II遺跡II区S I01（北から）

- ・柳II遺跡II区S I01とII区土層堆積状況

（南から）

図版9・柳II遺跡II区S B07・04・05（北から）

- ・柳II遺跡II区S B05（北から）

- ・柳II遺跡II区S B05土師器出土状況

（北から）

図版10・柳II遺跡II区S B07（北から）

- ・柳II遺跡II区S B06・SK12（南西から）

- ・柳II遺跡II区S B06土層断面（南から）

図版11・柳II遺跡II区S B08・SK15（北西から）

- ・柳II遺跡II区S B08・SK15上層断面

（南から）

- ・柳II遺跡II区SK15遺物出土状況

（北西から）

図版12・柳II遺跡II区S B08勾玉・磁石出土状況

- ・柳II遺跡II区S B08・P160遺物出土状況

- ・柳II遺跡II区SK13

図版13・柳II遺跡II区SK13土層断面（西から）

- ・柳II遺跡II区SK14土層断面（西から）

- ・柳II遺跡II区北壁土層断面（南西から）

図版14・柳II遺跡I区S B03・SK04・I区遺構出土土器

図版15・柳II遺跡I区SK07・SD07・SD08・SD10・I区遺構外出土遺物

図版16・柳II遺跡II区SI01・SK14・SB05・SB06・SB07出土土器

図版17・柳II遺跡II区SK04出土土器

- ・柳II遺跡II区SK08出土土器

- ・柳II遺跡II区SK15・SB08出土土器

図版18・柳II遺跡II区SK15・SB08北西土器群出土遺物

図版19・柳II遺跡II区北西土器群・SB08・SK15出土遺物

図版20・柳II遺跡II区SK13・P81・P82出土土器

図版21・柳II遺跡II区包含層出土土器

図版22・柳II遺跡II区包含層出土土器

- ・柳II遺跡II区包含層出土石器

図版23・小久白墳墓群全景（南上空より）

- ・小久白墳墓群全景（上空より）

- ・小久白墳墓群（北西より）

図版24・小久白1号墓全景（北西より）

- ・小久白1号墓全景（南東より）

- ・小久白1号墓SKX01土層断面

図版25・小久白墳墓群SKX01（南西より）

- ・小久白墳墓群SKX01近景（北西より）

図版26・小久白墳墓群SKX02全景（東より）

- ・小久白墳墓群SKX03全景（東より）

- ・小久白墳墓群SKX03全景（北東より）

図版27・小久白墳墓群SKX02・SKX03上面出土遺物

図版28・神庭谷遺跡全景

- ・神庭谷遺跡I区近景

- ・神庭谷遺跡II区近景

図版29・神庭谷遺跡出土遺物

第1章 調査に至る経緯

昭和47年5月26日付けで、建設省松江国道工事事務所から島根県教育委員会に「国道9号バイパス」建設の基本設計資料として、鳥取県境の安来市吉佐町から松江市乃白町までの30.3kmにおける埋蔵文化財の有無について照会があった。そこで、県教育委員会では、地元教育委員会の協力を得て、昭和47年、48年に遺跡の分布調査を実施した。これらの調査結果を踏まえ、建設省からルート案が提示され、昭和48年7月には松江市東地区の予定ルートにかかる遺跡の取扱いについて協議があった。

昭和49年7月には安来地区の折坂～月坂間のルート案について協議があった。つづいて昭和50年1月22日付けで県教育委員会にて松江東地区と安来地区のうち清水～月坂間の一部について発掘調査の依頼があった。これを受けて、昭和50年7月には建設省と契約を取り交わし、昭和50～51年度にかけて、松江市竹矢町オノ岬古墳群等の発掘調査を実施した。

昭和55年度・56年度には、昭和57年に開催が決定していた「くにびき」国体の主要幹線道路となる「松江東バイパス」(以前は「米松バイパス」と呼ばれていた) 東出雲町出雲郷から松江市古志原町に至る5.4km間の7遺跡のうち2車線分を緊急に調査した。

その後「松江バイパス」は高規格道路に設計変更され「松江道路」となり、昭和60年に建設省から前回調査した7遺跡の残り4車線分の調査依頼があった。調査は昭和61年度から平成3年度まで、順次行った。

昭和61年度には安来市島田町から同赤江町に至る延長6.9kmが「安来バイパス」として事業化されたが、昭和63年度には高規格道路に計画変更され、「松江道路」につなぐ東出雲町出雲郷から安来市吉佐町間の18.7kmの「安来道路」として実施されることになった。この計画変更で、予定ルートにも変更が生じたため、昭和62年度・63年度に再度分布調査を実施した。発掘調査はまず、安来市赤江町から島田町に至る6.9km(インターチェンジ部を含む)で平成元年度から同4年度まで7遺跡(安来市宮内町宮内遺跡、佐久保町大原遺跡、同臼コクリ遺跡、同岩屋口遺跡、黒井田町越峠遺跡、同才ノ神遺跡、島田町島田南遺跡)で実施した。

さらに平成4年度からは安来市荒島町から東出雲町出雲郷に至る2-2工区(延長8.0km)を「安来道路西地区」として、平成5年度からは安来市吉佐町から島田町間の3.9kmを「安来道路東地区」として引き続き調査を行った。そのうち安来道路西地区では、平成4年度は御崎谷遺跡、土元遺跡、清水遺跡の発掘調査とトレンチ調査を実施し、平成5年度には東出雲町内の四ツ廻II遺跡、林廻り遺跡、受馬遺跡、巻林遺跡、安来市荒島町の桐の木I遺跡、桐の木II遺跡、亀尻I遺跡、亀尻II遺跡、中山遺跡、鶴賀遺跡の調査を実施し、平成6年度には東出雲町の島田池遺跡、安来市荒島町の塩津山古墳群の発掘調査を行った。

平成7年度は安来道路西地区の調査では、東出雲町で島田池遺跡、島田遺跡、岸尾遺跡、渋山池遺跡、渋山池古墳群、原ノ前遺跡、勝負遺跡、堂床古墳の発掘調査を実施し、安来市荒島町内では竹ヶ崎遺跡、柳遺跡、柳II遺跡、小久白墳墓群、神庭谷遺跡の発掘調査を実施した。

本書は平成7年度に実施した安来市柳II遺跡・小久白墳墓群・神庭谷遺跡の調査の成果である。

第2章 位置と環境

柳II遺跡・小久白墳墓群・神庭谷遺跡は、安来市の西端に位置する荒島町・久白町に所在し、遺跡が立地する丘陵上からは北方に中海や島根半島を、東方に秀峰大山を望むことができる。また、約2km東には安来平野を形成した河川の一つである飯梨川が北流している。中世以降の河川周縁部、中海沿岸部の開発などにより現在の中海の海岸線は北へ遠のいたが、古代においては遺跡の所在する丘陵縁辺部付近まで海岸線がせまっていたものと推測され、「塩津」「赤江」「荒島」等現在の地名にその名残りを見ることがある。

近年の発掘調査により、安来市吉佐町や島田町など市の東部地域においては縄文時代の遺物が確認されつつあるが⁽¹⁾、西部地域ではあまり知られていなかった。その意味で、今回柳II遺跡で縄文時代の遺物が確認されたことは当地の縄文人の活動の痕跡を窺う数少ない貴重な資料となった。

この地域が歴史上において政治的に重要な位置を占めるようになったのは弥生時代後期以降である。すなわち、弥生時代後期に四隅突出型墳丘墓として著名な仲仙寺古墳群（国指定史跡）・宮山墳墓群⁽²⁾・塩津1号墓などの出雲部を代表する墳丘墓が平野を望む丘陵上に次々と築造される。この背景には、



第1図 柳II遺跡・小久白墳墓群・神庭谷遺跡の位置と周辺の遺跡（1：7500）

- ①塩津山古墳群 ②竹ヶ崎遺跡 ③柳遺跡 ④塩津山遺跡 ⑤柳II遺跡 ⑥小久白墳墓群 ⑦神庭谷遺跡 ⑧中山遺跡
- ⑨清水山1号墳 ⑩宮山3号墳 ⑪造山1号墳 ⑫造山2号墳 ⑬造山4号墳 ⑭高塚山古墳 ⑮大成古墳 ⑯仏山古墳
- ⑰塩津1号墓 ⑱塩津神社古墳 ⑲塩津山6号墓 ⑳若塚古墳 ㉑小久白遺跡 ㉒橋松古墳群 ㉓安養寺1号墓 ㉔安養寺3号墓
- ㉕宮山4号墓 ㉖宮山3号墳 ㉗宮山1号墳 ㉘仲仙寺10号墓 ㉙仲仙寺9号墓 ㉚仲仙寺8号墓 ㉛下山墳墓

稲作を中心とする生産基盤の安定・拡大、集落の発展が推察される。平成7年度の調査で、弥生時代県内最大級規模の大集落が竹ヶ崎・柳遺跡で確認されたことは、当該期におけるこの地の発展を物語るものと言えよう。ただ、この大集落は弥生時代後期後半という時期に限定されて営まれ、古墳時代初頭に廃絶するといった極めて特異な性格をもつ集落であり、当地域ひいては出雲全体の当該期の歴史的評価を与えるために今後の検討が待たれるところである。

古墳時代前期には荒島町・久白町の丘陵上に造山1号墳（国指定史跡）・3号墳（県指定史跡）・大成古墳・塩津山1号墳など、主体部に長大な竪穴式石室をもつ大形の方墳が営まれるようになる。このような前期の大形方墳が集中する地域は全国的にみても他に類例がなく、当該期の出雲の特異性を示すものとして注目されるところである。ただ、これらの古墳の存在基盤である集落址・生産址は周辺においては確認されておらず、今後の課題として残されている。

古墳時代中期には、全長52mを測る前方後方墳である宮山1号墳・大形の方墳である清水山1号墳が知られている。⁽⁴⁾これらは現在の研究では中期中葉前後に位置づけられるものと考えられており、造山古墳群との間を埋める首長墳は現状では確認されていない。

古墳時代後期には獅噛環頭大刀を出土した仏山古墳・造山2号墳などの前方後方墳が後期でも早い段階に築かれ、後期後半には石棺式石室をもつ塩津神社古墳が営まれている。また、横穴も各所につくられ、なかでも日白横穴群は荒島石に彫り込まれた整美なものとして注目される。

奈良時代の代表的な遺跡としては8世紀後葉から9世紀前半のものとされる中山遺跡の石製骨蔵器をもつ火葬墓があげられる。⁽⁵⁾同様な火葬墓は小久白遺跡においても確認されており、古代の墓制を考えるうえで貴重な資料である。

以上、原始から古代にかけての荒島周辺の歴史を概観してきたが、弥生時代から古墳時代にかけての大規模な墳墓・古墳が築かれている荒島町の丘陵一帯は、昭和20年代からすでに学術上極めて重要な地域として認識してきた。これらの大型墳墓・古墳はかなりの勢力をもつ首長級の人物が当地を基盤に存在していたことを如実に示しており、この地域のみならず古代出雲の歴史を解明するうえでも貴重な資料である。これらの遺跡の保存・活用については一部「古代出雲王陵の丘」の整備が進められているが、全体の遺跡群を対象とした公園整備の一層の充実と今後の研究の進展が期待されるところである。

註

- (1) 島根県教育委員会 「才ノ神遺跡・普請場遺跡・島田黒谷I遺跡－一般国道9号（安来道路）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書9-」1995年
- 同 「明子谷遺跡・島田黒谷II遺跡・島田黒谷III遺跡・猫ノ谷遺跡－一般国道9号（安来道路）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書VI-」1994年
- (2) 出雲考古学研究会 「荒島墳墓群－古代出雲を考える4-」1985年
- (3) 安来市教育委員会 「安来市造山古墳群発掘調査報告書」1993年
- (4) 安来市教育委員会 「清水山古墳群発掘調査報告書」1995年
- (5) 島根県教育委員会 「中山遺跡・春林遺跡－一般国道9号（安来道路）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書西地区II-」1994年

第3章 柳 II 遺跡

第1節 調査の概要と経過

柳II遺跡は安来市荒島町字柳他に所在する。遺跡の立地は現在の中海の海岸線から約1.2km陸地にはいった標高約30~45mの丘陵上に位置する。遺跡の北側には細長い谷が東西方向に湾入しており、その谷を隔てた北側には造山古墳群・大成古墳等著名な前期古墳群が立地する丘陵が東西方向に連なっている。從って遺跡から中海側への眺望は必ずしも良好とは言えない。遺跡の約200m東には弥生時代後期後半の大集落である竹ヶ崎・柳遺跡があり、約200m西には同時期の墳墓群である小久白墳墓群が所在する。

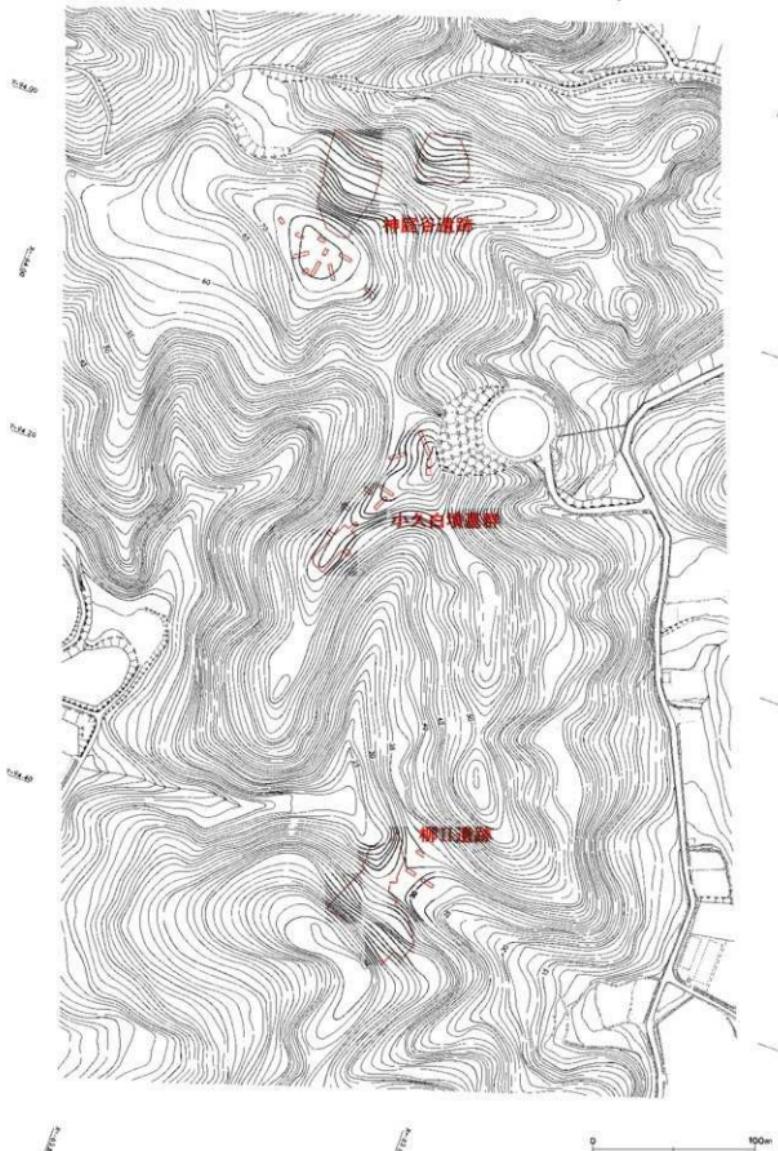
当遺跡は昭和63年度の分布調査で確認され、平成6年度の試掘調査の成果に基づき平成7年度に本調査を実施した。調査は比較的急な西側斜面をI区、小久白墳墓群に連なる丘陵の鞍部南斜面をII区として実施した。I区は重機による表土掘削を行ったのち、9月19日より本調査を開始した。I区では掘り下げたのち順次遺構の精査を行い、弥生時代前期の土器棺墓、弥生時代後期末の住居址、古代の道状遺構、土壙、溝などを検出し、12月5日に調査を終了した。

II区はI区の本調査と平行して重機による表土掘削を実施し、11月21日より本調査を開始した。II区は表土下に一見地山に見間違える黄褐色砂質土が分厚く堆積し、その上面に僅かながら溝等の遺構が存在していた。これらの遺構の調査を終了したのち、部分的に断ち割り調査を行ったところ約2.5m下から古墳時代中期の包含層を確認した。よって12月11日に重機によりこの黄褐色砂質土を除去し、包含層及びその下の遺構面の精査を行い、古墳時代中期の竪穴住居跡1棟、掘立柱建物跡5棟以上、土壙3基、溝等を検出した。なかでもS B08からは勾玉未成品や珪化木製の砥石、河原石製のハンマー等玉作関係と思われる資料を検出した。またS B08・SK15やその周辺からは古式須恵器を含む括資料が出土した。

II区の調査は、大雪などの天候不順により難航したが、12月21日空撮を実施し、一旦中断したのち年明けより調査を再開、1月17日に全ての調査を終了した。



柳 II 遺跡 調査 風景



第2図 柳II遺跡・小久白墳墓群・神庭谷遺跡周辺地形図 ($S = 1/3000$)

第2節 I 区の調査

I 区は竹ヶ崎遺跡・柳遺跡から続く丘陵の西側斜面に位置している。標高40m～45mの丘陵上側は比較的急峻な斜面だが、標高40mを境にやや緩やかとなり、II区との境界の丘陵鞍部付近はなだらかな平坦地をなしている。調査前は山林であったが、部分的にはかなり人為的な削平をうけた跡がかなり認められた。

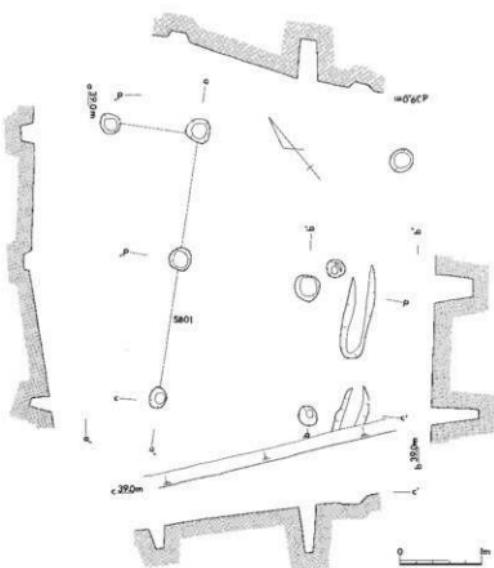
調査は東西に任意のベルトを2本設定し、南からI-1区～I-3区を設定し、東側から西側へ向けて調査を実施した。遺構・遺物はI-1・2区に集中しており、I-3区の西側緩斜面にも若干存在する。調査区最高所付近では弥生時代前期の土器棺墓を含む土壙群5基を検出した。I-3区は大



第3図 柳II遺跡調査前地形測量図 ($S = 1/600$)



第4図 柳II遺跡遺構配置図・I区土層図(平面図S=1/300、土層図S=1/120)



第5図 柳II遺跡S B01実測図 (S = 1/60)

建物跡の他壁体溝の可能性のある溝を検出した。

建物は区画の溝を伴わないので、桁行2間、梁間1間分を検出した。桁行の柱穴間距離は1.6mと1.7m、梁間の柱穴間距離は1.1mを測る。梁間は南側では確認できていない。

柱穴は径25~30cmの不整円形のもので、深さは10~28cmと深いものである。柱痕等は確認されていない。

このほか、掘立柱建物の壁帶溝の可能性のある溝を先に述べたS B01の東側で検出した。溝は既にかなりの部分が削平されており、また南側は調査区外へ延びているため本来の規模は不明だが、現存する部分で長さ2.1m、幅0.4m、深さ約10cmを測る。この溝に沿うようなかたちで2基の柱穴を確認したが、その他この溝に伴うと考えられる柱穴は確認できなかった。

遺物は付近から弥生土器・土師器の細片が若干出土しているが、確実に伴うものはなく、建物の年代は不明である。

S B02・03(第6図)

I-2区西側で検出した、掘立柱建物跡である。両者とも斜面をL字状にカットして平坦面を作り出し、床面レベルをほぼ同一にして切り合っている。プラン上の観察からS B02→S B03の順で建てられたものと考えられる。

S B02は現存する規模で長さ約3.5m、幅0.7m、壁高0.2mを測る。床面は水平でなく、西側へ向かってゆるく傾斜しており、壁沿いの溝は認められない。平坦面中央部から西側に向かっては2.8m、幅0.5m、深さ14cmの溝が取り付いているが性格は不明。ピットは3基検出したが不規則な並びを呈し、建

規模な地滑りが生じたらしく、東側は表土が極めて薄く、斜面下方の西側にいくにつれ軟質の明橙色砂質土が分厚く堆積する様相を呈している。この明橙色砂質土中からは中近世の土師質土器・明鏡が出土しており、地滑りの時期を示すものと考えられる。

I-2・3間のベルトでは、この砂質土の下層に弥生後期土器を含む暗黒褐色粘土が認められ、その下に間層を挟んで地山面に達している。以下、住居址、土壤、溝の順に報告する。

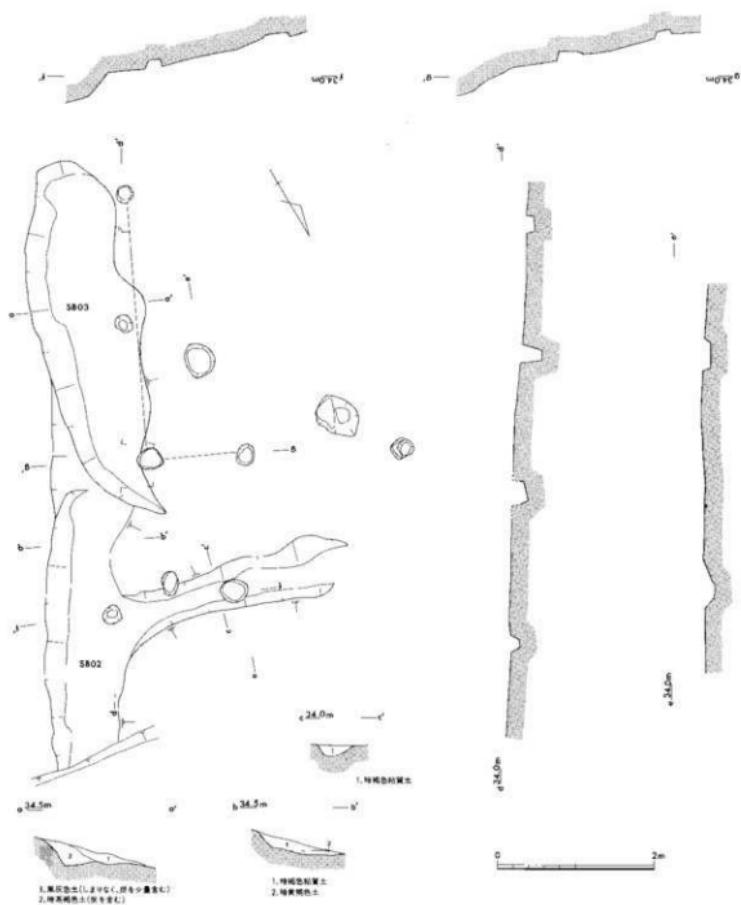
(1) 掘立柱建物跡

S B01(第5図)

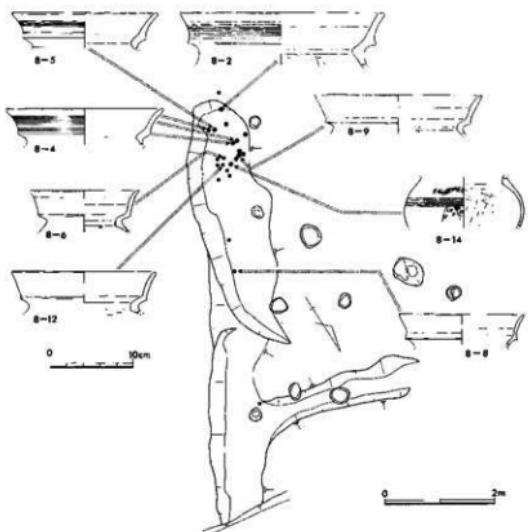
I-1区南側のやや緩斜面に位置するところで検出した掘立柱建物跡で、南半は調査区外へひろがっている。後世の削平により不明瞭な部分が多いが、

物跡として復元できるものではない。遺物は覆土中より弥生土器片が若干出土している。細片のため図化していないが、S B03出土のものとほぼ同時期のものである。

S B03はS B02の南に位置し、地山を掘り込み加工段を整形している。現存する加工段の規模は、長さ4.7m、幅約0.8m、高さ約0.3mを測るが、斜面下方は既に流出しており現存せず、壁沿いの溝も認められない。平坦面上に平行2間分の柱穴を確認した。柱穴間距離は北から1.8m、1.7mを測る。梁間は北側で一間分検出したが、南側では確認できていない。覆土は黒灰色土、暗茶褐色土の2層からなる。このように、S B02・03は加工段は存在するものの柱穴の並びが明確でなく、S B01と同様に建物の構造は極めて簡易な掘立柱建物跡であったと推察される。



第6図 柳II遺跡S B02・03実測図 (S = 1/60)



第7図 柳II遺跡S B 02・03遺物出土状況図
(遺構S = 1/90、遺物S = 1/6)

遺物は主として南側から集中して検出されたが、殆どが1層中からの出土である(第7図)。遺物は弥生時代後期後半の土器のであり、図化し得た資料は壺のみである。草田編年の3期のものと4期のものが出土しているが、両者は出土地点・層位とも混在する様相を呈し、明確には区別できない状況であった。

S B 03出土土器(第8図)

前述のとおり出土遺物で図化できた資料は壺のみである。壺は形態から擬凹線の残存する第8図1~5と擬凹線が消失する6~12に分けられる。

1はやや小形の壺の口縁で、復元口径12.2cmをはかる。口縁

端部は若干肥厚して丸味を帯びる。沈線は風化により判然としないが、現状では5~6条認められる。2は復元口径25.0cmを測る壺で、1と同様端部はやや肥厚している。口縁部には貝殻腹縁による擬凹線を施したのち、端部付近を一部ナデ消している可能性がある。口縁部段部は斜下方向へやや突出する。頸部以下の内面には半時計回り方向のヘラケズリを施す。

3は口縁がやや直立気味の壺で、口縁部端部はよく肥厚し上面に若干の平坦面をもち、そこに1条の浅い沈線を施している。口縁部外面には浅い沈線を施しているが、上方は風化の為確認できないが、ナデ消している可能性も考えられる。口縁部段部は明瞭に斜下方向に突出している。内面頸部以下は反時計回りの横ヘラケズリを施す。

4と5は同一個体の可能性がある資料で、大きく外反し端部は肥厚せず若干先細り状となり丸く收める。口縁部段部は突出せず屈曲するのみである。外面には浅い擬凹線を施す。

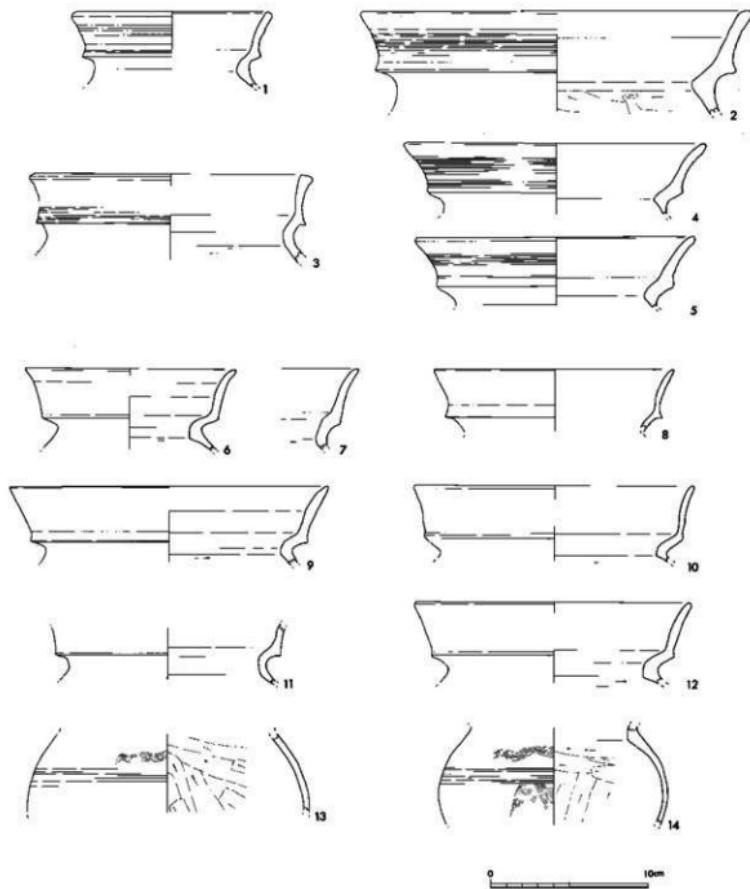
6は口径13.4cmの小形の壺で器壁はやや薄く、口縁部は引き出したように緩やかに外半し口縁端部は先細り状に収める。口縁部外面はヨコナデ、頸部内面以下は横方向のヘラケズリを施す。8も6と同様薄手の壺で、復元口径15.2cmをはかる。口縁部段部は若干斜下方向に鋭く突出する。口縁部内外面はヨコナデ調整。

9は淡黄褐色を呈する薄手の壺で、口縁部は6~8のようなカーブを描かず、やや直線的に外反し、口縁部端部は先細り状に収める。口縁部段部の突出は明瞭でないがやや横方向を指向している。10、12も9と同様な資料であるが、口縁部段部の突出は横方向となっている。頸部内面には10は反時計方向、12は時計方向にヘラケズリを施す。

11も口縁部上半を欠損しているが9と同様なタイプであると考えられる。13・14は壺胴部の資料で

ある。13・14とも肩部には上に不規則な櫛描波状文、下に櫛描直線文を施す。両者とも最大径は胴部中位よりやや上の部分に位置する。内面には胴部下半が縦方向のヘラケズリ、上半部に反時計回りの横方向ヘラケズリを施す。

既に述べたように、これらの土器群は草田編年の3～4期に相当し、1～5は草田3期に対応し、6～14は草田4期に対応する資料であると考えられる。1～5は口縁部外面の沈線が浅く不明瞭になり、一部ナデ消しているようにみえる資料(2・3)が存在する点や、口縁端部が肥厚せず先細り状に收め、口縁部段部が突出せず不明瞭な段となる資料(4・5)がある点などから草田3期の中でも4期により近い段階の資料であると考えられる。S B02・S B03はこの時期に營まれたものであるとして大過ないと思われる。



第8図 柳II遺跡SB02・03出土土器実測図 (1 SB02、2～14 SB03) (S = 1 / 3)

(2) 土 塚

S K01 (第9図)

S K01~03はI-1区の南東部の調査区最高所付近で検出した土塚群である。S K01は不整椭円形の土塚で、長径1.8m、短径0.8~1.0m、深さは上方から0.5mを測る。

土塚内には上層から暗褐色土、暗黃褐色土の順に堆積しており、ともに炭を若干含んでいる。

遺物は出土しておらず、時期、性格とともに不明である。

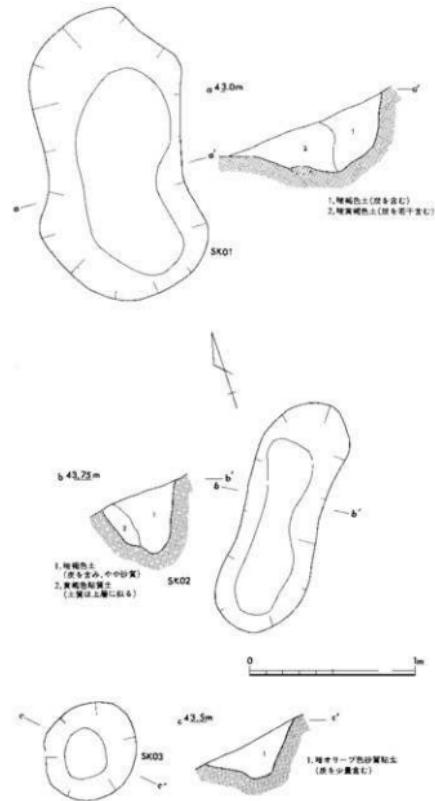
S K02 (第9図)

S K01の約1m南で検出した、S K01とよく似た平面長椭円形の土塚である。長径1.5m、短径0.45~0.5m、深さは上方から計測して0.45mを測る。埋土もS K01とよく似た土層で、上層から暗褐色土、黄褐色粘質土の順に堆積している。

S K01と同様遺物は出土しておらず、時期・性格ともに不明である。

S K03 (第9図)

S K02の南西約1mに位置する土塚で、S K01・S K02とは異なり、平面ほぼ円形プランの小形の土塚である。土塚の規模は長径0.6m、短径0.55m、深さは上方から計測して0.35mを測り、すり鉢状の底面を呈する。埋土は



第9図 柳II遺跡SK01~03実測図 (S = 1/30)

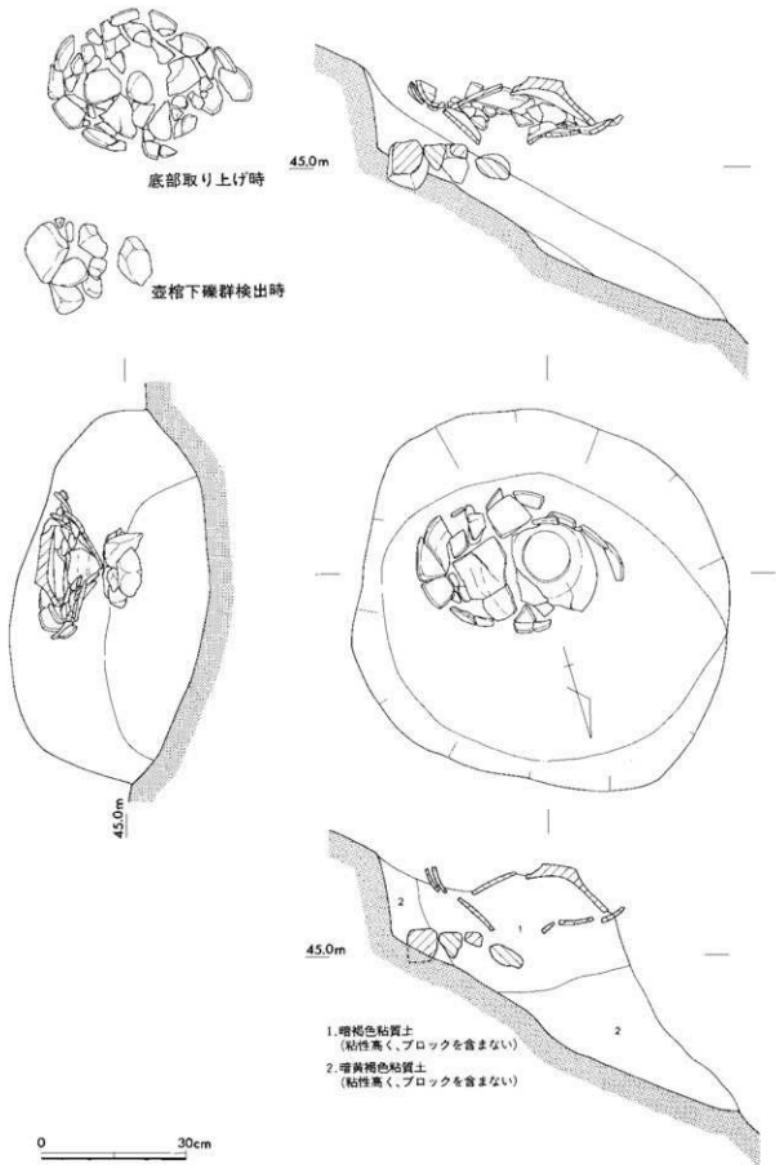
单一の暗オーリーブ色砂質粘土が堆積している。遺物は出土しておらず、時期・性格ともに不明。

以上、S K01~S K03からは遺物は出土しておらず時期・性格ともに不明と言わざるをえないが、後述する弥生時代前期の土器棺墓であるS K04とほぼ同一レベルに展開する土塚群であり、同時期の墓塚であった可能性も考慮される。

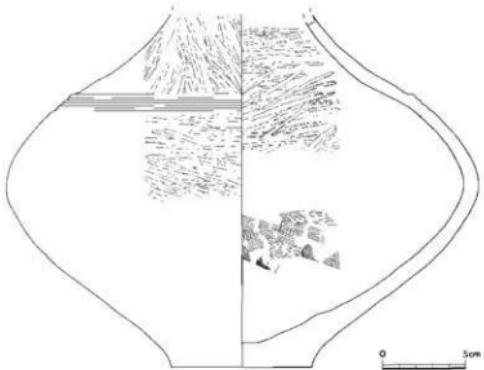
S K04 (第10図)

I-1区北東部の調査区最高所で検出した弥生時代前期の壺棺墓である。比較的急な斜面に墓塚を掘り込み、棺に転用した壺を埋置している。墓塚の掘り方は平面不整円形を呈し、墓塚検出時に上部を削平したため正確な規模は不明だが、現状で径0.75m、深さは上方で残存高0.18mを測る。

床面は水平でなく、かなりの角度で西側へ傾斜している。棺に使用された壺棺は口縁部を打ち欠き、倒立したものが上方からの土圧により押し潰された状況で検出された。壺棺の下には径20cm以下の躰が9個体まとまって検出された。これらの躰群は壺棺の縁部の直下ではなく、やや上方によっている



第10図 柳II遺跡 S K04実測図 ($S = 1/10$)



第11図 柳II遺跡 S K04出土土器実測図 ($S = 1/3$)

立させて礫群直上に設置する、⑤墓壙全体を埋め戻す、といった順序が想定される。

遺物は棺内からは一切出土しておらず、棺に転用した壺形土器のみである(第11図)。壺は口縁部を欠損しているが、残存部器高21.7cm、胴部最大径28.6cmを測る。器形はしっかりした平底を呈し、胴部は偏平に強く張り頸部が強く内傾するものである。口縁部は不明だが、恐らく短く外反するタイプのものだと考えられる。胴部と頸部の境界は比較的明確な段状を呈し、胴部境界側に3条の比較的太くはっきりしたヘラ描直線文を配す。

調整は外面が胴部が横方向、頸部が縦方向のヘラミガキ、内面が胴部上半以上は横・斜方向のヘラミガキ、胴部下半部には一部横ハケが残存する。胎土はやや大形の砂粒を多く含む前期に通有のものである。以上の特徴から出雲・隱岐編年のI-3様式前後に対応するものと考えられる。⁽²⁾

S K05 (第12図)

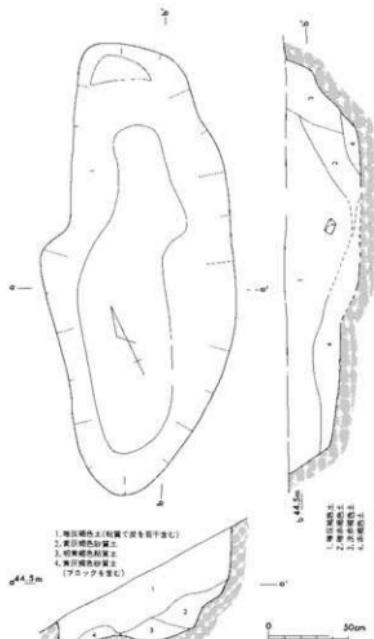
I-2区の東端で検出した土壙で、S K04の北約4mの標高約45mの急斜面上に位置する。

丘陵斜面に直交するような形に長楕円形の土壙を掘り込んでおり、規模は長径約2.9m、短径1.2m、深さは斜面上方で0.48mを測る。床面はほぼ水平だが、南側がやや高くなっている。土壙内には灰褐色系の土が充填しており、4層に分層できるが木棺の痕跡等は検出できなかった。

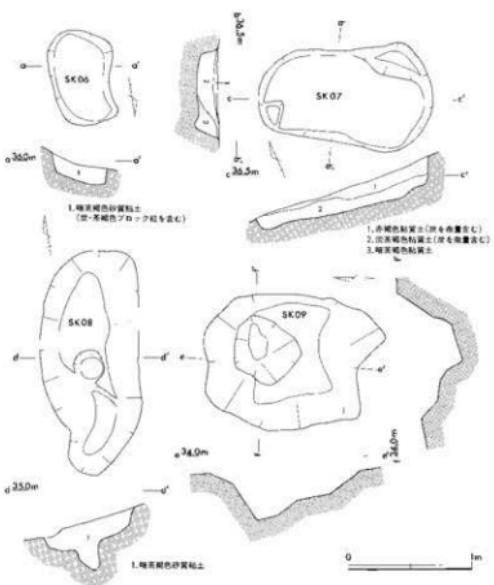
状況でみつかっている。これらの点から元来壺棺は礫群の直上に設置されたものが土圧により、斜面下方へやすやすれたものと推測される。

墓壙内埋土は暗褐色粘質土、暗黄褐色粘質土の2層に分層でき、このうち下層の暗黄褐色粘質土は本来壺棺設置の際の置土であると想定される。

以上の点から壺棺の埋葬工程を復元すると、①墓壙を掘り込む、②若干置土を施し礫群を墓壙底面に設置する、③壺棺の形状に合わせ墓壙内に置土を行う、④口縁部を打ち欠いた壺棺を倒



第12図 柳II遺跡 S K05実測図 ($S = 1/30$)



第13図 柳II遺跡SK 06~09実測図 (S = 1 / 40)



第14図 柳II遺跡SK 10・11
実測図 (S = 1 / 40)

遺物は全く出土しておらず、時期・性格とも不明と言わざるをえないが、先のSK 04に隣接していること、長楕円形のプラン等からみて、同時期の土壙墓もしくは木棺墓であった可能性がある。

S K 06 (第13図)

I-1区中央北側で検出した土壙で標高約36mの緩斜面上に位置する。

土壙はプラン不整楕円形状を呈し、規模は長径0.8m、短径0.45~0.52m、深さ12cmを測る。遺物は出土しておらず、時期・性格とも不明である。

S K 07 (第13図)

I-2区中央北側で検出した平面長楕円形の土壙で、主軸を丘陵斜面に沿うような形で土壙を掘り込んでいる。土壙の規模は長径1.4m、短径0.75~0.9m、深さ約0.2mを測る。底面は西側に傾斜しており、北東隅と南西隅に掘り込みがある。埋土は茶褐色系の粘質土が3層に分かれて堆積している。

遺物は須恵器甕の肩部片が1点出土している(第21図1)。肩がよく張る器形のもので、色調は淡灰色で調整は外面平行タタキ、内面には同心円当具痕が認められる。年代について明言できないが6~7世紀代のものであろうか。

S K 08 (第13図)

I-2区で検出した土壙で、SB 03の東約2mのところに位置する。平面不整長楕円形の土壙で、長径1.8m、短径0.8m、深さ約16cmを測る。土壙中央には径約25cm、深さ20cmのピットが掘り込まれている。遺物は出土していない。

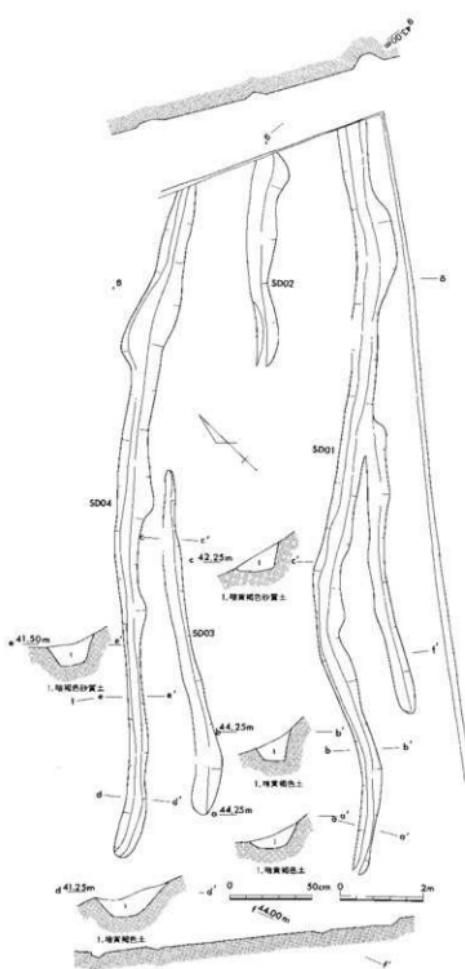
S K 09 (第13図)

S B 02の北に隣接する位置で検出した、平面不整楕円形の土壙である。土壙の規模は長径約1.4m、短径1.1m、深さ38cmを測る。底面は不規則な2段掘り状を呈している。

S K 10 (第14図)

I-2区のII区との境界付近で検出した土壙である。土壙は平面長楕円形で、長径1.3m、短径約0.5mの浅い土壙である。埋土は炭を含む暗褐色砂質粘土1層のみで、遺物は出土していない。

S K 11 (第14図)



第15図 柳II遺跡 S D01~04実測図

(平面図S = 1/120、土層図S = 1/30)

まれた、長さ16.6m、幅およそ0.3~1.1m、深さ0.3~0.4m前後の細長い溝で、北側は調査区外へ続いている。

S D01~04はいずれも等高線に沿って平行するように営まれており、いずれも掘り込み面が浅い点、溝内に砂質土が堆積している点が共通していることから近い時期に作られたものであると考えられる。機能も用排水ではなく、地割り等区画の為のものであったと想定される。時期については遺物が出土しておらず明言できないが、これらの溝が地滑り以後に作られたものである点、地滑り時と思われる

S K10の北約1mに位置する土壙である。平面長楕円形で、S K10と同様主軸を北西-南東方向へ向けている。

土壙の規模は長径約1.2m、短径0.5mを測る。遺物は出土しておらず、時期・性格とともに不明。

(3) 溝

S D01 (第15図)

I-3区東側で検出した溝状造構で、表土直下のごく浅い面で検出した。北側は調査区外へ続いている。

溝は丘陵急斜面に直交し標高44~45mの等高線沿いに走っており、中央部で二又に分かれている。規模は長さ18.5m、幅約0.2~0.5m、深さ20cm前後を測り、溝内には黄褐色系の砂質土が充填していた。遺物は出土していない。

S D02 (第15図)

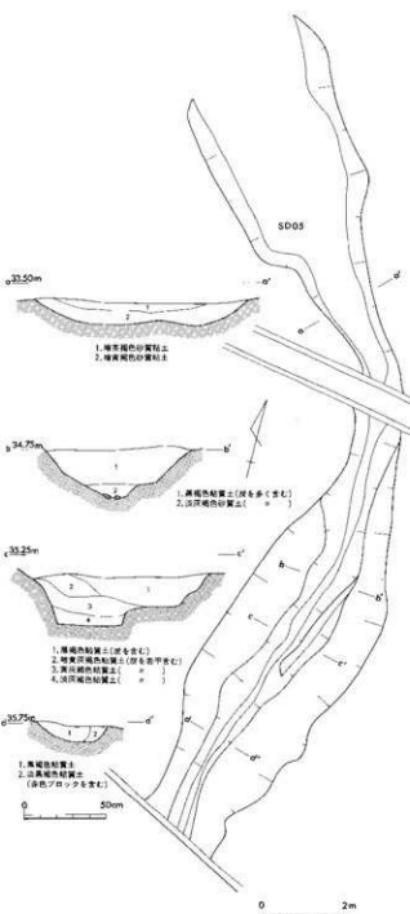
S D01の約2m西で検出した溝で、北側は調査区外へ続いている。長さ5.3m、幅0.6~0.7mを測る。遺物は出土していない。

S D03 (第15図)

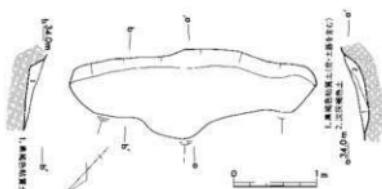
S D01の約3m西の丘陵下方で検出した加工段状の溝で、標高約42.5mの等高線沿いに走っている。長さ8.5m、幅0.3~0.6m、深さ約20cmを測る。

S D04 (第15図)

S D03西に隣接し平行するように営



第16図 柳II遺跡 S D05実測図
(平面図S = 1/120、土層図S = 1/30)



第17図 柳II遺跡 S D08実測図 (S = 1/60)

土層から中近世の土師質土器や明鏡が出土していることから、それ以後の時期の所産のものであると言える。

S D05 (第16図)

I - 1区で検出した溝で、南側は調査区外へ続いている。丘陵斜面を横切るように北流し、一旦狭まった後 I - 2・3区境界で流路を北西に変え、幅を広げながら消滅する。溝の規模は広い箇所で3.5mを測る。埋土は炭を含む黒褐色・灰褐色系の粘質土・砂質粘土が堆積している。遺物は須恵器が若干出土しているが、細片であり年代を確定できない。

この溝は S D06・07とほぼ平行するような形で走っており、後述するように S D06・07が道状の遺構であるならば、丘陵斜面上側からの雨水を防ぐ排水機能を果たしていた施設であった可能性も考えられる。

S D06 (第18図)

I - 1区西側で検出した溝で S D05の約4m西に位置する。連続ピット状もしくは階段状をなす溝で、後世の削平を受けているが、現状での規模は長さ3.3m、幅約0.5mを測る。溝内の暗黒褐色土中には拳大程度の礫が若干認められたが、溝内床面一面に礫を敷くような状況ではない。

このように S D06はやや規模は小さいものの、近年県内各所で検出されている古道状遺構に類似していることから、そうした性格のものであった可能性が考えられる。

S D07 (第18図)

S D06の北約9mに位置する連続ピット状の遺構で、南北方向に主軸をとり、北側ではやや北西方向へ屈曲している。遺構は南側は地山、北側は地滑りで堆積した黄褐色砂質土に掘り込まれている。

溝の規模は、長さ5.7m、幅はおよそ0.5m前後である。溝内のピットは径30~40cmで深いものである。溝底面には礫を敷いた痕跡は認められない。

このS D07はS D06と類似し、やや距離は離れているものの、本来は同一の溝であったと想定され、やはり道状の機能を果たしていた可能性が高く、恐らく柳遺跡側と小久白墳墓群の間の丘陵鞍部を南北に横切る施設であったと推測される。

溝内からは須恵器片が若干出土している。第21図2は壊蓋と考えられるもので、復元口径17.4cmを測る。色調は灰色を呈し、口端端部は短く痕跡的に屈曲するもので、高広IV B期に対応するものであろう。よってこの道状遺構は8世紀末前後の時期のものと考えられる。

S D08 (第17図)

I-1区西側で検出した遺構で、溝よりもむしろ加工段状の遺構である。西側を削平されているが、現状での規模は長さ2.9m、幅0.7~1.1m、深さおよそ20cmを測る。埋土は土師器片を含む黒褐色粘質土・淡灰褐色土の順で堆積している。

遺物は1層中より土師器が若干出土している。第21図3は壊の口縁部で、やや内湾する形態のものである。4は高壺の壊部で、椀状の壊部をなし外面に一部横ハケが観察される。これらの遺物からこの遺構の年代は古墳時代中期後半と考えられる。

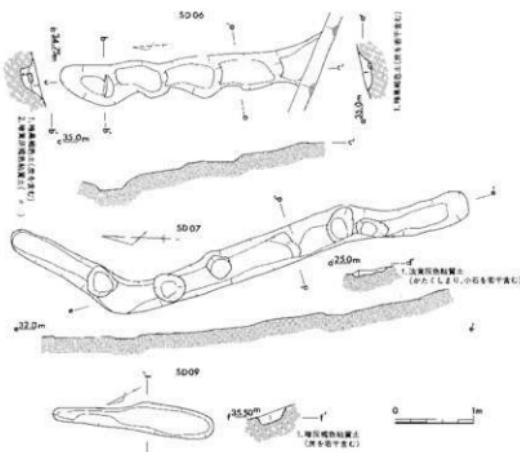
S D09 (第18図)

I-1区で検出した溝でS D05の西に隣接する。長さ2.0m、幅0.4m、深さ約15cmを測る。遺物は出土しておらず、性格・時期とも不明である。

S D10 (第19図)

I-2区の北側に位置する溝で、SK07の東に隣接する。プランは不整な弧状を呈し、長さ4.1m、最大幅1.2m、深さ約0.5mを測る。溝断面は不規則な2段掘り状となり、埋土は暗茶褐色・暗黄褐色粘質土が充填している。

遺物は須恵器・土師器が若干出土しているが図化できたのは1点のみである。第21図5は須恵器の

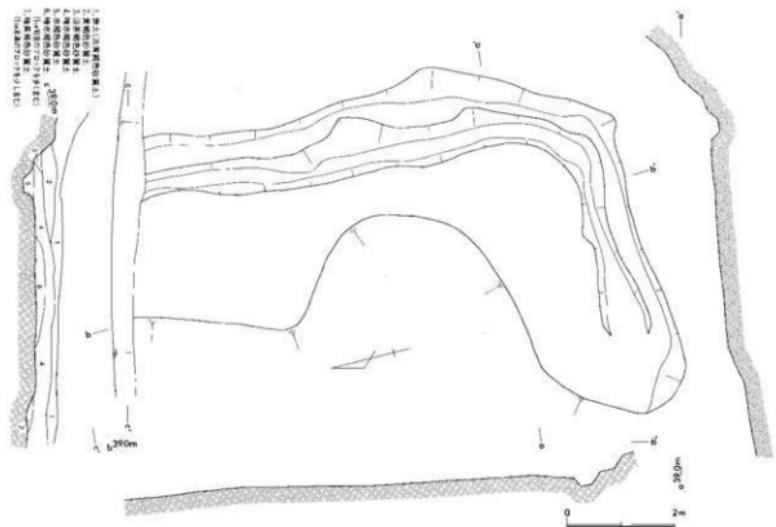


第18図 柳II遺跡 S D06・07・09実測図 (S = 1/60)



第19図 柳II遺跡 S D10実測図 (S = 1/60)

I-2区で検出した溝で、SK07の東に隣接する。プランは不整な弧状を呈し、長さ4.1m、最大幅1.2m、深さ約0.5mを測る。溝断面は不規則な2段掘り状となり、埋土は暗茶褐色・暗黄褐色粘質土が充填している。



第20図 柳II遺跡加工段状遺構1実測図 ($S = 1/90$)

壺底部で底径7.2cmを測る。平底を呈し、底部付近外周は回転ヘラケズリを施す。6世紀後半～7世紀代のものであろうか。遺構の性格については不明である。

加工段状遺構1（第20図）

I-1区の調査区北端で検出した遺構で、北側は調査区外へ続いている。加工段の規模は南北9.9m以上、東西5.9m、深さ約0.5mを測る。壁際には「コ」字状に幅40～70

cm、深さおよそ20cmの溝が巡っている。テラス上にはピット・焼土面等は存在しない。

遺物は出土しておらず、時期・性格とも不明と言わざるをえないが、遺構検出面が極めて浅い点、埋土の土質等が近接するS D01～04と類似しており、これらと同様比較的新しい時期のものであると考えられる。

I区遺構外出土遺物（第22図）

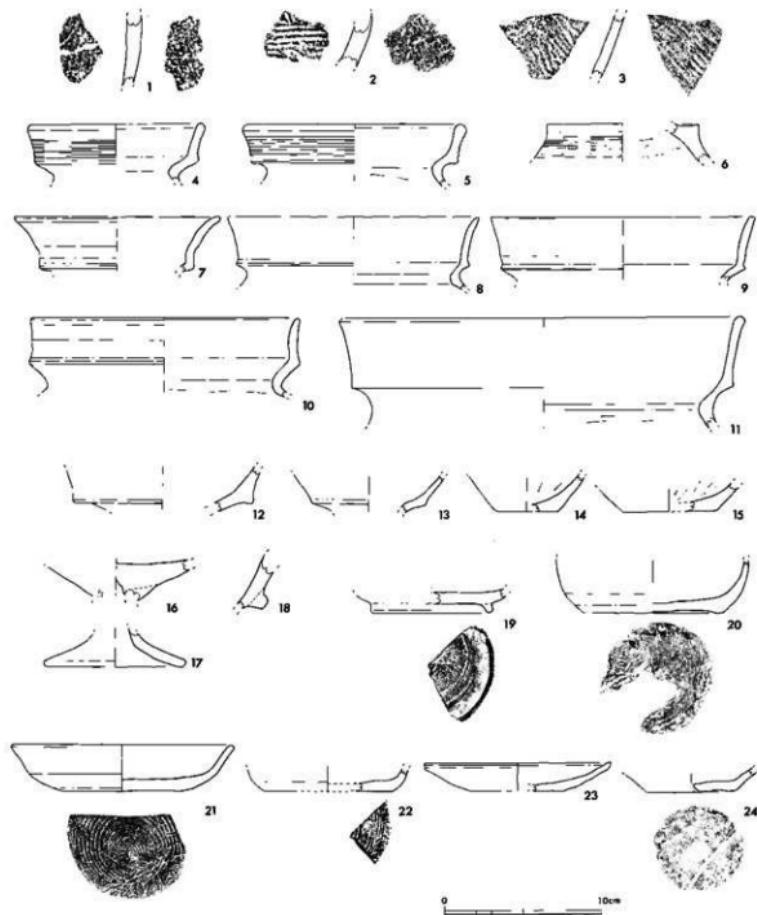
縄文土器（1～3）

第22図1～3は縄文土器で、いずれもI-1区西側の表土中からの出土である。1は繊維土器で、内外面とも風化が著しいがLRの縄文がかすかに観察される。器壁は厚さ10mmを測り、断面及び器壁に繊維の痕跡が観察される。2も繊維土器の胴部片で、外面は風化が著しいがかすかに縄文地がみら

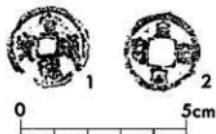
れ、内面は二枚貝条痕調整を施す。器壁は11mm前後で断面に纖維の痕跡が認められる。小片のため位置づけは困難だが、日脚分類のII類に対応するものであろうか。3はやや薄手の内外面条痕地の土器で纖維の混入は認められない。前期前半のものであろう。

弥生土器（4～15）

4～15は弥生土器で1～2区のS B02・03周辺で出土したものが大半である。4は口径10.9cmの小形の壺で、口縁部はやや直立気味に外反し口縁端部は厚く肥厚する。口縁外面には5条の擬凹線を施す。6は鼓形器台の脚部で脚部外面には細い擬凹線が巡る。4～6は従来の九重式段階のものであろう。



第22図 柳II遺跡I区遺構外出土土器実測図（S = 1／3）



第23図 柳II遺跡I区出土古銭
(S = 2 / 3)

7はI-1区で出土した口径13.0cmの壺の口縁部で、口縁部段部は突出せず緩やかにカーブを描いて大きく外反する。8は薄手の壺で口縁部は緩やかに外反し、端部は先細り状に收める。7・8は草田4期に対応する資料と考えられる。9も口径16.8cmの壺口縁部で口縁部段部はやや横方向に突出する。口縁部は直線的に立ち上がり、端部は丸味を帯びた平坦面をなし、7・8より若干新しい様相をもつ。10は直立気味に外反しつつ立ち上がり、口縁部端部を外側へ引き出すように收める。草田4期のものであろう。11は小片のため不正確だが、やや大形の壺になるとと思われる。口縁部は緩やかに外反し、端部はやや厚くつくり丸く收める。風化の為内外面の調整は不明。口縁部外面の沈線は認められないものの、つくりから草田3期併行の資料と考えられる。12・13は鼓形器台であるが風化が著しく、正確な天地は不明。

14・15は弥生土器の底部である。両者とも平底で、底部と胴部下半部との境界はやや甘い。内面は縦方向のヘラケズリが観察される。7~11に伴うものであろう。18は山陰型楕円形土器の突蒂部と思われるが、小片のため確定できない。

土師器 (16・17)

16・17は古墳時代中期の高坏である。16は坏部と脚部の接合部で、坏部と脚部は別造りで接合部に粘土紐を巻き付けてある。

須恵器 (19~22)

19は高台付坏で、底部に糸切り痕は認められない。高広ⅢB~ⅣA期のものであろう。20は赤焼きの須恵器坏である。体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部は欠損しているが軽くくびれるタイプと思われる。底部には回転糸切り痕が認められ、高広ⅣA期のものと思われる。21は口径14.2cmを測る須恵器坏で、色調は灰褐色を呈す。器高が低く口縁部がやや外反気味に立ち上がり、底部には回転糸切り痕が認められる。高広ⅣB期のものであろう。22も須恵器坏の小片で、回転糸切り痕が観察される。同時期のものであろう。

土師質土器 (23・24)

23は口径11.8cmをはかる土師質土器で口縁端部に1状の沈線を巡らす。24はI-3区で出土した土師質土器の底部で、底部中央に焼成後穿孔が認められる。

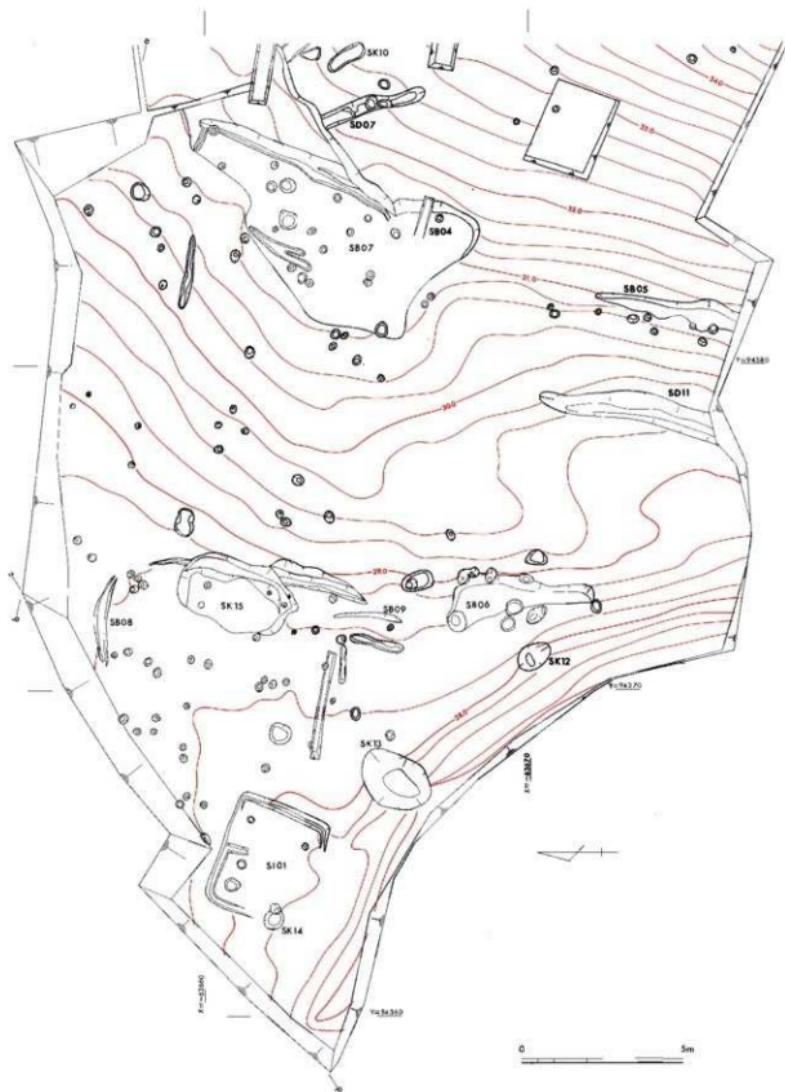
古銭 (第23図)

I-3区から2点出土している。両者とも鋳化が著しいが、第23図1は明銭「宣徳通宝」(初鋳1433年)で、県内では富田川河床遺跡で出土している。⁵⁾

2も鋳化が著しいが、北宋銭「皇宋通宝」(初鋳1038年)と思われる。字体は隸書体である。これらは第22図23・24の土師質土器に伴うものであろうと考えられる。

第3節 II 区の調査

II区はI区の西側に隣接する丘陵鞍部の南側緩斜面に位置する。このII区においては、当初後述する7層（暗黄褐色砂質粘土）上面を遺構面として調査を実施し、溝、ピット等を検出した後、約3m



第24図 柳II遺跡II区最終遺構面遺構配置図 (S = 1/150)

弱下の地山面まで掘り下げ、古墳時代中期の堅穴住居址1、掘立柱建物跡6棟以上、溝、土壙、ピット群等を検出した。

基本層序（第25図）

前述のとおり、この調査区には非常に厚く土砂が堆積しており、表土から最終遺構面である地山面までは深いところで3m以上に達する。

表土下には約50~100cmの赤橙色粘質土（2層）が堆積しており、その下に暗黒褐色粘質土（3~5層）が約20cm程認められ、ここからは土器類等若干の遺物が出土している。この暗黒褐色粘質土の下には赤橙色ないしは暗黄褐色砂質粘土（6~7層）が分厚く堆積しており、厚いところでは1.5m以上を測る。この層は一見地山と見間違える程、固くしまった土層であるが、わずかに炭や須恵器片を含んでいる。この下に遺物を若干含む砂質粘土層（8~10層）をはさみ、厚さ30cm弱の暗黒茶褐色粘質土が広がっており、ここから古墳時代中期の遺物が多く出土している。遺構面はこの包含層下に存在する。

分厚く堆積している赤橙色・暗黄褐色砂質土は極めて均質な土層であり、おそらく地滑り・出水等により短期間に形成されたものであると推測される。

7層上面の遺構・遺物（第26図）

II区北東部に分布する暗黄褐色砂質土上面からは溝・ピット等を検出した。またI区で報告したS

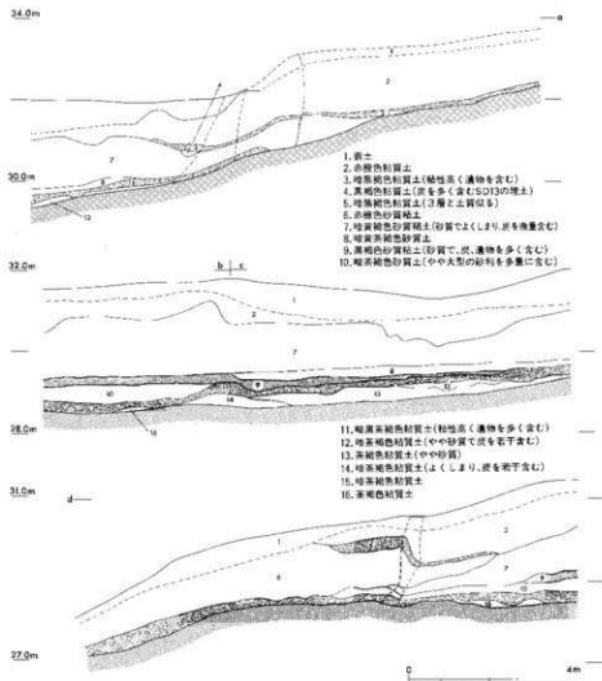
D07の一部もこの土層を掘り込んでつくられている。以下、個々の遺構についてその概略を述べる。

S D12（第26図）

S D07の北端付近で検出した溝で、一部S D14と接する。現存部の規模は2.2m、幅30~60cm、深さ約10cmを測る。溝内には暗茶褐色砂質粘土が堆積しており、遺物は出土していない。

S D13（第26図）

II区北東部隅で検出した溝で、南東から北西へ流れ、両端とも調査区外へ続いている。検出部分での規模は、長さ約4.9m、幅30~70cm、深さ約15cmを測る。遺物は出土していない。



第25図 柳II遺跡II区北壁土層図 (S = 1/120)

S D14 (第26図)

S D12に隣接する形で検出した溝で、S D12とほぼ直交するよう東西に軸をとる。規模は長さ約1.4m、幅およそ50cm、深さ10cmを測る。遺物は出土していない。その他この遺構面からはP72、P77～79が掘り込まれていた。

S D12～14のベース面となる暗黄褐色砂質粘土（7層）中からは若干であるが須恵器が出土している（第27図）。1～3とも須恵器壺の詫部で、外面平行タタキ、内面に同心円当具痕が認められる。またこの面を一部ベースとするS D07からは8世紀末の坏蓋片が出土していることからみて、S D12～14はそれ以降につくられたものと考えられる。

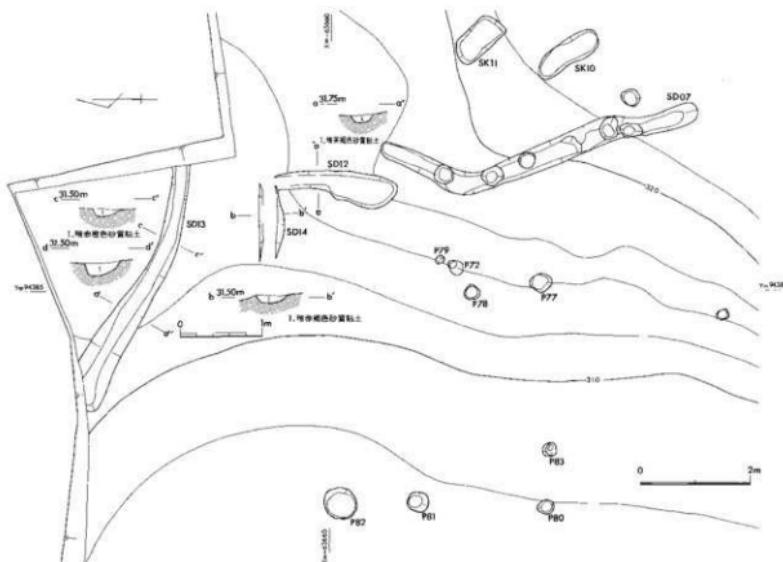
最終遺構面の遺構・遺物（第24図）

前述のとおり、最終遺構面である地山面からは5世紀後半の集落址を検出した。掘立柱建物跡の分布は上下2段に分かれており、31.0mの等高線付近にS B04、05、07が位置し、28.5mの等高線沿いにS B06、08、09、S K15が存在する。そして調査区西端の谷底付近にはS I01とS K13が位置している。以下、各遺構、遺物の概要について述べる。

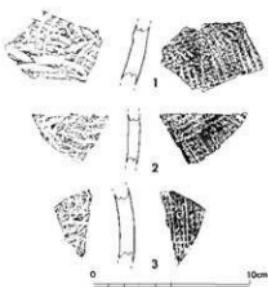
(1) 壁穴住居跡・掘立柱建物跡

S I01 (第28図)

調査区西端の、標高28.0m付近の調査区内で最も標高の低い部分で検出した方形の壁穴住居跡である。南西部の壁は流失し残存しない。規模は東西3.6m、南北2.9mと小形のもので、北側の壁の高さは約30cmを測る。壁際には幅20cm前後の浅い周溝がめぐるが、全周せず途切れている。



第26図 柳II遺跡II区7層上面遺構配置図（平面図S=1/90、土層図S=1/60）



第27図 柳II遺跡II区7層（暗黄褐色砂質粘土）中出土土器実測図

(S = 1 / 3)

床面からはピット5基を検出し、このうち主柱穴はP1、P3～P5と考えられ、4本柱の住居であったと想定されるが明確でない。P5及び住居址の南西部の一部はSK14によって切られている。床面はほぼ平坦で、中央部付近に径30cm程度の焼土面の広がりが確認された。

遺物は住居址覆土の暗黄褐色粘質土（1層）を中心に出土している（第29図1～3）。1は退化した複合口縁部をもつ土器器壺で、口径16.2cmを測る。口縁部段部は痕跡的にわずかに稜をもち、調整は外面タテハケ、内面頭部以下ヘラケズリを施す。2は短く外反する複合口縁をもつ壺で、口径17.6cmを測る。3は口径11.6cmの土器器壺でやや身の深いタイプのものである。
これらの土器は松山編年4期に相当する資料と考えられ、
(S = 1 / 3)

S101は古墳時代中期後半の住居址であると考えられる。

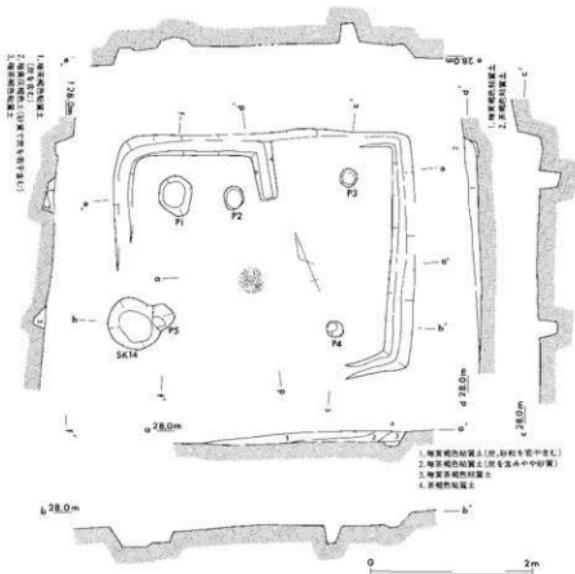
S B05（第30図）

II区南東部で検出した掘立柱建物跡で、標高31.0m付近に位置し、南は調査区外へ続いている。丘陵斜面をL字状にカットし加工段を作り出しているが、床面の大半は流出もしくはSD11造成時に伴う掘削により削平されている。検出した範囲での加工段の規模は、長さ4.5m、幅は残りの良い部分で1.1mを測るが、柱穴の配置からみてさらに北側へ延びていたものと考えられる。加工段の壁際に周溝は認められない。

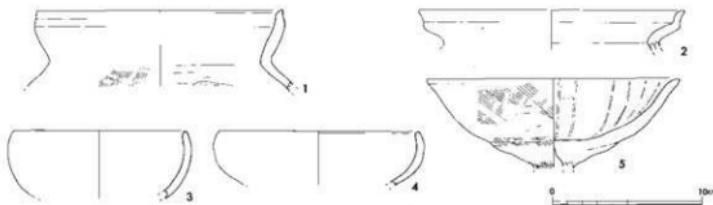
床面部分からは2棟分の建物の桁行のみを検出した。

S B05aは桁行3間分(4.6m)を測るが、さらに南側の調査区外へ延びていた可能性がある。柱間距離は1.4～1.5mを測る。柱穴は径20cm前後の小さなものであるが、残りの良いものは比較的深くしっかりしたものである。

S B05bは桁行2間分(5.2m)を検出したが、やはりさらに南側へ延びている可能性がある。柱間距離は2.4～2.5mを測る。柱穴はS B05aより一回り大きく、径30～35cm程度で深さ



第28図 柳II遺跡S101実測図 (S = 1 / 60)



第29図 柳II遺跡 S I 01・SK 14出土土器実測図（1～3 S I 01、4・5 SK 14）（S = 1 / 3）

は残りの良いものは約50cm程度と、SB 05aと同様径のわりにはしっかりしたものである。両者の前後関係は層位的には確認できなかった。

遺物は住居址覆土の淡黒灰褐色粘質土（1層）および床面付近から、大きく南北に2グループに分かれて出土している（第31図）。

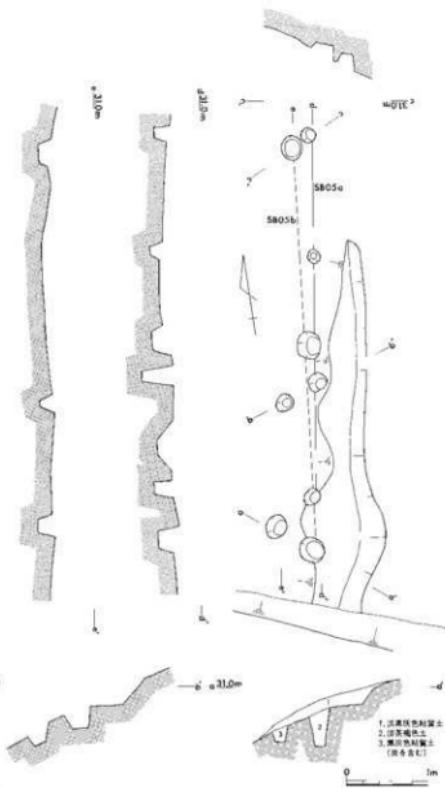
北側のグループは床面付近とSB 05

aの柱穴中から同一個体と思われる須恵器の胴部が出土した。これが住居発掘時の様相を示すものであれば、SB 05aの方がSB 05bより後出のものである可能性も考慮される。南側のグループでは2個体分の高壺が床面付近に並んだ状態で検出された。

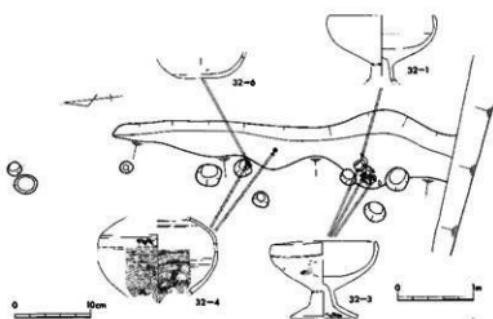
図化できた遺物は6点である（第32図）。第32図1は南グループから出土した高壺で、脚端部を欠損する他はほぼ完形のものである。壺部は口径13.8cmを測り、楕円形でやや内湾気味のもので、脚部は短く「ハ」字状に大きく開くものと思われる。

脚部と壺部は別づくりで接合部に粘土紐を巻き付けるタイプのもので、接合部をハケで撫でつけた痕跡が観察できる。松山分類の接合法γに対応するものと考えられる。脚内上部には径6mm程度の刺突痕が認められる。

2は高壺脚部で直接接合しないが、出土状況からみて、1と同一個体のものであると思われ、脚端部は面をもち、内面にハケメがみられる。



第30図 柳II遺跡 SB 05実測図（S = 1 / 60）



第31図 柳II遺跡 S B 05遺物出土状況図
(遺構 S = 1 / 60、遺物 S = 1 / 6)

作技法において酷似するものである。

4は北グループから出土した大形の甌の胴部と思われる資料である。胴部最大径は16.0cmをはかり、最大径上部に2状の沈線を配し、その間を波状文が1段巡る。調整は外面が胴部下半が平行タタキ、中位以上はヨコナデ、内面は下半部が不整方向のナデ、中位以上がヨコナデで凹線状の沈線を残す。

5は高坏の坏部もしくは坏と思われる資料で精良な胎土のものである。6も坏の底部で、ゆるやかな丸底を呈し、内外面に丁寧なヨコナデを施す。

以上の土器群は、松山IV期に属するものと考えられ、この住居址は古墳時代中期後半に位置づけられる。

S B 06 (第33図)

II区南側で検出した掘立柱建物跡で、標高28.5m付近に位置する。同一レベルのすぐ北側にはS B 08、09、S K 15が存在し、南西側は崖状の急斜面となっている。

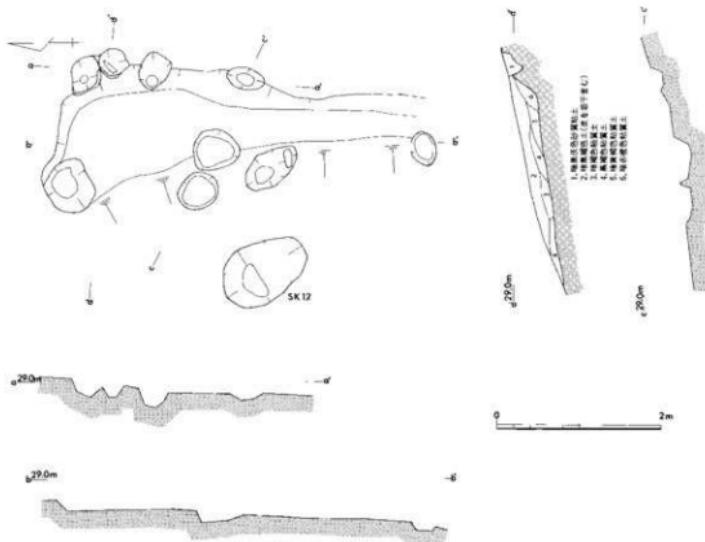
遺構は赤褐色粘質土の地山を掘り込み加工段を形成しているが、西側及び南側は既に流出しており存在しない。加工段は平面長方形形状を呈し、現存する規模は長さ4.3m、幅は残りの良い部分で1.9m、壁の高さは約30cmを測るが、おそらく南側へより延びていたものものと考えられる。壁際の周溝は認められない。



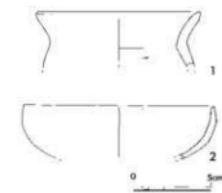
第32図 柳II遺跡 S B 05出土土器実測図 (S = 1 / 3)

3は坏部径13.8cm、器高10.5cmを測る高坏で、坏部は楕形をなし脚部は短く「ハ」字状に屈折し大きく開く。坏部外面には幅1mm程度の沈線がみられ、板ナデ状の調整による砂粒の動きが観察される。

1と同様坏部と脚部の接合部に粘土紐を巻き付けるタイプで、接合部に撫で付けのハケ痕が上下に認められる。このように、1・2と3は形態・大きさ・製作技法において酷似するものである。



第33図 柳II遺跡SB06実測図 (S = 1/60)



第34図 柳II遺跡SB06出土

土器実測図 (S = 1/3)

1は口径10.3cmの小形の壺で、口縁は「く」字状を呈し、端部は先細り状に收める。洞部は肩が張らず、頸部以下内面はヘラケズリを施す。

2は楕形を呈する壺で、口径は12.1cmを測る。色調は淡赤褐色を呈し、

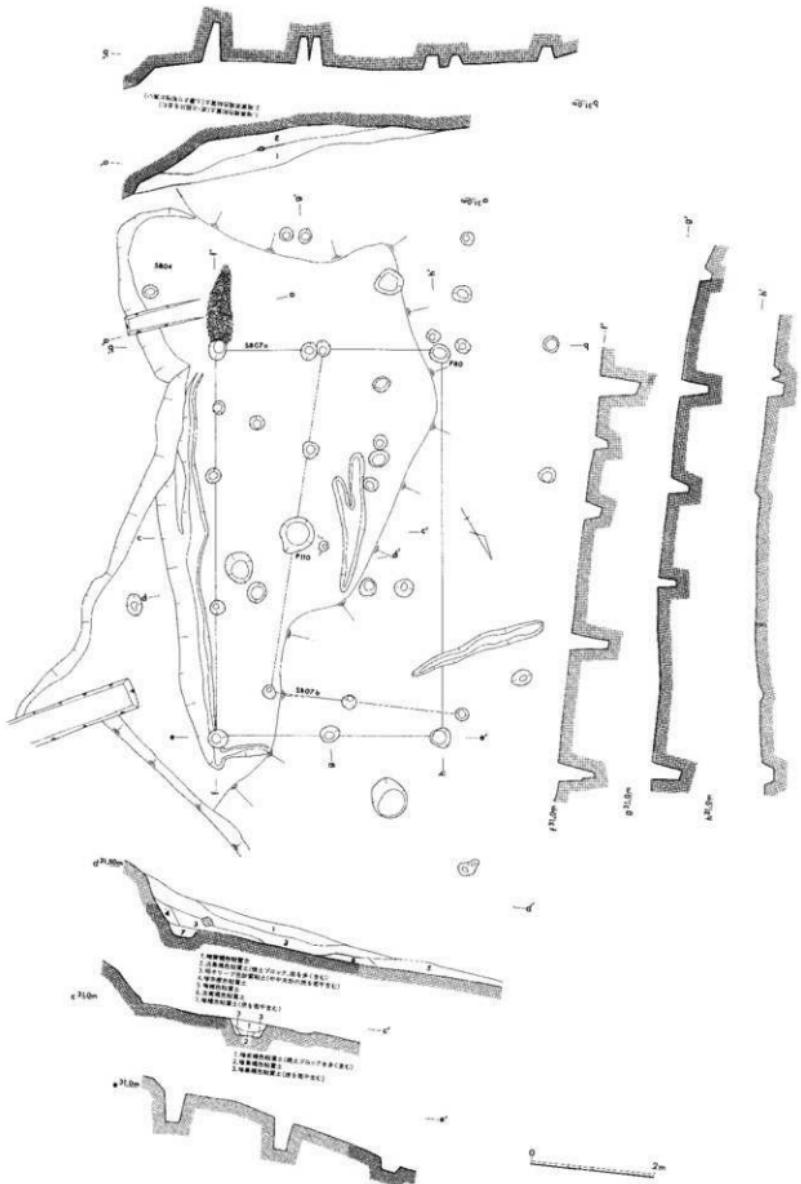
口縁部はやや内傾気味になる。内外面の調整は風化のため不明。このほか図化していないが、覆土中より弥生後期末の壺の口縁片が出土している。

このように、SB06は弥生時代後期末の遺物と古墳時代中期後半の遺物が混在するが、SB04・07とほぼ同一レベルに位置することからみて、5世紀後半の掘立柱建物跡であると推測される。

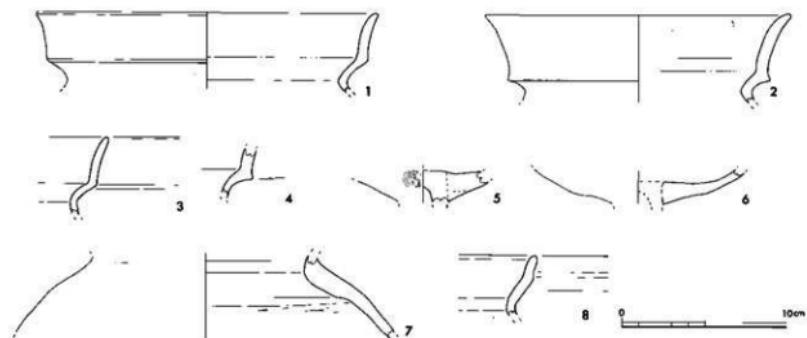
SB04・07 (第35図)

II区東側で検出した、標高31.0m付近に位置する掘立柱建物跡で、SB05の北約5mの場所に位置する。SB07等の遺構が掘り込まれた暗黄褐色砂質粘土を除去した下から検出した。SB04とSB07は等高線沿いに北にSB07、南にSB04と隣接して並んだ状況で検出された。

SB07は黄褐色砂質土の地山を掘り込んだ加工段上につくられた掘立柱建物跡で、上方の東側には部分的に1段テラス状施設が認められた。加工段の規模は、長さ6.5m、幅は遺存状況の良い部分で4.5



第35図 柳II遺跡S B 07実測図 ($S = 1/80$)



第36図 柳II遺跡S B04出土土器実測図 (S = 1 / 3)

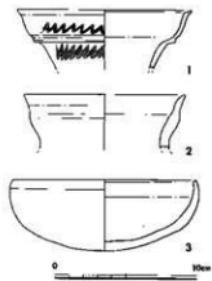
mを測る。床面は水平で、壁際には幅20~30cmの浅い周溝が巡っており、北東隅は周溝がほぼ直角に西側に折れ曲がっている。加工段平坦面上には2棟分の掘立柱建物跡が確認できた。S B07aは桁行3間(6.2m)、梁間2間(3.6m)のものである。桁行の柱間距離は2.1~2.2m、梁間の柱間距離は1.8mを測る。

柱穴は径20~30cmと小規模なものだが、深さは残りの良いもので60cmを測り、しっかりとしたものである。柱痕が土層で確認できたものは径15cmを測る。また建物のほぼ中央部に位置するP110は径56cm、深さ23cmをはかり、上層には焼土ブロックを多量に含む暗茶褐色粘質土が堆積しており、炉としての機能を果たしていた施設である可能性が考えられる。

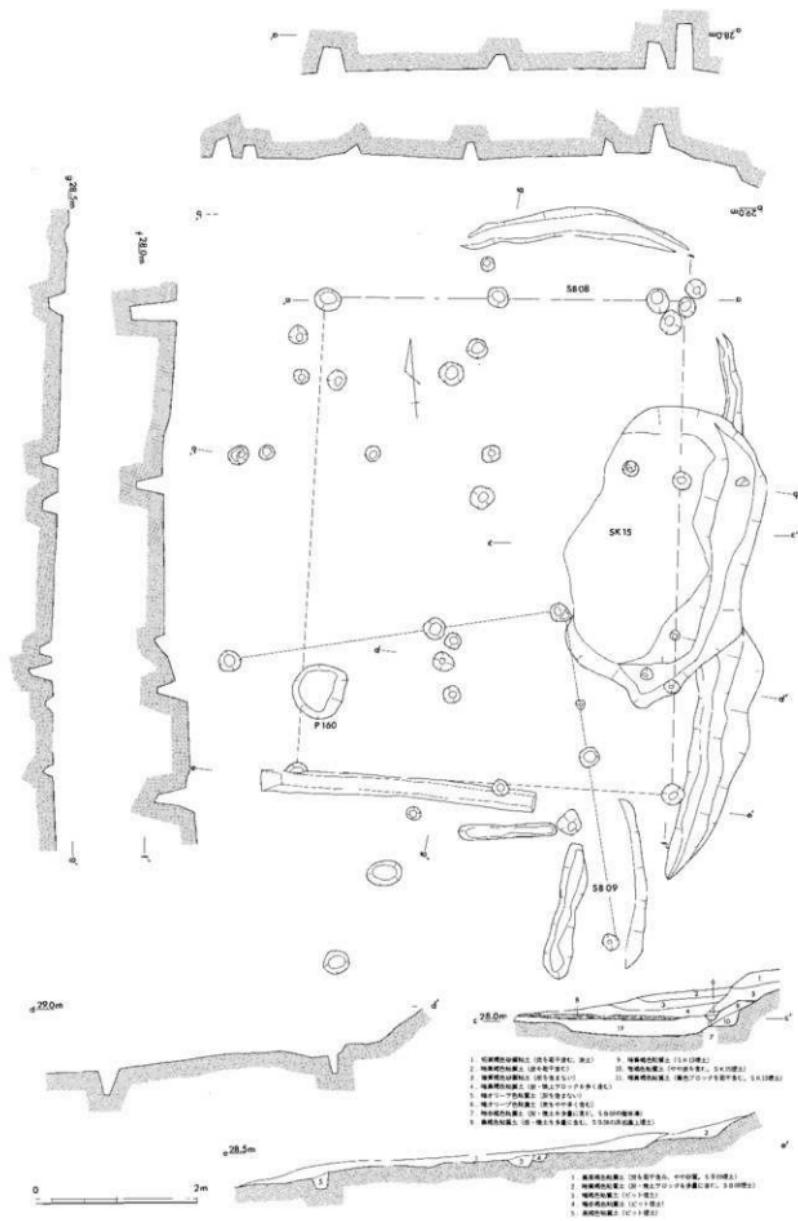
S B07bはS B07aよりやや西よりに位置し、桁行3間分(5.7m)、梁間2間分(3.1m)の建物が復元できると考えられるが、桁行の北から2番目の柱穴と南側の梁間柱穴は確認できなかった。柱穴の規模はS B07aとほぼ同様である。なお平坦面西よりでは幅約25cmの浅い溝が認められ、建て替えに伴う周溝である可能性も考えられるが、断言できない。

S B04はS B07の南に位置し、S B07に一部切られるような形で検出した加工段で、長さ2.8mの小形のものである。床面レベルはS B07とほぼ同じだが、水平でなく西側へ向けて緩やかに傾斜している。壁際の周溝は認められない。ピットは数基確認できたが不規則なもので、簡易な構造の掘立柱建物であったと考えられる。床面には焼土面が90cm×40cmの範囲で広がっており、S B07aの柱穴に切られている。

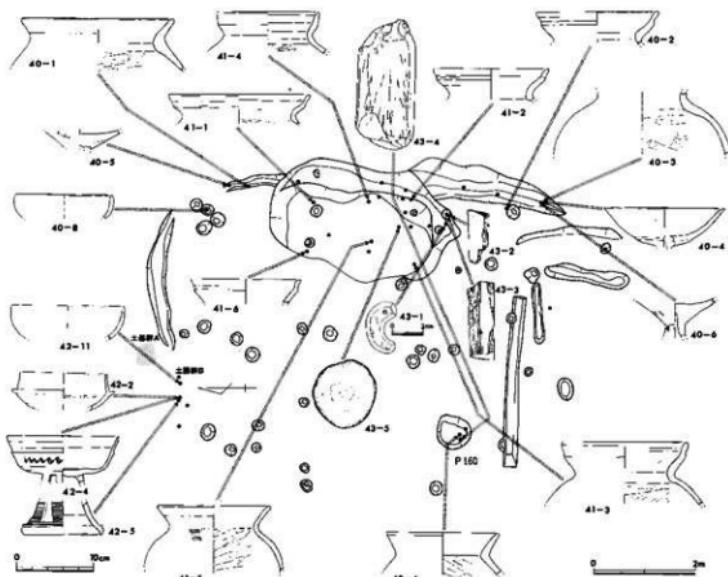
S B07からは遺物は若干出土したのみで、図化できたのは3点である(第37図)。1は床面直上から出土した頸の口縁部で、口径12.4cmを測る。口縁部は若干内湾気味に立ち上がり、端部は外方へ折れ曲がる。端部内面に匙面をもつ。口縁部・頸部にはピッチの狭い整美な波状文が巡る。1は大きさや色調・胎土からみてS B05出土の胸部と同一個体である可能性がある。2は口径11.4cmの小形の土器器蓋で、口縁部は退化した複合口縁を呈し端部は先細り状に外側へ引き出す。



第37図 柳II遺跡S B07出土
土器実測図 (S = 1 / 3)



第38図 柳II遺跡 S B08・09・SK15実測図 (S = 1 / 60)



第39図 柳II遺跡 S B08・S K15遺物出土状況図
(遺構 S = 1/90、遺物:土器・石器 S = 1/6、玉 S = 1/3)

3はP80から出土した完形の楕形の壺で、口径12.9cmを測る。S B04からは上層の暗黒褐色粘質土中から弥生土器・土師器が混在するような状況で出土した(第36図)。1～4は弥生後期の甕口縁部で、いずれも口縁部はゆるやかに外反し、端部を外方へ引き出すように收める。2の口縁部段部は斜下方に向へやや突出気味となっている。これらは草田4期に相当する資料であろう。5～8は土師器で5は高壺の杯部と脚部の接合部で、松山分類の接合法γ手法をとり、脚部上端の痕跡が壺部底面に認められる。8は土師器口縁部で短い立ち上がりの退化した複合口縁のタイプのものである。

S B07は床面出土の甕の年代観から古墳時代中期後半に位置づけられる。S B04は弥生土器と土師器が混在し遺物からは確定できないが、S B07と床面レベルがほぼ同じ点からS B07とほぼ同時期のものと考えられ、切り合い関係からS B07より若干先行するものと推定される。

S B08 (第38図)

II区西側で検出した掘立柱建物跡で、標高28.5m付近の緩斜面上に位置する。建物跡は地山を加工した加工段上に営まれており、加工段の規模は長さ8.3m、壁の高さは30cm前後を測る。加工段の壁際には幅20～30cmの周溝がめぐっており、北側は一旦途切れるが、やや丸みを帯びて西側へ屈曲している。南側の周溝はS B09の加工段により削平され現存しない。

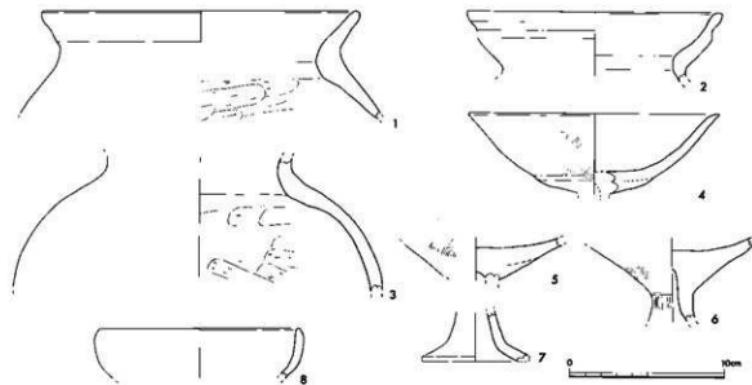
掘立柱建物跡は桁行3間(6.0m)、梁間2間(4.4m)の建物に復元され、桁行の柱間距離は1.9～2.1m、梁間の柱間距離は2.1～2.5mを測る。柱穴は径20～30cmと小形だが深くしっかりしたもので、S B05・07の柱穴と類似するものである。

土層観察によると、S B08はS K15を埋めて床面を形成しており、S B08の床面直上には炭・焼土

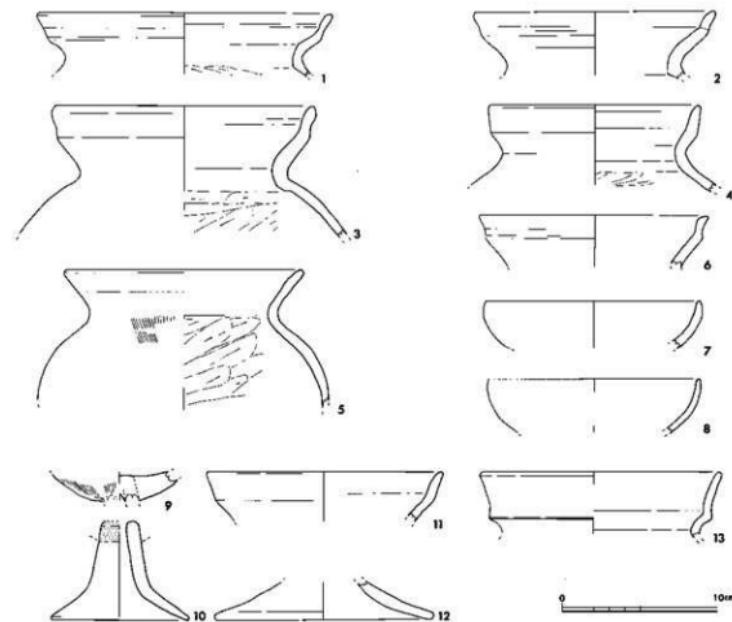
を含む黒褐色粘質土が広がっていた。焼土面は検出していない。

S B 09 (第38図)

S B 08の南側で検出した掘立柱建物跡で、S B 08の南を切って浅い加工段を形成し、その上に建物



第40図 柳II遺跡 S B 08出土土器実測図 (S = 1 / 3)



第41図 柳II遺跡 S K15・S B 08出土土器実測図 (S = 1 / 3)

(1~5・9 S K15床面、6~8・10 S K15埋土、11~13 ベルト中)

がつくられている。加工段は長さ2.1m、高さ約10cm程残存しており、壁際の周溝は認められない。建物は桁行2間分(4.1m)、梁間2間分(4.1m)を検出したが、桁行は南側にもう1間分あったと推定されるが、南側の梁間と同様検出できていない。

S K 15(第38図)

S B 08の下で検出した土壌で、平面形は不整橢円形を呈し、長径3.7m、短径2.2m程度、深さはS B 08の床面から約20cmを測る。S B 08・09・S K 15の遺構切り合い関係は、土層観察からS K 15→S B 08→S B 09の順でつくられたものと推測される。

S B 08・S K 15遺物出土状況(第39図)

S B 08、S K 15からは床面付近から土師器、石器、玉等の遺物が出土している。

S K 15の床面付近からは土師器壺、高坏、ハンマー、砥石が一括廃棄した状況で出土した。これらは土壌の南西部を中心に分布している。須恵器は出土していない。

S B 08の床面遺物は主として南側のS B 09との境界付近、同じく南側のS K 15との境界付近、周溝北東隅付近、北西隅付近の4グループに大別される。このうち、S K 15との境界付近からは水晶製勾玉未成品と珪化木製砥石が出土している。北西隅グループはさらに周溝外の土器群Aと周溝内の土器群Bに分かれるが、2つの土器群間には接合資料があり、同時期に廃棄されたものと推測される。このグループのみから須恵器が出土している。

S B 08・S K 15出土土器(第40図～第42図)

第40図はS B 08からの出土遺物のうち、南東隅及び北東隅から出土したグループの土師器である。1は単純口縁の土師器壺で、口縁部は直線的に立ち上がり、器壁は7～16mmと厚い。肩部はやや張り頸部以下内面へラケズリを施す。2は口径16.2cmの壺で、口縁部は厚く短い退化した複合口縁をもち、強く外反する。3は壺の胴部で、器壁は8～12mmを測り、胴部が強く張る器形を呈す。

4は高坏で口径16.0cmを測る。坏部は接合部に鈍い段をもち、ゆるやかに内湾気味に広がり、口縁端部で若干外反する。段部には接合時のハケによる撫で付け痕が観察される。5・6は高坏の坏部と脚部の接合部分で、6は脚内上部に6mm前後のやや深い刺突痕があり、接合部に放射状のハケメ調整が認められる。8は椀形の坏で、口径12.6cmを測る。やや強く内湾し口縁部端部は先細り状に収める。

第41図はS K 15出土の土師器で、1～5、9は床面出土の遺物、6～8、10は埋土中の出土である。1は口径18.8cmの壺で、ゆるい複合口縁をなし段部はかすかに稜をとどめる。3は胴部上半部までが窓える複合口縁壺の資料である。口縁部は短く外反し、端部は丸く収める。口縁部の器壁は6～10mmと厚い。体部は胴がよく張る。6も口径14.6cmを測る複合口縁壺で、口縁部は段部に稜をもって短く立ち上がり、端部は平坦面をもつ。5は単純口縁の壺で、口縁部は直線的にやや長く立ち上がり、端部は若干丸みを帯びる。胴部はよく張り、内面は頸部以下斜方向のヘラケズリを施す。

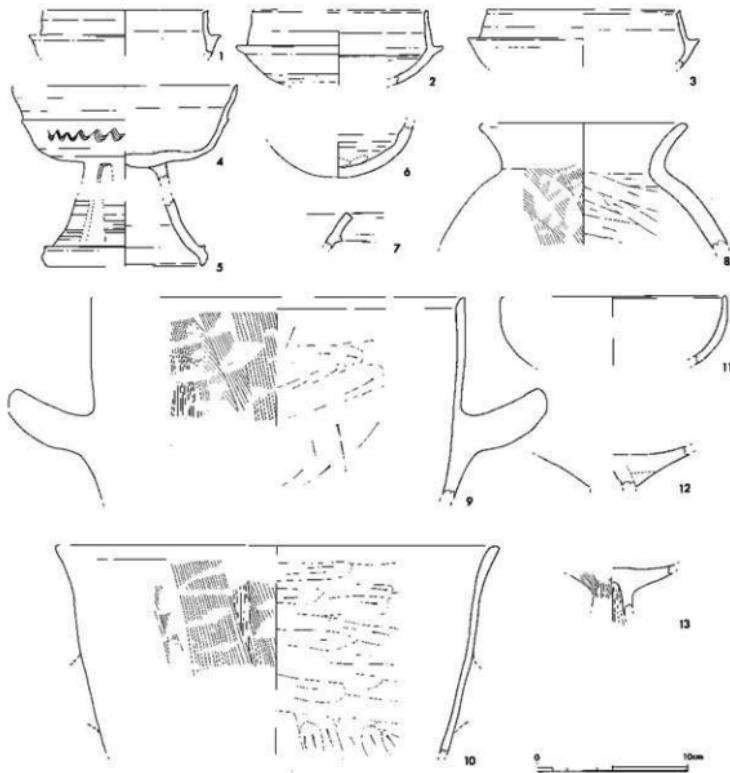
7は口径14.0cmとやや大きいことから高坏の坏部であると思われる。8は口径13.4cmを測り、やはり高坏の坏部と考えられる。器壁が比較的薄く、口縁端部は丸く収める。9・10も高坏で、9は坏部下半の資料であり接合痕がよく観察できる。接合痕の観察から高坏の製作工程を復元すると、底抜けの坏部を製作し、これに別づくりの脚部を坏部に差し込み、接合部に粘土紐を巻き付ける、といった工程が復元できる。10は高坏の脚部で、トーンは坏部の剥離痕の部分を示す。

11～13はベルト中出土のもので、どちらの遺構に属するものか不明。13は弥生後期末の壺で、上方

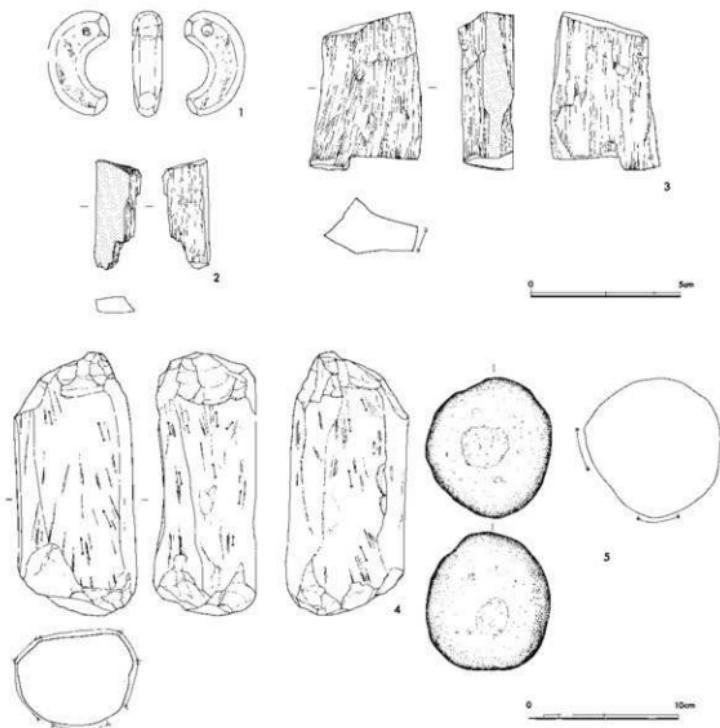
からの流れ込みであろう。

第42図1～12はS B08北西隅から出土した土器群である。1～3、6～10が土器群A、その他が土器群B出土のものである。1～3は須恵器坏身ないしは有蓋高坏の坏部である。1は底部を欠損している。口径は小片のため不正確。坏部口縁はほぼ直立気味に立ち上がり、端面に凹面をもつ。器壁は3mm前後と非常に薄く、焼成は極めて堅緻で断面はセピア色を呈する。2は口径11.2cmを測り、底部を欠損している。口縁部は長く直立気味に立ち上がり、端部は面を持たず丸く收める。器壁は非常に薄く、シャープな印象を与える。3は口径12.8cmの坏身ないしは有蓋高坏の坏部で、口縁部は若干内傾気味に長く立ち上がり、端部は凹面を持つ。器壁は薄く焼成は堅緻。

4は須恵器無蓋高坏で、口径14.8cmに復元したが、焼成時の歪みがある為正確な数値は不明。口縁部端部は丸く收め体部との境にはシャープな突帯をめぐらす。体部には1段の丁寧な波状文を巡らす。脚部は一部しか存在しないが、長方形もしくは台形スカシを3方に穿つ。5は高坏脚部で、外方に広がりながら脚台にいたる。スカシは台形で、数は不明。脚端部は丸みをもって内傾し、脚台下端はつ



第42図 柳II遺跡SB08付近土器群A・B、SB09出土土器実測図 (S = 1 / 3)
(1～3・6～10 土器群A、4・5・11・12 土器群B、13 SB09)



第43図 柳II遺跡 S B08・SK15出土玉・石器実測図 (1~3 S = 2 / 3、4・5 S = 1 / 3)
(1~3 S B08床面、4 P160、5 SK15床面 ※トーン部分は使用部位を示す)

まみ出すようにして丸くおさめ、脚台上端部は上方へつまみ出し、シャープな突帶状をなす。調整は脚部外面はカキメ、脚部内面及び脚台部はヨコナデ調整。6は底底部と思われる資料で、底部は丸底を呈し、調整は体部外面は中位以上がヨコナデ、底部付近が不定方向のナデを施す。7は壺の口縁と考えられるもので、口縁端部はしっかりした平坦面をもち、口縁部下に鋭い突帶をめぐらせている。

8~13は土師器である。8は単純口縁の壺で、口径13.8cmをはかる。口縁部はやや上方へ向けて外反しつつ立ち上がる。胴部は口径に対しよく張り、胴部中位付近に最大径がくるものと考えられる。調整は外面が粗い斜方向のハケ、内面は横方向のヘラケズリを施す。

9、10は壺形土器である。9は体部から口縁部にむけて直線的に立ち上がり、口縁部端部は内傾し内側に面をもつ。体部中位に対し取手がつくが、体部との接合法は不明。器壁は5mm前後と薄く、外面に縦ハケ、内面にヘラケズリを施す。10も壺だが、口縁部は若干外反し、端部上端に面をもつ。

11は高壺の壺部で、壺部は椀形をなし口径14.7cmを測る。12・13は高壺の壺部と脚部の接合部の資料で、両者とも松山分類の接合法γをとるものである。13は外面に放射状のハケメ、内面に絞り痕が観察される。

以上、S B08・SK15は切り合い関係からSK15→S B08の序列が想定されるが、土器群自体は須恵器を伴うかどうかといった違いはあるものの、两者とも松山編年4期に位置づけられる資料であり、これらの遺構の年代は古墳時代中期後半と想定される。

S B08・SK15出土石器（第43図）

第43図はS B08・SK15出土の石器類で、1～3はS B08床面出土のものである。1は水晶製の勾玉未成品だが、ほぼ完成品に近いものである。全長3.5cm、厚さ10mm、重さ7.9gを測る。石材は透明度の低いやや質の不良なもので、表裏とも研磨時の擦痕が観察される。穿孔は片側穿孔である。

2、3は珪化木製の砥石で、おそらく内磨砥石と考えられる。勾玉未完成品にごく近接した箇所から出土した。3は長さ5.2cm、幅3.5cm、厚さ1.8cm、重量23.2gを測る。側面を研磨面として使用し、非常に平滑な面となっている。2も内磨砥石

と考えられるが、破損が著しく一部研磨面が認められるのみである。

4はP160、5はSK15床面から出土した石器である。4は非常に肌理の細かい質の岩石でつくられた砥石で、長さ17.5cm、幅7.6cm、厚さは中央部分で6.0cm、重量1244gをはかる。形状は多面直方体状をなし6面研磨面が認められ、両端には打ち欠いたような痕跡を残す。擦痕からみた研磨方向は主軸に沿っているものが多いが、やや斜方向に振れるものも存在する。研磨面も使用頻度が高く極めて平滑な面とやや粗い面の両者が認められる。

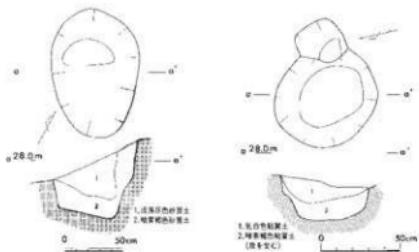
5は多孔質の河原石を転用したと考えられるハンマーで、重量856gを測る。約90度違えた2ヶ所に敲打痕が認められる。

この他図化していないが、SK15床面には大形の地山の石が数個体散乱していた。使用痕は認められないが、作業台等に使用したものと推測される。

(2) 土 壤 ・ 溝

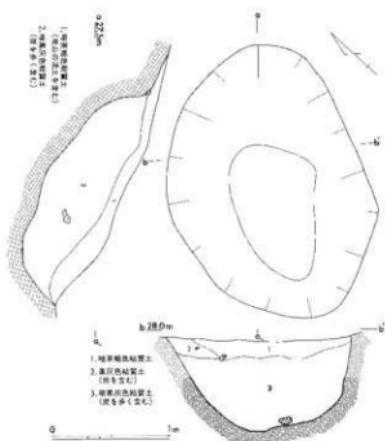
SK12（第44図）

S B06の西側下方で検出した土壤である。プランは梢円形を呈し、長径1.1m、短径0.7m、深さは上方で0.7mを測る。遺物はなく、時期・性格とも不明である。



第44図 柳II遺跡SK12
実測図 (S = 1/40)

第45図 柳II遺跡SK14
実測図 (S = 1/30)



第46図 柳II遺跡SK13実測図 (S = 1/40)

S K13 (第46図)

S I 01の南東に位置し、比較的急斜面に掘り込まれた土壇である。プランは不整橢円形を呈し、長径2.4m、短径1.8m、深さはおよそ70cmを測る。土壇底面は南西側へ傾斜している。覆土は上層に暗茶褐色粘質土、下層に暗黒灰色粘質土が堆積しており、両者から土器、炭等が出土している。

S K13出土遺物 (第47図)

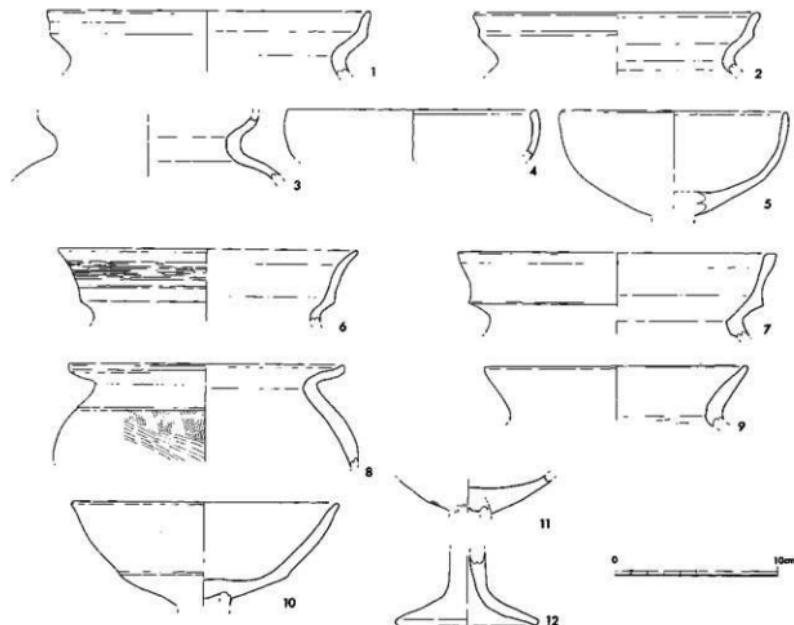
1～5は上層中、6～12は下層中の遺物である。1は複合口縁の甕で口縁部段部はわずかに後をとどめ、口縁部端部は先細り状におさめる。2も同様な複合口縁の甕で、口径17.2cmをはかる。口縁部は短く外反し段部に鈍い稜をとどめる。

4・5は高坏の坏部で两者とも椀形の杯部を呈するものである。4は口径15.2cmを測り、口縁部端部に面をもつ。5は口径13.6cmで、坏部はやや深く口縁部端部は丸くおさめる。坏部底面には脚部を差し込むためにあけた径2.5cmの穴があり、その部分から剝離している。

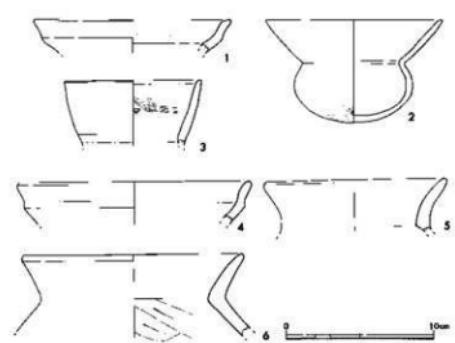
6～12は下層中の出土遺物である。6は弥生後期甕の口縁部で、口縁部はゆるやかに外反し、端部は引き出すように先細り状におさめる。段部はあまり突出せず、外面には貝殻腹縁による擬凹線を施す。草田3～4期の資料である。

7も弥生後期の甕口縁部で、口縁部は緩やかに外反し、端部は肥厚させ丸くおさめる。外面には擬凹線等は認められない。

8は口径16.8cmを測る甕で、口縁部は強く外方に屈曲し、端部はわずかに上方へ立ち上がり、端面



第47図 柳II遺跡SK13出土土器実測図 (1～5 1層、6～12 2・3層) (S = 1/3)



第48図 柳II遺跡II区ピット中出土土器実測図 (S=1/3)
(1~3 P81、4・5 P82、6 P160)

いる。脚内上部には刺突痕等は認められない。

12は高坏脚部の資料で脚径8.5cmを測る。筒部は比較的細く下半で大きく広がり、端部はやや丸みを帯びた面をもっている。

このように、S K13からは弥生土器と土師器が混在するような状況で出土しており、どちらの時期に所属するものなのか明確でないが、S I 01に隣接して営まれている点からみて、古墳時代中期後半に営まれたものである可能性が高い。

S K14 (第28・45図)

S I 01の西南に位置する土壇で、S I 01の柱穴P 5を切るような状況で検出した。平面円形の小形の土壇で、規模は径65cm、深さ約25cmを測る。埋土は下層が暗茶褐色粘質土、上層が地山の粘土を用いた乳白色粘質土が堆積している。特に上層は意図的な埋土であったとも考えられる。

S K14出土遺物 (第29図)

土壤内からは土師器が出土している(第29図4・5)。第29図4は坏もしくは高坏の坏部で、口径13.3cmを測る。

5は高坏部で、口径16.8cmを測る。坏部は下半に接合時の段を残し、ゆるやかに内湾気味に立ち上がり、口縁部はやや外反する。坏部と脚部との接合部外には粘土を巻き付けハケ状工具で撫でつけた痕跡が認められる。坏部内面には放射状の暗文がかすかに観察される。

このようにS K14は切り合い関係からS I 01に後出するものであるが、出土遺物では時期差はあまりなく、S I 01にわずかに後出する時期に営まれたものと想定される。

II区ピット中出土土器 (第48図)

第48図1~3はP81から出土した遺物である。1は壺の口縁部で口径13.2cmを測る。口縁部は退化した複合口縁をなし、端部は平坦面をもつ。口縁部断面にはわずかに痕跡的な稜をとどめる。

2は口径12.0cmの小形丸底壺である。口縁部は内湾気味に大きく開き、端部は丸く收める。体部はやや偏平なもので、胴部最大径は口縁部径に比してかなり小さく、2/3程度の比率である。底部附近にはかすかにハケ調整が認められるが、その他の部分は風化により調整不明。小若江北段階のもの

には浅い凹線が認められる。体部はよく肩が張り、1条の沈線を施す。調整は外面が継斜方向のハケ、内面は風化が著しく確認できないが、ヘラケズリによる砂粒の動きは認められない。弥生中期のものであろう。

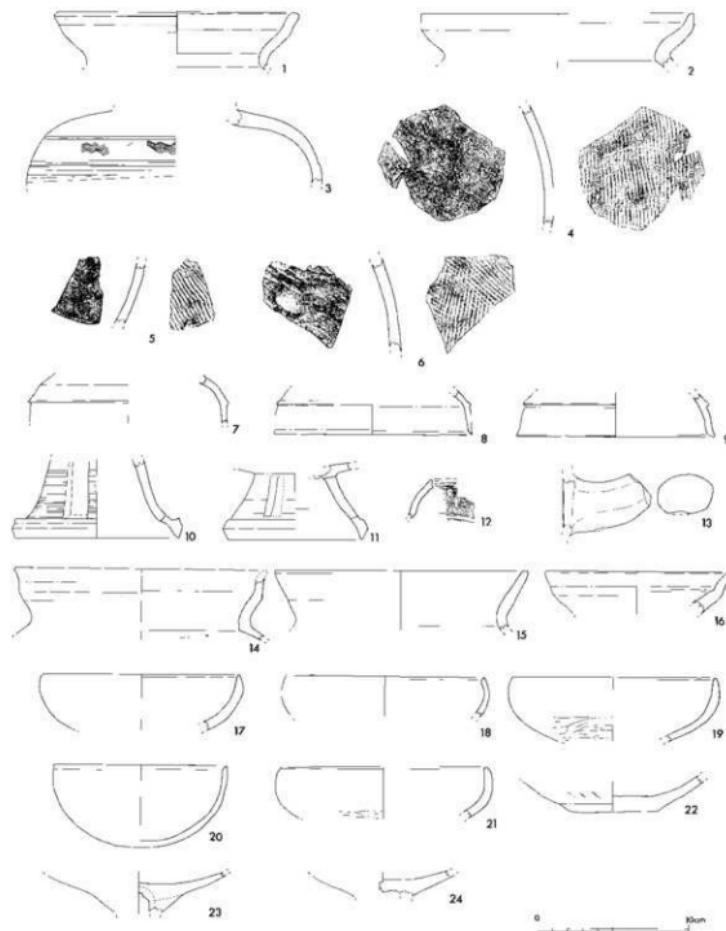
9は口径15.8cmの単純口縁の壺である。口縁部はほぼ直線的に立ち上がり、端部は丸くおさめる。

10は松山分類の高坏Bである。口径は16.2cmをはかり、坏部下半に緩い段をもって内湾気味に立ち上がり、口縁部わずかに外反し端部は先細り状におさめて

に類似し布留2式併行のものであろう。

3は小形丸底壺の口縁部で口径が小さくやや直立気味に立ち上がる。1～3は同じピットから出土しているが、1・3は床面直上、2は上層で出土したものであり、2は流れ込みと考えられる。

4・5はP82から出土した遺物である。4は退化した複合口縁の壺で、口縁部はわずかに段の稜を残して短く外反し端部は丸く收め、内外面ともヨコナデで仕上げる。5は口径12.4cmをかる小形の単純口縁の壺であり、口縁部は直立気味に長く外反し端部を丸く收める。これらはいずれも古墳時代



第49図 柳II遺跡II区遺構外出土土器実測図 (S = 1 / 3)
(1～6 8～10層出土、7～24 11層出土)

中期後半のもので松山編年4期に属するものと考えられる。6はP160出土の壺口縁で、第43図4の大形砥石と併せて出土した土器である。口縁部は長く直線的に外反し、器壁は8~12mmと厚い。内面頸部以下は斜方向のヘラケズリを施す。S B08・09に伴うものと考えられ、やはり同じ時期のものであろう。

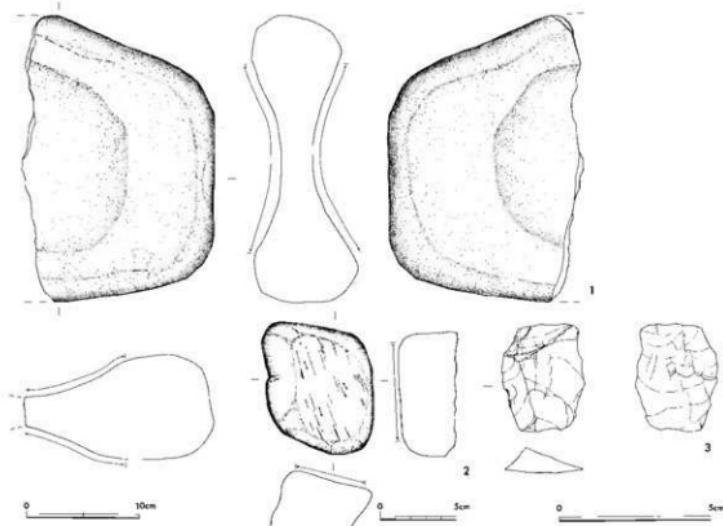
II区包含層出土土器（第49図）

第49図はII区包含層中の出土遺物で、1~6は8~10層、7~24は11層中の出土遺物である。1、2は退化した複合口縁の壺で、1は口縁部が短く外反するタイプで、2は立ち上がりが短くわずかに直立する程度のタイプのものである。

3は須恵器壺ないしは甌の胸部資料で、推定最大径19.4cmを測る。肩がよく張り、最大径部よりやや上位を2状の沈線により区画し、その中に波状文をめぐらせている。松江市石屋古墳出土の須恵器に類似資料がある。⁽⁸⁾ 4~6は須恵器壺の胸部で、外面は平行タタキ、内面は同心円状当具痕を丁寧にナデ消している。

7~9は蓋坏だが、いずれも小片で正確な口径は不明。8は稜が断面三角形状に鋭く突出し、口縁端部はわずかに外方へ折れ、内面は鋭くノミ刃状となる匙面が認められる。9は8よりやや器壁が厚く稜部や口縁部端部はシャープさを欠き、丸みを帯びている。稜部下には沈線を施し、稜部を強調している。7~9はSB08付近出土の第42図1~4の須恵器に比べてやや甘い印象を受け、断面もセピア色を呈するものはなく、いずれも灰褐色を呈するものである。

10は高坏の脚部で、脚部は方形スカシを穿ち、ゆるやかにひろがり脚台部に至る。脚台部は「く」字状に内折し、脚端上部は斜上方へ鋭く突出する。脚幅外面にはカキ目調整を施す。11も同様なタイ



第50図 柳II遺跡I・II区出土石器実測図 (1 S = 1/4、2 S = 1/3、3 S = 2/3)

ブの高坏脚部だが、脚台部はシャープさを欠き丸みを帯びる。脚裾部には方形もしくは逆台形のスカシを3方に穿つ。12は壺ないし甌の口縁部と思われる小片で、外反する口縁部の端部直下に突帯はりつけ、その下にピッチの狭い波状文をめぐらす。

13は甌の把手で先端を欠損している。断面橢円形を呈し、体部との接合は直接張り付けるものと思われる。

14～16は土師器甌である。14は口縁先端部を欠損するが、口径推定16.6cmを測る複合口縁壺で、段部にはわずかに稜の痕跡を残す。15は単純口縁の甌で、推定口径16.6cmを測る。口縁部はほぼ直線的に外反し、端部は丸く收める。16はやや小形の甌口縁部である。口縁部は退化した複合口縁で、段部内面に沈線をもつ。

17～21は椀形の坏もしくは高坏坏部の資料である。17は推定口径12.8cmの坏で、口縁部は内湾し端部を先細り状に收める。19は口径13.4cmの椀形を呈する坏で、底部付近に横方向の手持ちヘラケズリが認められる。その他の部分は内外面とも横ナデ調整を施す。20はやや身の深い坏で、口径11.4cm、器高5.4cmを測る。口縁部は肩部から内湾気味に立ち上ったのち、軽くくびれやや外反する。口縁部端部前面は内傾し面をもつ。21も19と同様底部付近に手持ちヘラケズリを施すもので、推定口径13.4cmを測る。手持ちヘラケズリ以外の部分は横ナデ調整を施す。

22は土師器底部の資料で、底部付近はやや突出し、やや広い平底をもつ。底部付近外面にはハケメ痕が観察される。

23、24は土師器高坏の坏部と脚部との接合部資料である。23は松山分類接合法アの資料で、接合部の粘土紐を巻き付けた痕跡が認められる。24の脚内上端部には径約4mm、深さ2～3mmの刺突痕が観察される。

I・II区出土石器（第50図）

第50図はI・II区の遭構外出土の石器である。1はII区から出土した石皿で、最大幅25.4cm、厚さ9.1cmを測り、約半分を欠損している。

石材は淡茶褐色を呈する砂岩系のもので、表裏とも使用による擦り減りが著しく、断面鉄アレイ状を呈する。使用による擦痕の方向等は確認できない。付近からは繩文土器等は全く出土しておらず、詳しい所属年代等については不明である。

2はII区で出土した河原石を転用したと思われる砥石ないしは台石である。重量399gをはかり、1面のみに使用による擦痕が認められる。

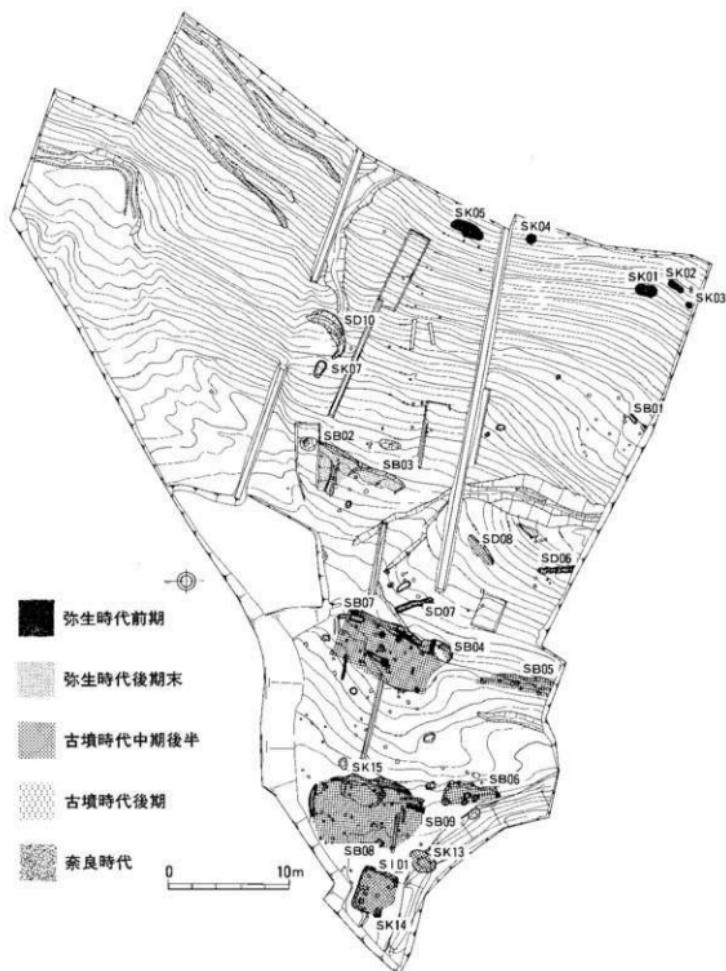
3はI・3区で出土した濃緑色を呈する玉髓製の縦長剝片で、長さ3.5cm、幅2.6cm、厚さ8mm、重量7.9gをはかる。打点は残存せず、側辺には2次加工もしくは使用によるものと思われる細かな剝離が認められる。

第4節 小 結

以上記してきたとおり、柳II遺跡では古墳時代中期後半の集落址の一角を検出したほか、幾つかの注目すべき遺構・遺物を確認することができた。以下、調査の成果と問題点を簡単に整理しておきたい。

(1) SK04(弥生時代前期土器棺墓)について

(a) 被葬者像



第51図 柳II遺跡時期別遺構配置図 (S = 1 / 400)

今回の調査では I 区西側で弥生時代前期の土器棺墓（SK04）を検出した。しかし、棺として使用された壺棺の打ち欠き部の口径は 8.7cm という規模であり、この規模を重視すれば改葬を考慮しない限り被葬者は胎児・早産児ということになる。こうした極めて小形の土器棺の例は、神奈川県歳勝土遺跡で棺身の横断径が 8.5cm という例が報告されており、この報告では 9 ヶ月の胎児・早産児を推定可能な被葬者としている。しかし、本例の場合は、底部が胴部内に落ち込んだ状況で検出されている。こうした様相からみて、最大径部付近で壺を分割し頸部を据えた後に遺体を安置し、その上に底部をかぶせたケースも想定され、その方が妥当性が高いものと思われる。こうしたケースの場合、この土器棺墓の被葬者像は胎児・早産児だけでなく、若干幅を広げて考える必要がある。

(b) SK04と隣接する土壙群

県内における上器棺墓は弥生時代終末～古墳時代中期にかけて多数認められるが、弥生時代前期のものとしては本例が県内では初例となった。島根県内では弥生時代前期の埋葬遺跡そのものの類例が少なく、多数の人骨が出土した鹿島町古浦遺跡³⁰、32基の土壙墓を検出した浜田市鷺石遺跡³¹など海岸の砂丘部における集団墓が幾つか確認されている程度であるが、隣の鳥取県では長瀬高浜遺跡において当該期の良好な集団墓が確認されている。長瀬高浜遺跡では約 50 基の木棺墓・土壙墓・土器棺墓が混在するような状況で検出されており、これらは砂丘の斜面に沿って列をなすような構成をなしている。こうした同一レベル上に墓壙が配列する状況は当遺跡の SK01～05 の分布状況に類似しており、これらの土壙群も弥生前期の墓壙であった可能性も考慮される。特に SK05 は SK04 に隣接し平面プランや底面が水平であることからみて弥生前期の土壙墓ないしは木棺墓であった可能性を考えたい。

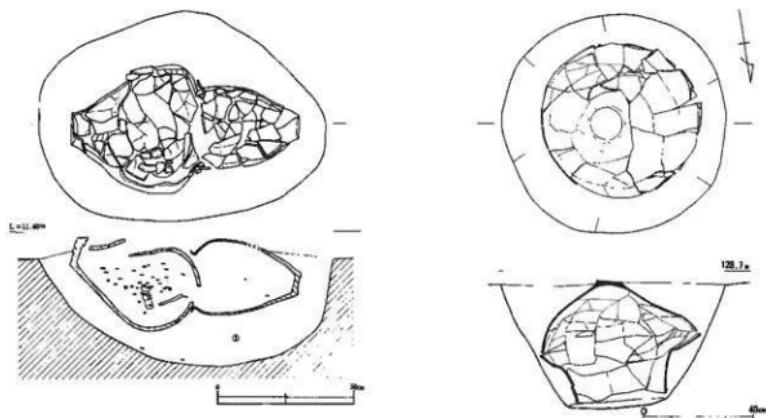
(c) 土器棺墓の系譜

弥生前期の上器棺墓は当地方では比較検討し得る類例が乏しいが、前述した長瀬高浜遺跡において 1 基確認されている。この例は壺と甕の合口のもので、楕円形の墓壙にはほぼ水平に据えた状況で検出されている（第 52 図左）。

山陽側では、岡山県の土器棺墓を集成した龜山行雄氏によれば岡山県内の弥生時代前期の土器棺墓は 5 例が確認されている。これらの土器棺の納置状態をみると斜位及び横位が 4 例、立位が 1 例を数え、横・斜位が主で立位が從の関係にある。こうした傾向は、岡山県内の弥生時代全般の資料についても言えるようで、氏の集成によれば弥生～古墳時代前期の土器棺墓で棺の配置状況の判明している 113 例のうち、斜位及び横位のものが 96 例、立位のものが 16 例、逆位のものはわずか 1 例にすぎない。山陽側の様相であるため直接的な比較はできないが、当遺跡の SK04 のように逆位の形態をとる土器棺墓は弥生時代においては極めて希な存在であったと言えよう。

では、こうした土器棺の納置形態の差は何を意味するのだろうか。馬目順一氏は近畿地方の土器棺の納置方法には、立位と斜位の 2 者があり、後者が圧倒的に多い点を指摘するとともに、前者は縄文時代の土器棺の系譜を引くものであり、後者は墓壙壁のつくり等から北九州の成人用壺棺の強い影響を指摘している。縄文時代の上器棺（甕棺葬）についてまとめた菊池実氏によれば、埋設状態の明らかな 132 例中、正位（立位）が 90 例、逆位が 12 例と立位のものが圧倒的に多くかつ逆位のものも一定量認められる一方、横位や斜位のものは少数で、弥生時代の土器棺墓とは逆の様相が窺える。

当地域の縄文時代の上器棺墓（甕棺葬）の例としては三刀屋町宮田遺跡の縄文後期末～晩期のもの 2 例と、ほぼ同時期の仁多町暮地遺跡の 2 例が知られており、これらはいずれも逆位の状態のもので



第52図 弥生時代前期の横位納置（左）・逆位納置（右）土器棺墓
(左：鳥取県長瀬高浜遺跡 S X Y 01 右：大分県半石遺跡15号墓)

あり、これを当地域の特色であるとする見方も見受けられる。また九州の縄文時代埋葬について検討した坂本嘉弘氏によれば、北部九州の成人埋葬が成立する地域の縁辺部においては直立・倒立棺が主流を占める地域が存在し、これらが縄文時代の埋葬の影響を反映しているものであることを指摘している（第52図右）。

現在のわずかな資料から性急な結論を導き出すことは困難だが、弥生時代の土器棺墓では逆位が極めて稀な点、当地域の縄文時代晩期の墓制に逆位の土器棺墓が認められることからみて、S K04が縄文時代以来の伝統を受け継いだものである可能性はある程度考慮されよう。

また古浦遺跡や鰐石遺跡など当地域における他の同時期の墳墓群が海岸の砂丘部に墓域を設定しているのに対し、当遺跡例が平野部に近いとはいえ、やや奥まった丘陵の急斜面に墓域を設定している点はかなり異質であると言わざるを得ない。ややうがった見方をすれば、本例は古浦人のような渡来人が海岸部から山間部へ向けて拡散し在来の縄文人と融合していく過程の中で生じた文化現象のうちの、墓制上に現れた一形態であったという見方もできよう。本例は今まで当地域で資料の乏しかった当該期の様相を窺い知る上で貴重な例を提供したものと言える。

(2) II区検出の遺構・遺物について

(a) 古墳時代中期の掘立柱建物について

II区においては不明確な加工段S B04を除き、古墳時代中期後半の掘立柱建物跡5棟（建て替え分を含めて7棟）、竪穴住居跡1棟を検出した。今回の調査では集落全体の中での一部のみを確認したにすぎないが、およその傾向は掴むことができる。以下派生する若干の問題について考えてみたい。

①掘立柱建物の構造と性格 今回検出した掘立柱建物はすべて丘陵斜面をL字状に整形した加工段上に営まれていた。これらの掘立柱建物跡のうち比較的残りのよいS B07、S B08についてみてみると、S B07は桁行3間、梁間2間の建物で、床面積は24m²を測る。床面に灰と推測される焼土が充填して

第4節 小 結

以上記してきたとおり、柳II遺跡では古墳時代中期後半の集落址の一角を検出したほか、幾つかの注目すべき遺構・遺物を確認することができた。以下、調査の成果と問題点を簡単に整理しておきたい。

(1) SK04(弥生時代前期土器棺墓)について

(a) 被葬者像



第51図 柳II遺跡時期別遺構配置図 ($S = 1/400$)

いたビットをもつことからみて、床面が土間床式的な居住的性格をもつものであったと推測される。S B08も同様に桁行3間、梁間2間であるが、S B07より梁間の柱間距離が長く、やや正方形に近い平面プランをとる。床面積は28m²を測る。S B07と同様、建物の性格としてはそれまでの堅穴住居跡に替わる居住用のものであったと思われる。この2つの掘立柱建物跡はいずれも加工段の壁際に周溝をもつものである。S B05は周溝をもたないタイプで桁行3間分を検出したのみだが、柱穴の規模・形態などはS B07・08と共に通するもので、桁行の長さ等からみて他の例と同様居住用の建物であったと推測される。

②出雲部における古墳時代掘立柱建物出現の様相 第1表は出雲部における主要な古墳時代前～中期集落の建物別の棟数を示したものである。建て替えや掘立柱建物と認定し難しい加工段的性格のものとの区別等の問題があるが、およそその傾向は窺うことが可能である。当地方においては古墳時代前期における集落の実態が殆ど確認できおらず現状では不明といわざるを得ないが、松江市堤廻遺跡（堤廻I期）や宍道町矢頭遺跡の断片的な様相からは堅穴住居が主となる建物構成であったと推測される。東出雲町四ツ廻遺跡例の掘立柱建物も加工段的性格のもので整然とした建物ではない。古墳時

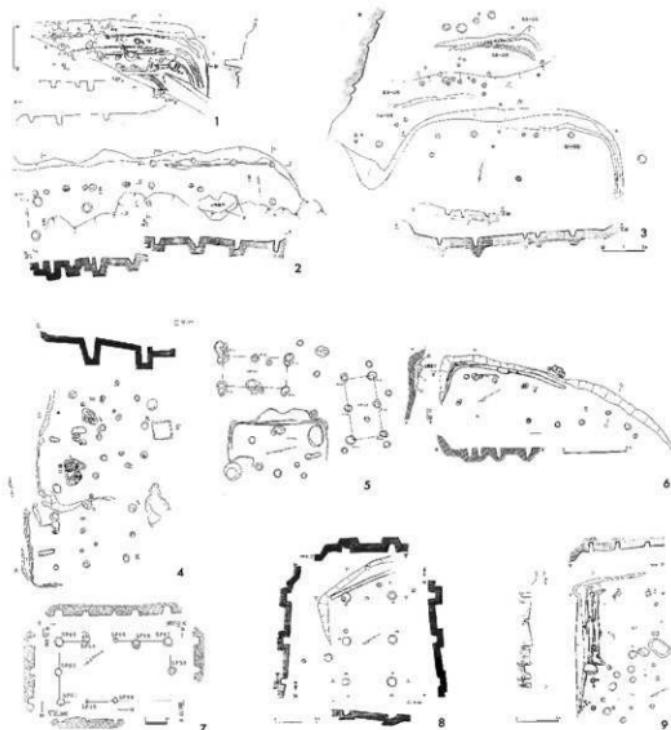
第1表 出雲部における古墳時代前～中期集落の建物構成

*長期間の集落は当該期のもののみ時期別に抽出

遺跡名	所在地	堅穴住居棟数	加工段建物棟数	年代	備考
1 四ツ廻遺跡	東出雲町字四ツ廻	1	1以上	松山1層	他に古墳時代後期の遺跡有
2 矢頭遺跡	宍道町大字石原	5以上		松山1層～2層	松山1層は1棟のみ
3 堤廻遺跡（堤廻I期）	松江市西川津町	4		堤廻1層	
4 勝負遺跡	東出雲町字勝負	2		松山1層	建て替え含む
5 大角山遺跡	松江市万木園町	5		松山2層	玉作工房有
6 門生黒谷II遺跡	安来市門生町	3		松山2～3層	整理中
7 勝負遺跡	松江市東多田町	11	1	松山2～3層	1×1層？
堤廻遺跡（堤廻II期）	松江市西川津町	9	1	堤廻2層	2×2層
堤廻遺跡（堤廻III期）	松江市西川津町	9		堤廻3層	
勝負遺跡	東出雲町字勝負	8	1	松山2～3層？	2×2層 玉作工房有
8 柳II遺跡	安来市荒島町	1	5以上	松山2層	
9 寺山小田遺跡	松江市大根町	2	2	松山2～3層	2×2層 加工段有
10 平ラII遺跡	安来市吉佐町	3		松山2層	玉作工房有
11 岩見口南遺跡I区	安来市岩見町久保町	5以上		松山2層～MT15	近接して7～8c層建多數有
12 折紙上堤廻遺跡	八云村西岩坂	5	3以上	松山2層	2×1層1棟、2×3層2棟
13 矢頭平所遺跡	松江市矢掛町	1	2	松山2層？	2×1層2棟 食堂？
14 大原遺跡	安来市岩見町久保町	3	1?	松山2～IV層	玉作工房有
15 カンボウ遺跡	安来市吉佐町	3	1?	松山2層	
(参考)					
16 四ツ廻II遺跡	東出雲町字四ツ廻	1	7以上	古墳後廻以降	玉作工房有 整理中
17 萬沢△遺跡	松江市大井町	10	9	6c後～7c前	
18 カンボウ遺跡	安来市吉佐町	6		6c後～7c前	
19 山ノ神遺跡	(8)	(4)	6c後	整理中	
20 德見津遺跡III区	安来市吉佐町	2		6t後	同時期の加工段1棟有
徳見津遺跡IV区	安来市吉佐町		(8)	7c前～8c後	加工段数は13 築造工房有
21 五反田遺跡	安来市吉佐町	(5)	(10)	7c代中心	整理中 築造工房有

代中期前半～中葉（松山編年2・3期）においても堤壠遺跡で1棟確認されているものの（第53図7）、松江市勝負遺跡、同大角山遺跡や東出雲町勝負遺跡、安来市門生黒谷II遺跡等では竪穴住居が主流であり、掘立柱建物は極めて少ない。古墳時代中期後半（松山4期）になると幾つかの遺跡で掘立柱建物が確認されている。八雲村折坂上堤東遺跡では当該期の掘立柱建物が3棟確認され、うちSB06は加工段上に整然とした2×3間の建物を営むもので、当遺跡のSB07・08に類似するもので注目される。また松江市矢田平所遺跡では1×2間の小規模な掘立柱建物が竪穴住居に付随するように2棟確認されている。これらは規模からみて居住用ではなく弥生時代以来の高床倉庫の伝統を受け継ぐものと考えられる。しかしこの時期においても平ラII遺跡や岩屋口南遺跡のように竪穴住居のみで構成される集落もあり、居住用の掘立柱建物は主要な建物構成を占めるには至っていない。

古墳時代後期においては松江市薦沢A遺跡のような、竪穴住居と掘立柱建物がほぼ同じ比率を占める例のように掘立柱建物跡は増加するものの竪穴住居は大きな比率を占めている。出雲東部地域で掘



第53図 出雲部における弥生～古墳時代中期の掘立柱建物（S = 1/200）

- 1・右台S102 弥生中期末 2・オノ神SB01 弥生後期末 3・大原S105 弥生中期中葉
- 4・勝負S1-11 古墳時代中期 5・矢田平所SB01・02 古墳時代中期 6・寺山小田SB01 古墳時代中期
- 7・堤壠SB01 古墳時代中期前半 8・折坂上堤東SB01 古墳時代中期 9・折坂上堤東SB06 古墳時代中期

立柱建物が居住用の主要な建物構成を占めるのは高広遺跡（II区）や徳見津遺跡（IV区）・五反田遺跡、才ノ峰遺跡など7～8世紀になってからである。しかし、同時期においても出雲山間部に位置する森遺跡では竪穴住居が主要な建物構成を占めており、出雲内部においてもその普及度については各小地域ごとの差異が認められる。

以上簡単に出雲部の古墳時代集落における掘立柱建物跡の様相を概観したが、集落の一部が明らかになったにすぎないものの、古墳時代中期において掘立柱建物が主たる建物構成を占める当遺跡の様相は、他の5世紀代の集落と比較した場合際だっていると言えよう。

③弥生時代掘立柱建物と古墳時代掘立柱建物 丘陵斜面を加工段状に整形しその上に掘立柱建物を構築する手法は、弥生時代の出雲地方では比較的よく見られる手法で、比較的古い例としては松江市石台遺跡（IV期 第53図1）、安来市大原遺跡（III期 同3）²⁰があり、後期の例としては安来市普請場遺跡、同才ノ神遺跡（同2）²¹がある。当地域における近年の調査例ではこうした加工段状施設が竪穴住居軒数を上回る事例も知られている。これらの掘立柱建物は住的な性格をもつ、いわゆる長棟建物とされているものもあるが、加工段のかなりの部分が流出し梁間が確認できないものが大半であり、中には柱穴が不規則な並びのものも数多く含まれる。こうした弥生時代の加工段を伴う掘立柱建物が古墳時代中期まで系譜的に連なるものかどうかという問題は、これら弥生時代掘立柱建物の構造及び当地における古墳時代前期の様相が不明な現状では結論は出せないが、中期前半代の当地域における掘立柱建物の普及度や当遺跡例のような梁間を2間以上とする整然とした掘立柱建物の様相からみると、その連続性を積極的に評価することは困難であるように思われる。

弥生～古墳時代の掘立柱建物についてまとめた宮本長二郎氏によれば、弥生時代の掘立柱建物は桁行1～3間、梁間1間の小型のものが70%を占め古墳時代前期までこの傾向が続くに対し、古墳時代中・後期にはこれら梁間1間の小形の掘立柱建物が急減し、それに代わるように梁間2間以上の建物や縦柱建物が急増する点を指摘し、古墳時代の新しい建築様式がこの段階から普及したとの評価を与えている。また石川県内の古代掘立柱建物についてまとめた川畠 誠氏によれば、この時期に出現する掘立柱建物は古墳時代前期までの掘立柱建物体系と全く異なる、「掘立の種別による機能分担を当初より確立した形で伴う」ものであり、「外来文化の受容に象徴される社会・経済の大きな画期の一事象」であると指摘する。こうした全国的な掘立柱建物の動向を参考にした場合、当遺跡の梁間2間の建物体系は弥生時代の伝統的な掘立柱建物体系とは異なり、新たな掘立柱建物体系の流れの中で位置づけられる可能性も十分考慮されよう。

弥生時代から古墳時代にかけての掘立柱建物跡が数多く調査された米子市青木遺跡C区においては青木VII期（中期前半）では竪穴住居跡13棟に対して掘立柱建物3棟であるのに対し、青木IX期（中期後半）では竪穴住居跡13棟に対して掘立柱建物跡22棟と、中期後半に掘立柱建物の割合が大きく増加している。またこの段階の掘立柱建物は、床面積を拡張する際に、それまでの桁行を拡張させるのに対し梁間を拡張させると指摘されている。

当遺跡における掘立柱建物の出現や青木遺跡でのこうした変化は、当該期の汎列島的な動向と連動するものなのか、または当地域での弥生時代以来の伝統的掘立柱建物体系の変化の延長線上で理解できるものなのか。この問題を考えるためにまずは、当地域の掘立柱建物について各時期ごとの規模・構造を整理し、相互比較検討を行うといった基礎的作業が不可欠であり今後の課題といえる。ここで

は当遺跡の掘立柱建物については、そうした新たな掘立柱建物体系の流れに位置づけられ、かつ出雲においてはその先駆的な存在であった可能性があることを指摘しておきたい。

(b) 玉作遺物をめぐる若干の問題

今回の調査では S B 08 の床面付近からほぼ完成品に近い水晶製勾玉及び珪化木製砥石と、若干はあるが玉作関係の遺物を検出した。特に珪化木製砥石の存在は何らかの形で当遺跡が玉作に関与していた集落であったことを端的に示すものと言える。ただし、通常の玉作遺跡でみられるような膨大な量の原石・剝片・未成品は今回の調査では全く検出することができなかった。これは調査区外に荒割等の工程を行う工房が存在し、そこから最終研磨のみを行うために S B 08 内へ搬入されたものなのか、また他の遺跡で半製品を作り、そこから当遺跡内へ持ち込んだものであるのかどちらかであると考えられる。

近年当地域においては玉作遺跡の調査例が急増している。これらの玉作遺跡は主として碧玉・瑪瑙を原石として用いるもので、その大半は安来・東出雲町といった原産地と想定される玉湯町花仙山周辺からはかなり遠隔地で検出されており、その大半は古墳時代中期に集中する。これらの遺跡について若干みてみると、東出雲町域の玉作遺跡は古墳時代後期といわれる四ツ廻II遺跡を除くと、原の前遺跡例や勝負遺跡例のように中期前半～中葉（松山3・4期）のものが多いのに対し、安来市域では大原遺跡、平ラII遺跡、竹ヶ崎遺跡や当遺跡例のように古墳時代中期後半（松山4期）のものが目立つ。

これらの玉作遺跡で出土する碧玉がはたして本当に花仙山周辺のものであるかどうかという点については、今後の蛍光X線分析の結果を待たざるを得ないが、仮にそうであるならば、この時期に原産地周辺だけでなくわざわざ遠隔地まで石材を運んで出雲東部の広範な地域にわたって一斉に大規模な玉作が開始されることとなる。この問題は当地域の古墳時代の動向を考える上で極めて重要な問題であり、玉作だけでなく集落や古墳の動向等を視野に入れて総合的に検討していくなければならない問題であろう。

(c) 須 恵 器

II区集落址に伴うと考えられる須恵器はII区の S B 05・S B 07、S B 08付近土器群中、及び包含層中から出土したが、量的には僅かで図化し得たものは20数点にすぎない。これらは若干幅があるものの、ほぼ同時期のもので、従来の山本編年I期に収まるものである。

各器種ごとの様相をみてみると、まず壺身（有蓋高坏部）は受部がやや横方向に突出し、立ち上がり部が長く端部を丸く收めるもの（42-2）と、受部が斜上方向に突出し、立ち上がり部はやや短く端部上面及び内面に凹部をもつもの（42-1・3）の二者が認められる。これらはいずれも器壁が薄く焼成が良好で作りがシャープなものである。蓋はやや薄手で稜が比較的シャープに突出するタイプ（49-7・8）と、器壁がやや厚く段部の稜も鈍い作りで、稜直下に沈線を入れて強調するタイプ（49-9）がある。

無蓋高坏は1点のみ出土しており口縁部と体部の境に1条の突帯をもち、その下に波状文を巡らせるもので、口縁部端部は丸く收めている。高坏脚部はすべて台形の3方スカシのものだが、脚台部上半に強いナデを加え、脚台上端を斜上方に突出させるタイプ（42-5、49-10）と突出させないタイプ（49-11）が認められる。邊は大形で薄手のもので（32-4・37-1）、胎土や色調は他の須恵器と

はやや異なる印象を受けるものである。甕（壺）は口縁部端部直下に突帯をもち、その下に波状文を充填するもの（49-12）や、やや下がった位置に突帯を設けるもの（42-7）がある。甕胴部はいずれも同心円当具痕をナデ消したものである。

当地域における当該期の須恵器研究は山本編年1期を細分化する形で近年研究が進められており幾つかの編年案が提示されている。⁽²⁰⁾ この中で松本岩雄・柳浦俊一の両氏は山本編年1期をTK208型式併行以前、TK208型式併行期（薬師山古墳・金崎1号墳段階）、TK23・47併行期の3段階に編年している。⁽²¹⁾ 当遺跡の資料と比較した場合、坏身は薬師山古墳に近いタイプ（42-2）も存在するが、その他はやや後出的な様相をもつ。無蓋高坏は薬師山古墳・金崎1号墳が口縁端部内面に段を持つのに対し、当遺跡の無蓋高坏は端部に段を持たず丸く収めており若干時期が降ると思われる。また高杯脚部を比較した場合も同様な傾向が窺える。また山本編年1期新相とされる古曾志大谷1号墳造り出し部出土の無蓋高坏と比較すると、坏部突帯が当遺跡例がシャープである点や脚台部の作りが古曾志例が単純化がより進行している点からみて当遺跡例がやや先行するものと思われ、当遺跡の資料はこの中間、松本・柳浦氏のTK23・47段階古相に位置づけられるものと考えられる。

当遺跡出土の須恵器に非常に類似する資料として近年調査が行われた安来市門生山根1号窯資料がある。⁽²²⁾ この窯は現在山陰地方で最古に位置づけられるもので、TK23～47併行期の操業とされている。この窯出土資料には、器壁が薄くシャープなつくりで焼成が良好で断面セビア色を呈する一群と、やや器壁が厚くなりシャープさを欠く一群があり、当遺跡の資料はこの古い段階のものを中心にしたものと考えられ、門生山根1号窯資料と同様な断面セビア色を呈する資料（42-1）も認められる。また高杯脚部のバリエーションもこの窯資料の範疇内で収まるものである。このように当遺跡出土須恵器の一部は門生古窯址群の製品であった可能性があるが、同窯址の甕資料には内面の当具痕ナデ消しを行うものは殆ど無く、当遺跡の様相とは若干異なる点も認められる。

当遺跡周辺でこの時期の須恵器を出土する集落跡としては、竹ヶ崎・柳遺跡、平ラII遺跡、カンボウ遺跡、岩屋口南遺跡などがあげられる。これらの遺跡出土資料は当遺跡出土資料とほぼ同時期か若干降るものであり、当遺跡の様相は当地域の集落に地方窯製品が普及し始めた段階の様相を示すものと思われる。出雲においてはこの門生古窯址群以外にもこの時期の窯が幾つか知られており、また消費地である集落においても若干当遺跡例とは異なる印象をもつ須恵器も幾つか見受けられる。今後当該期の須恵器生産と流通の問題を検討していく上で、型式学的分析と胎土分析等の理化学的分析を併用したアプローチが必要となってくるものと思われる。

(d) まとめ

以上検討してきたように、当遺跡のII区の古墳時代中期集落の遺構・遺物は幾つかの点で注目すべき特徴がみられた。特に新たな掘立柱建物様式の先駆的採用は当集落を特徴づけるものであると言える。

この集落を考える上で無視できないのが、隣接する荒島墳墓群・造山古墳群の存在である。当墳墓群では、弥生時代後期から終末にかけて大形の四隅突出型墳丘墓を築造し、古墳時代にはいると全国的にも稀な大形方墳を築造し続ける。しかし、これらの大形方墳の築造は造山3号墳を最後に一旦途絶え、これに後続する大形古墳は現在のところ確認されていない。そして古墳時代中期後半（松山3～4期）にそれまでと墓域を変えて西に大形方墳の清水山1号墳、東に荒島地域では最初の前方後方

墳である宮山1号墳が築造される。清水山1号墳は段築・葺石・埴輪をもつことからそれまでの大型方墳の様相とは大きく異なるものであり、宮山1号墳はそれまでの方形と異なり前方後方形という当地では最初の墳形を採用した首長墓である。このように、荒島墳墓群内には現状では前期末に一旦断絶があり、中期後半に再編成された形で再び大型の首長墓が出現していくという様相が認められそうである。つまり、当遺跡の集落は、こうした荒島墳墓群の首長墓が再び出現するのと密接に関連する形で形成された集落である可能性が想定されるのであり、当集落が新しい様式の住居構造などをいち早く取り入れている点は、こうした集落を基盤として新たに出現した大型首長墳の系譜や性格を知る上で極めて示唆的である。

以上述べてきた点は、あくまでも現状で考えられる一可能性であるに過ぎない。今後当地域の集落遺跡に関する基礎的検討を積み重ねていくことによって、こうした問題に対しより具体的なアプローチが可能になってくるものと思われる。

註

- (1) 鹿島町教育委員会 1992『南講武草田遺跡－講武地区県営圃場整備事業発掘調査報告書5』
- (2) 松本岩雄 1992「7出雲・麗岐地域」『弥生土器の様式と編年－山陰・山陽編－』
- (3) 島根県教育委員会 1984『高広遺跡発掘調査報告書－和田団地造成に伴う発掘調査－』
- (4) 島根県教育委員会 1985『日脚遺跡－日脚住宅団地予定地内発掘調査報告書－』
- (5) 島根県教育委員会 1983『富田川河床遺跡発掘調査報告書III』
兵庫埋蔵銭調査会 1994『中世の出土銭』
- (6) 松山智弘 1991「出雲における古墳時代前半期の土器の様相－大東式の再検討－」『島根考古学会誌』第8集
- (7) 寺沢 薫 1986『畿内古式土師器の編年と二・三の問題』『矢部遺跡－奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第49冊』権原考古学研究所
- (8) 松江市教育委員会 1985『史跡石屋古墳－昭和59年度保存修理事業報告書－』
- (9) 小宮 孟 1975『方形周溝墓・壺棺の項』『歳勝土』港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告V
- ⑩ 東森市良 1967『山陰地方発見の壺棺とその特色』『考古学研究』14－2
- ⑪ 藤田 等 1989『島根県 古浦砂丘遺跡』『探訪－弥生の遺跡 西日本編』有斐閣
- ⑫ 前島己基 1973『調査報告 浜田市鈴石遺跡』『季刊文化財』22 島根県文化財愛護協会
また大社町原山遺跡では当該期のものと思われる配石墓等が見つかっている。
- 大社町教育委員会 1986『出雲・原山遺跡発掘調査概報』
- ⑬ 鯉魚取県教育文化財団 1982『長瀬高浜遺跡発掘調査報告書IV』
- ⑭ 亀山行雄 1995『第4節 土器棺墓について』『津守遺跡2－山陽自動車道建設に伴う発掘調査－』岡山県教育委員会
- ⑮ 当該期に当地域と関連が深いとされる山口県でも梶栗浜遺跡や朝田墳墓群などで斜位の土器棺墓が幾つか検出されている。
下関市史編集委員会編 1965『下関市史 原始－中世』
- 山口県教育委員会 1978『朝田墳墓群III』山口県埋蔵文化財調査報告書第37集
- ⑯ 馬目順一 1987『幼児用の壺・壺棺墓』『弥生文化の研究』8 雄山閣
- ⑰ 菊池 実 1995『壺棺葬』『縄文文化の研究』9 第2版 雄山閣
- ⑲ 三刀屋町教育委員会 1979『京殿遺跡－調査概報－』
- ⑳ 杉原清一 1981『II位置と環境』『下鴨倉遺跡緊急発掘調査報告』仁多町教育委員会
- ㉑ 坂本嘉弘 1994『埋甕から壺棺へ－九州縄文埋甕考－』『古文化談叢』32

- 千歳村教育委員会 1989「高添台地の遺跡」
- ② 第1表は概ね各報告書の記述に沿って作成したが、一部変更した部分がある。未報告の遺跡のうち4、6、11、16、19～21については、島根県教育委員会『埋蔵文化財調査センター年報』平成5～7年度の記述をもとに作成した。よって本報告では数字が異なることもあり得る。なお各報告書文献は紙面の関係で割愛した。
- ② 島根県教育委員会 1994「森遺跡・板原I遺跡・森臨山城址・阿丹谷辻堂跡」志津見ダム建設予定地内埋蔵文化財調査報告書2
- ④ 島根県教育委員会 1989「石台遺跡」国道9号線バイパス予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ
- ④ 島根県教育委員会 1994「臼コクリ遺跡・大原遺跡」一般国道9号（安来道路）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書5
- ⑤ 島根県教育委員会 1995「才ノ神遺跡・普請場遺跡・島田黒谷I遺跡」一般国道9号（安来道路）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書9
- ④ 註4と同じ
- ④ 小原貴樹 1991「山陰の掘立柱建物」「弥生時代の掘立柱建物－本編－」埋蔵文化財研究会
- ④ 宮本長二郎 1991「弥生時代・古墳時代の掘立柱建物」「弥生時代の掘立柱建物－本編－」埋蔵文化財研究会
- ④ 川畑 誠 1995「右川県内の古代建物に関する基礎的考察－掘立柱建物の平面プランを中心にして－」『鶴石川県埋蔵文化財保存協会年報6』鶴石川県埋蔵文化財保存協会
- ④ 鳥取県教育委員会 1977「青木遺跡発掘調査報告書II-C・D地区-」
- ④ 山本 清 1971「山陰の須恵器」「山陰古墳文化の研究」所収
- ④ 房宗寿雄 1985「山陰地方東部の古式須恵器について」『松江考古』6
川原和人・井上寛光 1986「島根県における初期須恵器について」『考古学ジャーナル』259
- ④ 松本岩雄・柳浦俊一 1991「須恵器の編年-3・山陰-」「古墳時代の研究』6 雄山閣
- ④ 島根県教育委員会 1989「古曾志遺跡群発掘調査報告書-朝日ヶ丘団地造成工事に伴う発掘調査-」
- ④ 平成6年度に島根県教育委員会が調査を実施。遺物については丹羽野裕・水口昌郎両氏にご教示いただいた
- ④ 山陰地方の当該期の須恵器地方窯は高杯脚部が長方形三方透しが圧倒的である特色が既に指摘されている（菱田哲朗 1992「須恵器生産の拡散と工人の動向」『考古学研究』39-3）が、宍道町矢頭遺跡では住居址から円形透しの脚部を持つ高杯が出土しており、未発見の窯跡の存在の可能性も想定される。
- 宍道町教育委員会 1985「清水谷・矢頭遺跡発掘調査報告書」
- ④ 安来市教育委員会 1994「清水山古墳群発掘調査報告書」

第4章 小久白墳墓群の調査

第1節 調査の概要と経過

小久白墳墓群は島根県安来市荒島町鐘十鈞3086-21他に所在する。当地は標高53~65mの丘陵尾根部に所在し、遺跡の北西側は荒島貯水池建設の際に大きく削平されている。

分布調査時には北西側の高まりが一辺20m前後の方墳と認識されていたために、調査開始時には「小久白古墳群」という名称であった。

試掘調査は6月21日から開始したが、丘陵北西部では遺構・遺物は検出できなかった。しかし、丘陵南東部のトレンチからは土壙墓状の遺構が検出されたため、一帯をI区調査区として設定し、本調査を7月19日に開始した。

調査区は丘陵尾根上にあたり、遺構面そのものが風雨などにより侵食され、長年のうちに風化土層になっており、地表面にはごく薄い腐植土層が存在していた。

そして、腐植土層の直下には風化した遺構面が存在するが劣化が激しく、遺構面の上面から遺構を認識することはできなかった。そして、安定した地山面に至るまで10~20cmあまり遺構面を削平した後に遺構の検出を行なった。そのため遺構の幅や深さは本来のものより減少して見えるが、断面観察で旧状ある程度うかがうことができる。

I区では3辺に周溝を巡らせた小久白1号墓のほか、土壙墓2基と性格不明の土坑1基を検出し、9月6日に現地調査を全て終了した。

なお、調査途中で從来「小久白古墳」としていた墳丘状の高まりが、自然丘陵であることが判明し、I区調査区から弥生時代後期末の墳墓群が見つかったため、「小久白墳墓群」と改称して調査を進めた。

第2節 小久白墳墓群I区の調査

小久白1号墓

遺構（第56・57図） 1号墓は標高約65mの丘陵最高所から尾根づたいに東南に下降した標高57m前後の地点に立地し、調査区の南東端に位置している。

調査前には付近より若干盛り上がった座布団状を呈しており、小規模な墳墓の存在が予想されていた。表土と遺構面の一部を削平した結果、土壙墓状のプラン（SX01）とその両端に溝状遺構（SD01・02）が確認され、墳丘墓であることが判明した。その時点で北西側丘陵斜面に平行に走る溝状遺構SD03は検出できず、後に断面観察でその存在を確認した。

墳丘は内法で長軸10.0m、短軸は南東側に溝が存在しないため明確ではないが、SD03の肩部からSX01の中心までの距離を2倍すると7.6m程度の値が得られることから、墳丘平面は長方形プランとなる。墳丘の高さは現状でSD01底面から85cm、SD02底面からの高さが80cm、SD03底面からの高さが60cmであるが、風化や侵食により頂部が削平されているため当初の墳丘は1m前後の高さを持っていたものと考えられる。墳丘断面の観察でも盛土の痕跡は確認できず、墳丘の形成は若干の地山削り出しで行われたものであろう。

現状では墳丘斜面や溝内、及び周辺に石などが見られないことから、当初から貼り石などの外表施設は無かったと思われる。



第54図 小久白墳墓群調査前地形図 (S = 1 / 600)

主体部 S X01は尾根に直交して掘り込まれている木棺墓で、主軸はN-21°-Eである。主体部の規模は上面で長軸242cm×短軸108cm、深さ54~87cmで、木棺底のレベルは56.75mで安定しているが墓壙上面は南西側ほど削平されているようである。

墓壙は両側面が二段掘りになり、標高55.90~56.10m付近に緩斜面を持っているが、両小口面には段は作り出されてはいない。

墓壙埋土は墓壙掘削時に出された暗橙褐色土などの再埋土であるが、木棺の腐朽のため各層南西側に片寄りながらU字形に落ち込んでいる。

墓壙底には木棺痕跡と見られる軟質の淡茶褐色粘質土がU形に残っており、さらに側板が底板を挟む様子が土層断面に見られた。平面的には木棺の範囲を明確にできなかったが、墓壙底部はレベル差がほとんど見られず、各コーナーも直線的に仕上げられていることから、底板の上に小口板が乗る箱形木棺が復元できる。

1号墓の区画溝である S D01はやや不定形な掘り形で、現状の最大幅1.9m、全長約4.9m、深さ40cmの規模を持っている。

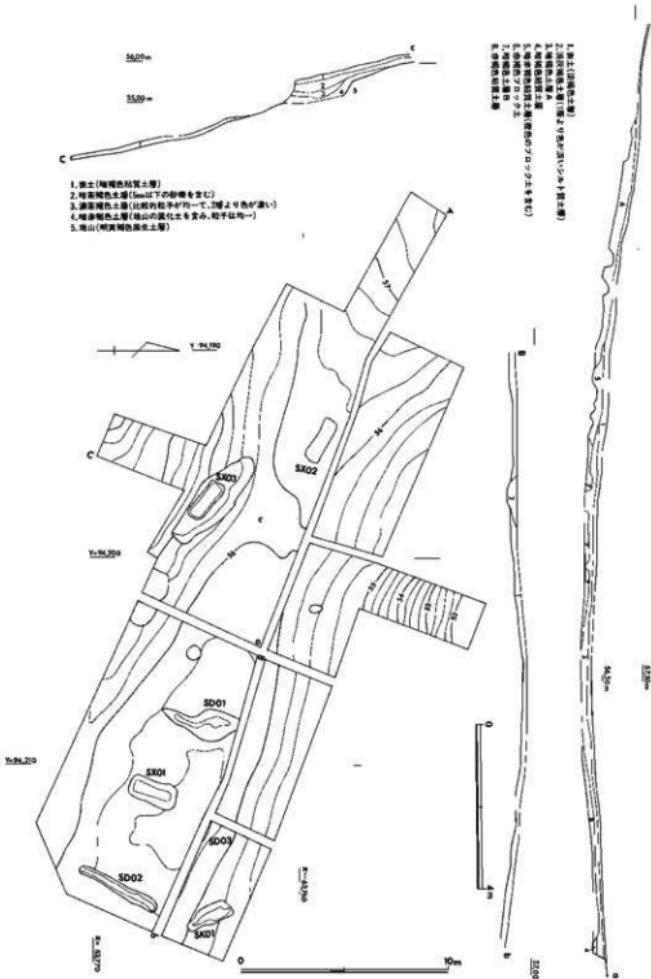
南東側を区切る S D02は断面観察で、最大幅1.9m、全長5.22m、深さ43cmの規模を持つことが判明した。北西部を区切る S D03は調査のミスにより大半を削平した後、断面観察によりその存在を確認したもので、幅1.04m、深さ37cm程度の規模を持っているが、本来

の長さや S D01・02との平面的な関連は不明である。

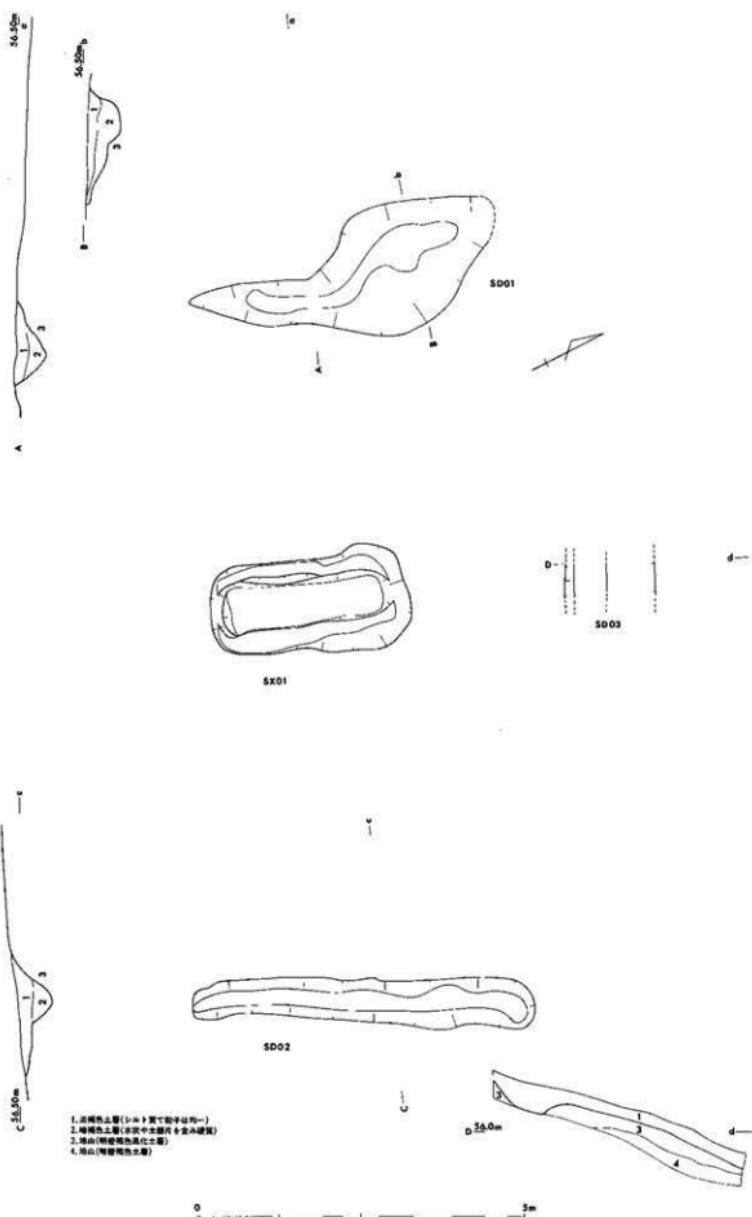
遺物に関しては墓壙内からは出土せず、溝 S D01から弥生土器と考えられる小片が出土しているが、器種や部位については不明である。

土塚墓 S X02

遺構（第58図） S X02は標高56.0m付近の尾根上に立地する土塚墓で、主軸は尾根と平行で、N-



第55図 小久白墳墓群 I 区 遺構配置図（平面 S = 1 / 375、断面 S = 1 / 120）



第56図 小久白1号墓実測図 ($S = 1/60$)

62°-Wである。墳墓に伴う溝や明確な墳丘などは見られなかった。

S X02は試掘先行トレンチによって、中軸に添って掘り貫いており、有効な位置で断面観察を行なうことが不可能であり、木棺痕跡の有無は明確にできなかった。

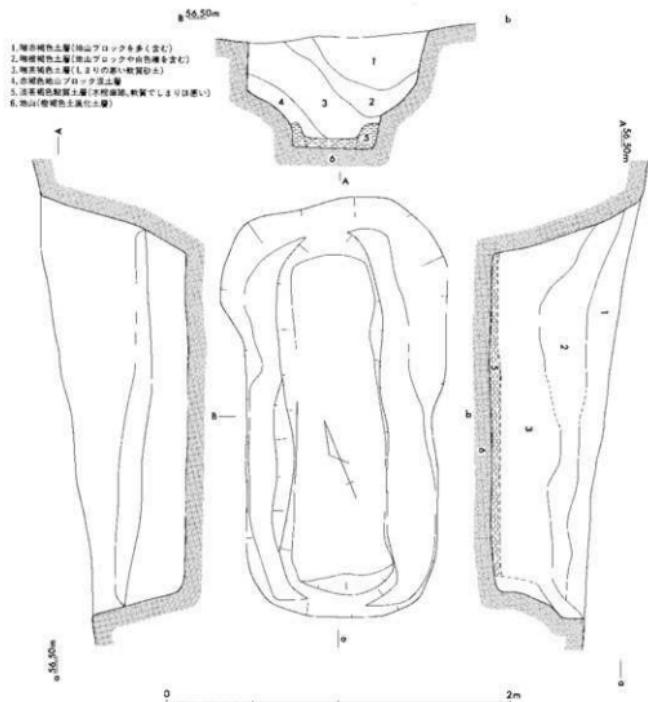
墓壙の全長は2.19m、幅69cm、深さ30cmで、一段に掘られ、底部の断面形は隅部がやや丸味を帯びているが床面は標高55.92m前後の平坦なものである。

遺物は墓壙上からやや北に寄ったセクション中から広口壺1と複合口縁壺2が出土している。

遺物（第60図）

広口壺1は口縁部のわずかな破片しか残存していないが、口縁部から肩部外面はヨコナデ調整で、内面はナデ調整と考えられる。口縁部は頸部から外反した後、直線的に外傾するが、端部は細く丸味を持たせている。色調は内外面とも暗橙褐色を呈している。

壺2は頸部の一部のみ残存しているが、復元径20.0cmで、外面はヨコナデ調整を施している。棲は横方向に突出しているが、あまりシャープなものではなく、複合口縁は若干外傾しながら立ち上がりに行くようである。色調は暗橙褐色を呈している。



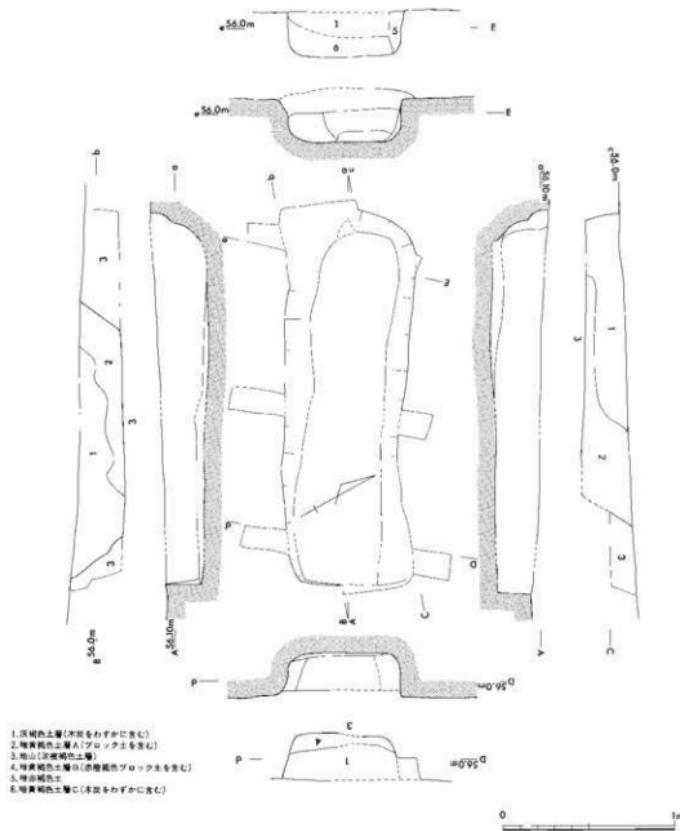
第57図 小久白1号墓S X01実測図 (S = 1 / 30)

土壙墓 S X03

遺構（第59図） 土壙墓 S X03はS X02南側の斜面に位置している。墳墓は斜面を全長5.1m、幅1.6mに渡って削り出し、幅1.4mの平坦なテラスを設定してからその中央部に掘り込まれている。主軸は尾根の向きとほぼ平行しており、N-53°-Wになっている。

墓壙の規模は全長2.14m、幅79cm、深さ34cmで、掘り形は一段になっており、各コーナー部分は若干丸味を帯びている。床面レベルは54.70mで安定しており、比較的フラットである。

墓壙上面の4層中からは供獻器類として甕4・5や鼓形器台6、低脚杯7のほか圓化はできなかつたが高杯も出土している。また標石とみられる三日月形の石3も同所から出土している。



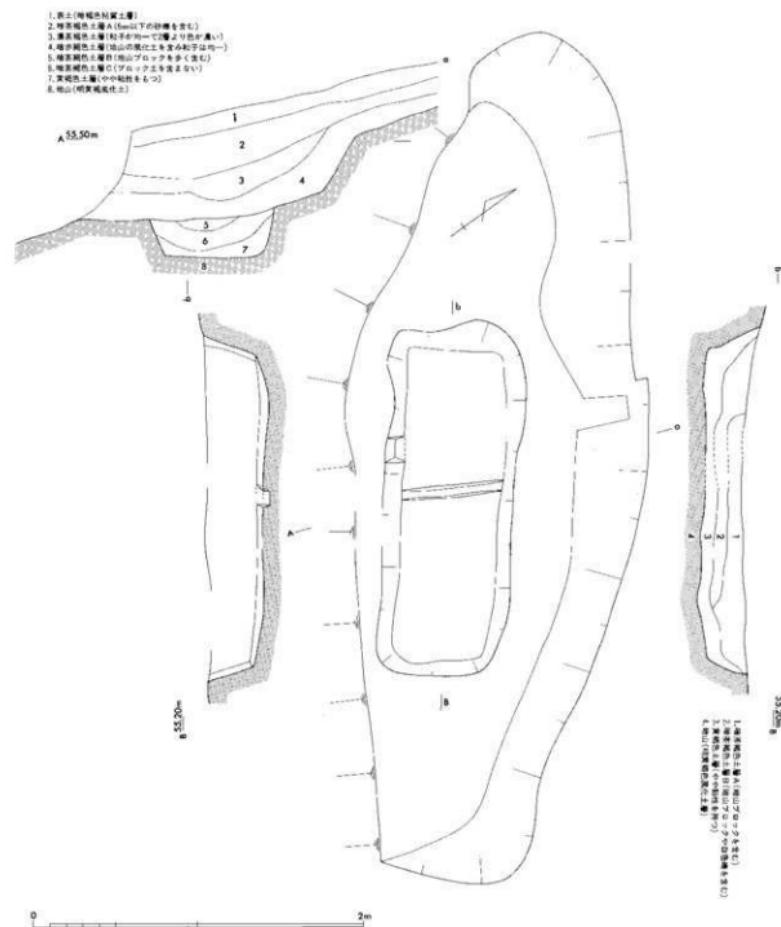
第58図 小久白墳墓群 S X02実測図 (S = 1/30)

遺物（第61図）

標石3は全長20.1cm、幅6.6~8.1cm、重量1557gの花崗岩質の石材で、平面形は三日月形を呈し、表面は平滑であるが、顕著な加工痕や使用痕は見られない。

墳4は口縁部の一部が残存するだけであるが、復元口径16.5cmで、稜部は強くシャープに横方向に突出している。口縁は緩やかに外傾外反し、端部はやや外方向に引き出してそのまま丸く收めており、全体的に薄くシャープに仕上げている。胴部内面のヘラ削りは頸部の直下から行なっている。

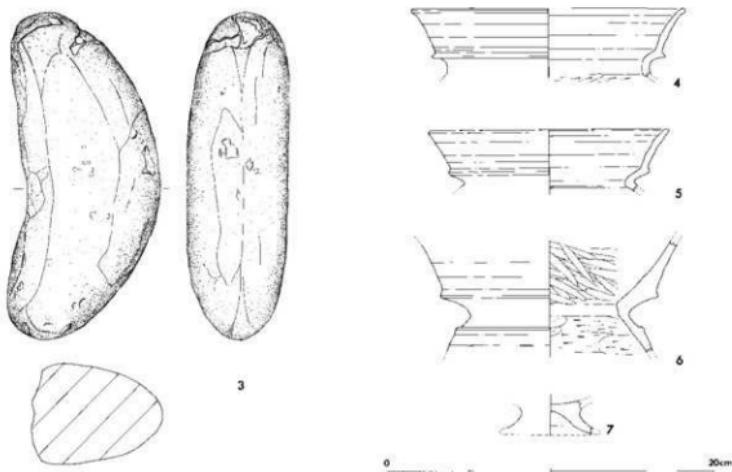
焼成は良好で表面は暗黄褐色を呈している。



第59図 小久白墳墓群S X03実測図 (S = 1 / 30)



第60図 小久白墳墓群S X02上面出土遺物実測図



第61図 小久白墳墓群S X03上面出土遺物実測図

壺5も口縁部の一部が残存するだけであるが、復元口径14.5cmで、稜は横方向に突出しているがあまりシャープなものではない。口縁は緩やかに外傾外反し、端部は先細り気味に収めている。

焼成は概ね良好で表面は明褐色を呈している。

鼓形器台6は口縁部と脚端部を欠損しているが、筒部周辺はほぼ完存している。上部稜径13.4cm、下部稜径11.7cm、筒部最小径9.7cmで、受部内面は幅4～9mmのヘラミガキを横位からやや斜位の方向に施している。筒部内面はナデ調整であるが脚部内面は横方向のヘラ削りを施している。

外面調整はヨコナデで、上部の稜は横方向に、下部の稜は斜め上方に突出させているが、突出の度合いは低い。焼成は良好で色調は壺5と同様な明褐色を呈している。

低脚杯7は杯部が欠損し、脚部のみ残存し、推定底径は5.9cm前後である。焼成はやや不良で表面は淡潤橙褐色を呈している。S X03上面からはさらに1個体低脚杯が出土しているが、細片化しており固化できなかった。

S X03墓壙上面から出土している高壺は口縁端部と脚部が完全に欠損しており、形状は明確ではないが、壺部外面に稜を持つものではなく緩やかに内湾気味に立ち上がった後、若干外反して口縁に至るものと考えられる。

第3節 小 結

小久白墳墓群の調査では長方形墳丘墓1基と土壙墓2基を検出することができた。時期的にも弥生時代後期末の鍵尾A-5号墓式⁽¹⁾（草田5期）⁽²⁾に属する土器が出土していることから、著名な「荒島墳墓群」⁽³⁾の一角落として位置付けることができよう。以下、当墳墓群の特徴を指摘し、荒島墳墓群内における位置付けを考えてみたい。

小久白1号墓について

1号墓は全長10m×7.6mと当墳墓群内では卓越した規模を持っており、盟主的な存在と考えられる。また、特異な点として3辺にそれぞれ独立した区画溝を掘削し、墳丘の内外を区画していることがあげられる。出雲地域においてこのような方形周溝墓・方形台状墓というべき要素を持った墳墓の検出例は少なく、安来市黒井田町・長曾土壙墓⁽⁴⁾で弥生時代後期末の例がある他、古墳時代前期に属する安来市吉佐町の吉佐山根1号墳、松江市・柴尾遺跡、⁽⁵⁾弥生時代中期の出雲市・天神遺跡⁽⁶⁾で類例が知られる程度である。

なお、鳥取県側に若干類例が見られ、米子市・青木遺跡H地区、⁽⁸⁾倉吉市・宮ノ下遺跡、同市・上神猫山遺跡、同市・大谷後口谷墳墓群⁽⁹⁾、東郷町・宮内第1遺跡などがあげられる。

これらの中で弥生時代に属する例としては長曾土壙墓群、青木遺跡、大谷後口谷墳墓群があるが、小久白1号墓の場合、遺物がほとんど出土していないため時期を決定できる根拠はない。しかし、この尾根上にはS X02・03以外に遺物が出土している遺構は無く、S X02・03が1号墓の周辺埋葬として存在すると仮定できるならば鍵尾A-5号墓式前後の時期を与えることができるであろう。

1号墓の主体部は墳丘中心の木棺墓S X01だけで、区画内での单数埋葬としては出雲部では最も古い段階のものといえる。

S X01は木棺の底板と側板基底部の痕跡が残存し、小口穴の痕跡が無く底面がフラットなことから、福永伸哉氏の分類によるII型木棺が納められた可能性が高い。

荒島墳墓群では、的場式期の仲仙寺9号墓・10号墓以来、盟主墳として四隅突出型墳丘墓が10基前後築造されていることが現在確認されている。しかし、小久白1号墓はこういった四隅突出型墳丘墓とは異なる墳丘構造であり、主体部にも白砂や水銀朱を用いないという相違点が存在する。

しかし、小久白墳墓群の立地する場所は、大形墳墓の集中する塩津山墳墓群の存在する同一丘陵の山側基軸部に相当し、1号墓からは地形が南東側に開け、安来平野や大山などが見渡せる景勝の地である。墳墓の立地の点から言っても、標高57mという荒島墳墓群中では最も高所に位置し、四隅突出型墳丘墓群を鳥観できる地に存在している。

これらの状況から小久白1号墓の被葬者像を解釈するには2つの方向性を考えられる。

鳥取県下での弥生墳丘墓の様相をまとめた松井潔氏によると、弥生後期の首長墓は墳丘の巨大化より、一般集団構成員の墓である木棺墓・土壙墓群からの立地上の隔絶をもって首長権の確立が図られたとしている。また、墳形や規模についても、常に平野単位を越えた汎山陰的な規制が働くのではなく、各平野単位の首長による主体的な選択が行われていたとし、従来の四隅突出型墳丘墓築造による汎山陰的な政治秩序の成立に疑問を唱えている。

安来平野においては荒島地域の四隅突出型墳丘墓に捉われがちになるが、伯太川右岸の長曾土壙墓群、白コクリ1・2号墳丘墓、清水大日堂裏古墓群、鍵尾遺跡、小谷土壙墓、島田黒谷III遺跡などの

方形を基調とした平面プランをとる墳墓が存在する。これらの墳墓群のうち、的場式前後の臼コクリ1・2号墳丘墓は特殊器台を伴う首長墓と考えられ、この時期までは首長墓の形態が四隅突出型墳丘墓に定着していなかった可能性が考えられる。

小久白1号墓の時期までに安来平野の首長墳の形態が画一化されていなかった可能性は低いかもしれないが、選択枝の一つとはなり得るであろう。^回

しかし、四隅突出型墳丘墓の築造の中心地といえる荒島墳墓群内に築造された小久白1号墓は、首長墓である四隅突出型墳丘墓を築造し得ない、首長権を支える武人・文人などの中間階層の墳墓形態を見ることがより妥当かもしれない。

このような仮説が適切であるかどうかは、今後の調査の進展による類例の増加を待たねばならないが、安来平野の弥生墓制の実態を解明する上では貴重な資料を提供したと言えよう。

S X02・03出土土器について

小久白1号墓では墳丘上面が流出しており、供獻土器資料に恵まれなかつたが、S X02・03では一部の供獻土器が残存していた。

これらの土器資料のうち、壺は胸部が欠損しているが、残存する口縁部はやや外反して、端部を細く取める手法から鍵尾A-5号墓式（草田5期）の時期を与えることができる。その他の器種についても鼓形器台の筒部が若干高さを持ち、筒部の径が縮まっている点など当該期の特徴と矛盾しない。直口の広口壺についても口縁端部に面を持ったり肥厚せずに細く丸味を帯びて収めているため当該期の資料として差し支えないと考えられる。

安来平野の土壤墓供獻土器資料としては、鍵尾A-5号墓式古相（草田4期）の島田黒谷Ⅲ遺跡の木棺墓S K01と小谷式（草田7期）の小谷土壤墓の資料を繋ぐ、鍵尾A-5号墓式新相（草田5期）の一括資料として位置付けることができると考えている。

参考文献

- (1) 花谷めぐむ 1987「山陰古式土師器の型式学的研究」『島根考古学雑誌』第4集
- (2) 鹿島町教育委員会 1992「講武地区県営圃場整備事業発掘調査報告書5 南講武草田遺跡」
- (3) 出雲考古学研究会 1985「古代の出雲を考える4 荒島墳墓群」
- (4) 安来市教育委員会 1981「長曾上塙墓群」
- (5) 島根県教育委員会 1995「平ラII遺跡・吉佐山根1号墳・穴神横穴墓群」
- (6) 松江市教育委員会・鰐松江市教育文化振興事業団 1994「柴尾遺跡発掘調査報告書I」
松江市教育委員会・鰐松江市教育文化振興事業団 1994「柴尾遺跡他発掘調査報告書II」
- (7) 出雲市教育委員会 1977「天神遺跡」
- (8) 青木遺跡調査団 1978「青木遺跡発掘調査報告書III」
- (9) 倉吉市教育委員会 1976「宮ノ下遺跡発掘調査報告」
- ⑩ 倉吉市教育委員会 1979「上神猫山遺跡発掘調査報告」
- ⑪ 倉吉市教育委員会 1986「大谷・後谷塙丘墓発掘調査報告書」
- ⑫ 財団法人 烏取県教育文化財団 1995「宮内第1遺跡現地説明会資料」
- ⑬ 福永伸哉 1985「弥生時代の木棺墓と社会」『考古学研究』第32巻第1号 考古学研究会
- ⑭ 安来市教育委員会 1972「仲仙寺古墳群」

- ⑯ 松井 淳 1996「山陰東部における後期弥生墓削の展開と画期」『考古学と遺跡の保護』
甘粕健先生退官記念論集刊行会
- ⑰ 島根県教育委員会 1994「臼コクリ遺跡・大原遺跡」
- ⑱ 安来市教育委員会 1995「清水大口堂裏古墓群現地説明会資料」
- ⑲ 山本 清 1965「島根県安来市鍵尾遺跡調査報告」
- ⑳ 近藤 正 ほか 1961「島根県安来平野における土壙墓」『上代文化』36
- ㉑ 島根県教育委員会 1994「明子谷遺跡・島田黒谷II遺跡・島田黒谷III遺跡・猫ノ谷遺跡」
- ㉒ 島根県教育委員会 1995「塩津山1号墳」
- 島根県教育委員会 1996「塩津山1号墳が語る古代の安来」

第5章 神庭谷遺跡の調査

第1節 調査の概要と経過

神庭谷遺跡は安来市荒島町舟磯3123-3他に所在する。標高約75mを最高点とする丘陵の西側斜面に位置する遺跡で、丘陵上からは中海・島根半島・弓浜半島・大山が一望でき、近辺では最も標高の高い丘陵である。すぐ北には造山古墳群がある史跡公園古代出雲王陵の丘があり、荒島の重要な遺跡群の一角を占めており、なんらかの遺構・遺物の存在が予想された。また、「神庭谷」という地名も荒神谷遺跡がある斐川町の神庭を連想させる地名である。

調査前は山林であった所がほとんどであるが、丘陵頂部は戦後、果樹園造成のため大規模な削平を受けて平坦になっていた。

トレンチ調査の結果、西側斜面の中で比較的平坦な場所から数点の須恵器片が出土したので、西側斜面に本調査区を設定した。斜面の上段をI区、下段をII区として4月20日から調査を開始した。

最初に重機で表土を取り除いたあと、手掘りによる調査をI区の頂上近くから開始した。調査の結果、I区からは性格不明の溝状遺構が検出されたことどまり。遺物としては弥生土器、須恵器、土師器が数点出土した。

II区の調査は6月22日から開始した。II区はI区の下段の摺り鉢状の地形に設定した調査区であるが試掘の結果表土が2m以上あることがわかったため、重機でかなりの量の土砂を取りのぞいた。

II区では遺構は検出できず、須恵器を中心とした遺物が十数点出土したことどまり、全ての現地調査を7月28日に終了した。

第2節 調査の成果

I区の調査

I区は頂上近くの標高72m地点から標高50m付近の斜面に設定した。70m付近から55m付近までは急峻な斜面で、55mから50m付近は比較的緩やかな斜面になっている。

遺構としては調査区最下部付近で溝状遺構を検出したが遺物を伴わず、性格も不明である。埋土のしまりも弱かったことから、比較的新しいものと考えられる。

遺物は急峻な斜面から弥生後期末の土器片、下方の緩斜面からは飛鳥～奈良時代の須恵器片が出土したが、いずれも数点の出土で遺構に伴うものではない。

出土遺物（第64図）

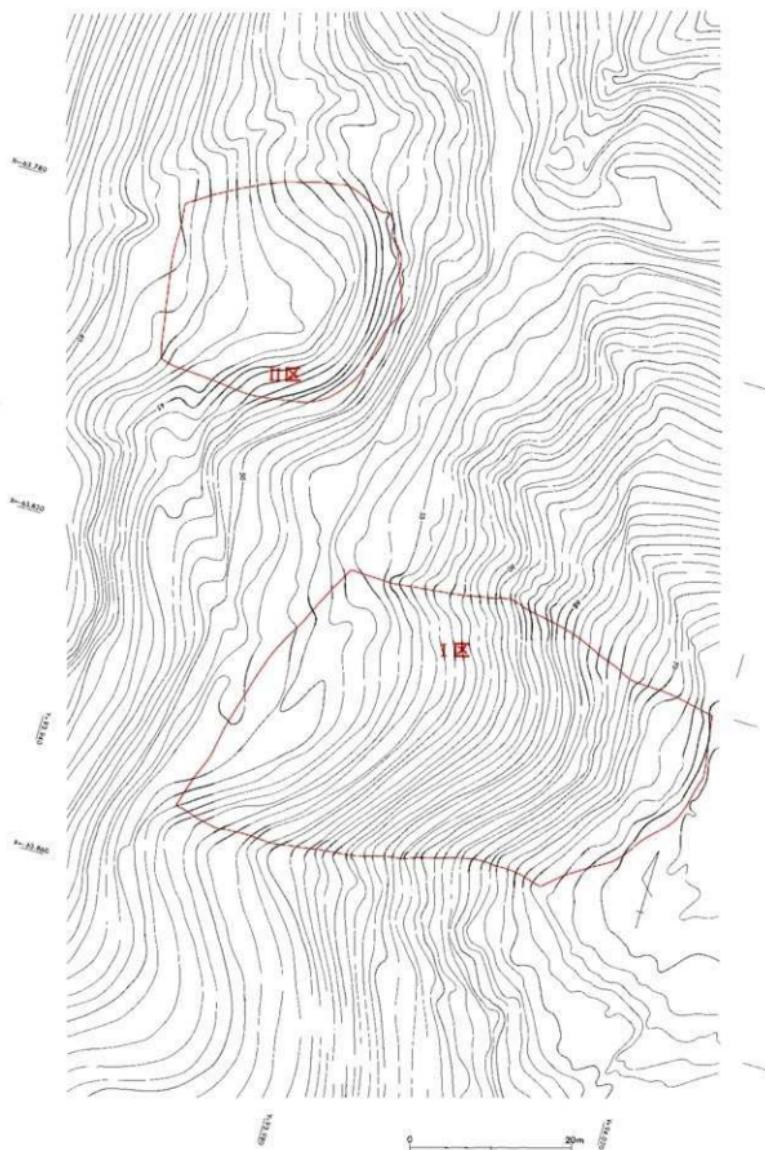
1は弥生後期末の壺である。斜面の上部の地点から出土したが、口縁部の1/8程度しか残存しておらず、口径は推定で15.6cmである。焼成はやや不良で全面明褐色を呈する。

2は弥生後期末の壺と考えられる。斜面の頂上に近い地点から出土した。口径は推定で17.8cmで縁は横方向突出するあまりシャープでない。焼成はやや不良で内面暗褐色、外側暗茶褐色を呈する。

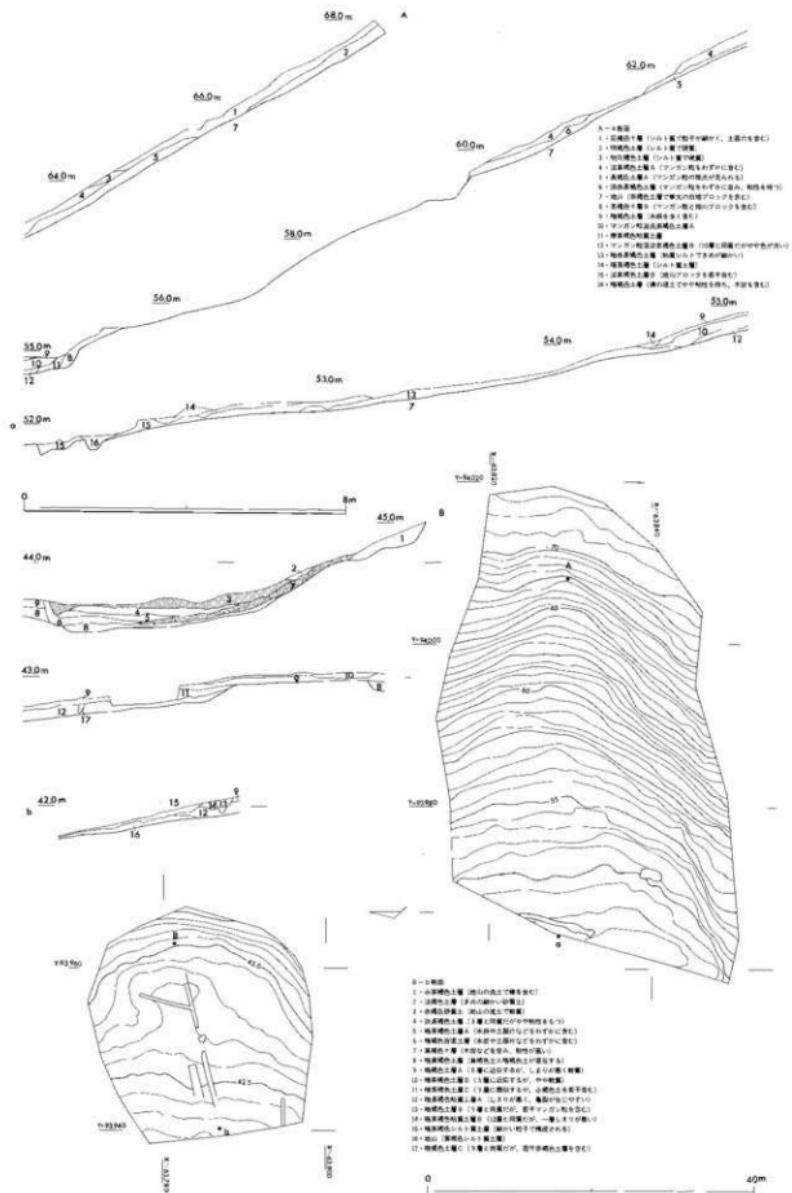
3は土師器の壺である。斜面の下部の傾斜が比較的緩やかな地点から出土した。肩部の1/8程度しか残存していない。焼成は普通で、内外面とも暗黃褐色を呈する。

4・5は斜面の上方から出土した複合口縁壺であるが、どちらも口縁の一部しか残存していない。

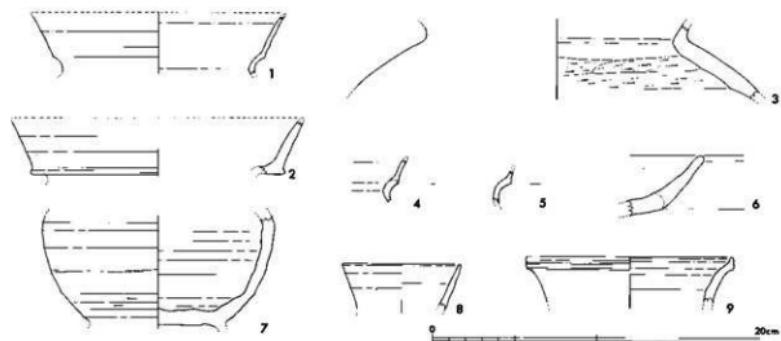
6は土師器の炮烙状の器形を持つもので、焼成は良好、表面は橙褐色を呈する。



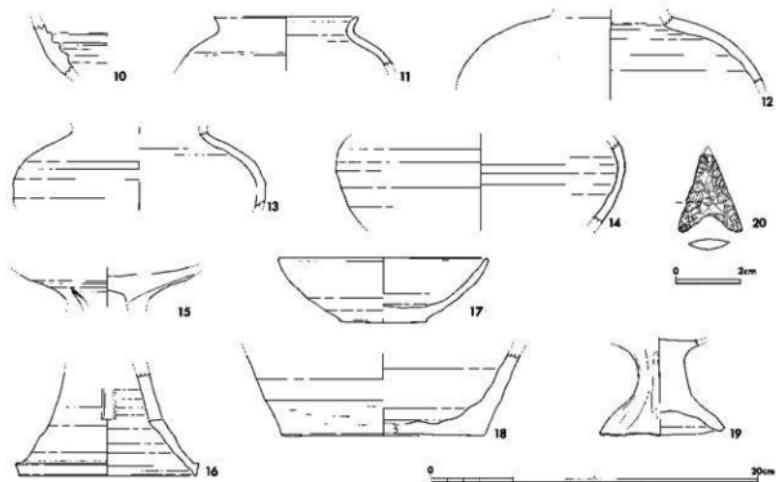
第62図 神庭谷遺跡調査区配置図



第63図 神庭谷遺跡遺構配置図（平面 S = 1 / 600、断面 S = 1 / 120）



第64図 神庭谷遺跡I区包含層出土遺物実測図



第65図 神庭谷遺跡II区包含層出土遺物実測図

7は高台付の長頸壺で、胴部の1/4程度しか残存していない。斜面中部からの出土である。貼り付け高台で、高台を着ける前に接点を強化するため、ヘラ工具で3周程度の沈線をめぐらしている。焼成は良好で内面は暗褐色、外面は淡灰色である。

8は須恵器の小型壺である。復元口径は7.2cmで、焼成は良好、内外面とも褐色を呈するが、外面には自然釉が付着している。

9も須恵器の小型壺である。肩部に一条の沈線がある。焼成は良好で表面は濃灰色、断面は褐色である。

II区の調査

II区はI区から5m程度低い場所の摺り鉢状の地形に設定した調査区である。谷状の地形に多量の土砂が堆積してこのような地形になったと考えられる。2m以上の厚さで堆積している赤褐色の表土を取り除いた後、炭を含んだ遺物包含層を掘り下げて精査を行なったが遺構は存在しなかった。

層序としては赤褐色砂質土（地山の流れ込み）の下に土器片を含んだ暗茶褐色土などが存在し、その下に木炭を含む黒褐色土があった。

遺物としては包含層から7～9世紀の須恵器が出土した。他に弥生時代中期の土器片や黒曜石製の石鏡が出土した。

出土遺物（第65図）

10は小片であるが弥生中期の壺形土器の頸部と考えられ、3条以上の凸帯が巡っている。焼成はやや不良で、全体的に明黄褐色を呈する。

11は須恵器の小型壺である。復元口径8.6cmで、肩部に一条の沈線がある。焼成は良好で、内面は淡褐灰色、外面は褐灰色を呈している。

12は須恵器の平瓶と考えられるものである。肩部の1/5程度しか残存していないので、口径等は不明である。焼成は良好で外面は淡褐灰色、内面は明灰色を呈している。

13は須恵器の長頸壺と考えられる。肩部の1/6程度しか残存していないので、口径は不明であるが最大径は15.5cmである。焼成は良好で外面暗灰褐色、内面濃灰色を呈している。

14は須恵器の長頸壺と考えられる。焼成は良好。内面は濃灰色、外面は淡褐灰色を呈している。

15は須恵器の高杯である。杯部基底の1/2程度しか残存していない。焼成は良好で表面黒褐色を呈している。

16は須恵器の高杯である。脚端部の1/5程度の残存で、復元底径10.8cmを測る。脚端部は比較的シャープなつまみ出しを行なっている。焼成は良好で外面黒褐色、内面濃灰色を呈している。

17は土師器の皿である。口径12.8cm、底径5.3cm、器高4.0cmを測る。底部は回転糸切りでやや厚みをもっている。焼成はやや不良で内面は明黄褐色を呈している。口縁部の外面は明黄褐色で大半は淡橙褐色を呈している。

18は須恵器の甕あるいは鉢と考えられる。底部の1/5程度しか残存していないが、復元底径12.1cmを測る。焼成は良好で外面は淡褐灰色、内面は濃灰色を呈している。

19は土師器の高杯である。杯部は欠損していて、口径は不明であるが、底径は7.3cmである。焼成は良好で、表面は明褐色、杯部内面のみ暗褐色を呈する。

20は黒曜石製の凹基式石鏡である。先端が欠けているが、推定全長は2.7cm程度と考えられる。

第3節 まとめ

周辺の環境や地名などから、大規模な遺跡の発見が期待されたが結果的にまとまった遺構を検出することはできなかった。丘陵頂部は戦後の果樹園造成の際に、大規模な削平をうけており、I区から出土した土器はその時、頂部から流れ込んだと考えられる。このことから丘陵頂部には高地性集落や墳墓が存在していた可能性を考えることもできよう。

II区は木炭や土器を含む黒褐色土層が自然堆積した9世紀以降に、土砂崩れなどのために2m以上

の厚さで赤褐色土が堆積したものと考えられる。

神庭谷遺跡は遺跡の集中する荒島地域の中でも、かなり奥まった位置に存在するため、遺構・遺物などはあまり検出できなかった。これは土地利用・空間構造の観点からは一定の成果を得たと言え、集落などからは距離を置いた、境界的な空間として小規模な祭祀などの活動が行われていたと推定できる。

参考文献

- (1) 島根県教育委員会 1995 「陽徳遺跡・平ラⅠ遺跡」

図 版

図版1 (柳II遺跡)



1 柳II遺跡全景
(西側上空から)



2 同
(真上から)

図版2 (柳II遺跡)



1 柳II遺跡調査前
(西から)



2 同 調査後全景
(西から)

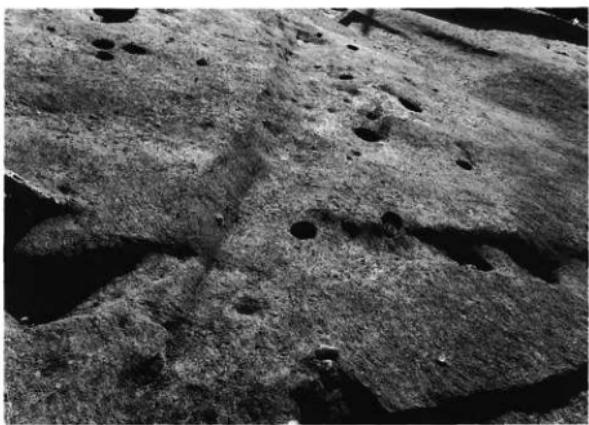


3 同 全景
(東から)

図版3 (柳II遺跡)



1 柳II遺跡 I 区 S B 01
(北東から)



2 同 S B 02・03
(手前 S B 02・
向こう S B 03
北から)



3 同 S B 03
(北から)

図版4 (柳II遺跡)



1 柳II遺跡 I 区 SK01
(北から)



2 同 SK02
(北から)



3 同 SK03
(北から)



1 柳II遺跡 I 区
SK 04検出時
(北から)



2 同 底部除去時



3 同 土層断面
(北から)

図版 6 (柳II遺跡)



1 柳II遺跡 I 区
SK 04 磚群検出時
(北から)



2 同 SK 05
(北から)



3 同 土層断面
(南西から)



1 柳II遺跡 I 区 S D 05
(北から)



2 同 S D 06
(北から)



3 同 I - 2・3 間
土層断面
(南から)

図版8 (柳II遺跡)



1 柳II遺跡II区全景
(真上から)



2 同 S I 01
(北から)



3 同 S I 01と
II区土層堆積状況
(南から)

図版9 (柳II遺跡)

1 柳II遺跡II区
S B 07・04・05
(北から)



2 同 S B 05
(北から)



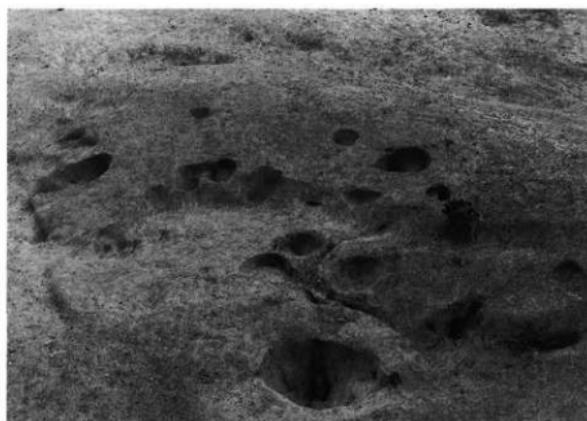
3 同 S B 05
土師器出土状況
(北から)



図版10 (柳II遺跡)



1 柳II遺跡II区 S B 07
(北から)



2 同 S B 06・S K 12
(南西から)



3 同 S B 06土層断面
(南から)

図版11 (柳II遺跡)



1 柳II遺跡II区
S B08・SK15
(北西から)



2 同 SB08・SK15
土層断面
(南から)



3 同 SK15
遺物出土状況
(北西から)

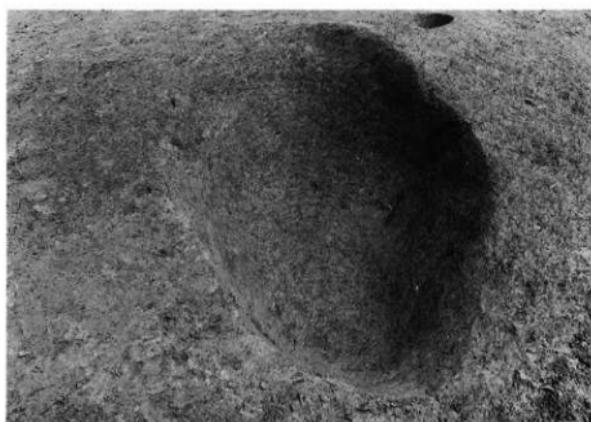
図版12 (柳II遺跡)



1 柳II遺跡II区
S B 08勾玉・
砥石出土状況



2 同 S B 08・P 160
遺物出土状況



3 同 S K 13

図版13 (柳II遺跡)

1 柳II遺跡II区
SK 13土層断面
(西から)



2 同 SK 14土層断面
(西から)



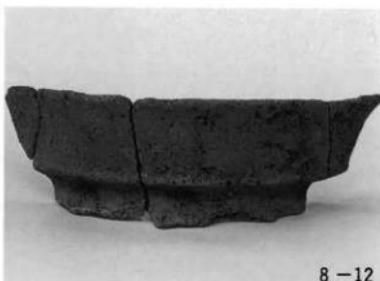
3 同 II区北壁土層断面
(南西から)



図版14 (柳II遺跡)



8-2



8-12



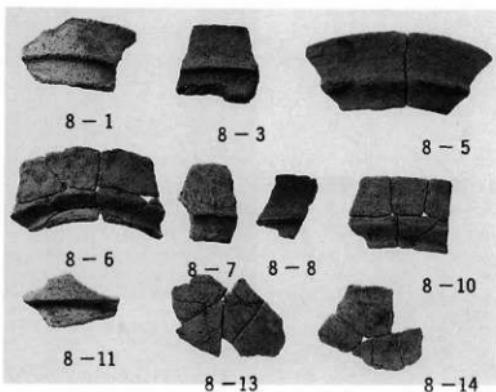
8-9



8-4



11



8-1

8-3

8-5

8-6

8-7 8-8

8-10

8-11

8-13

8-14



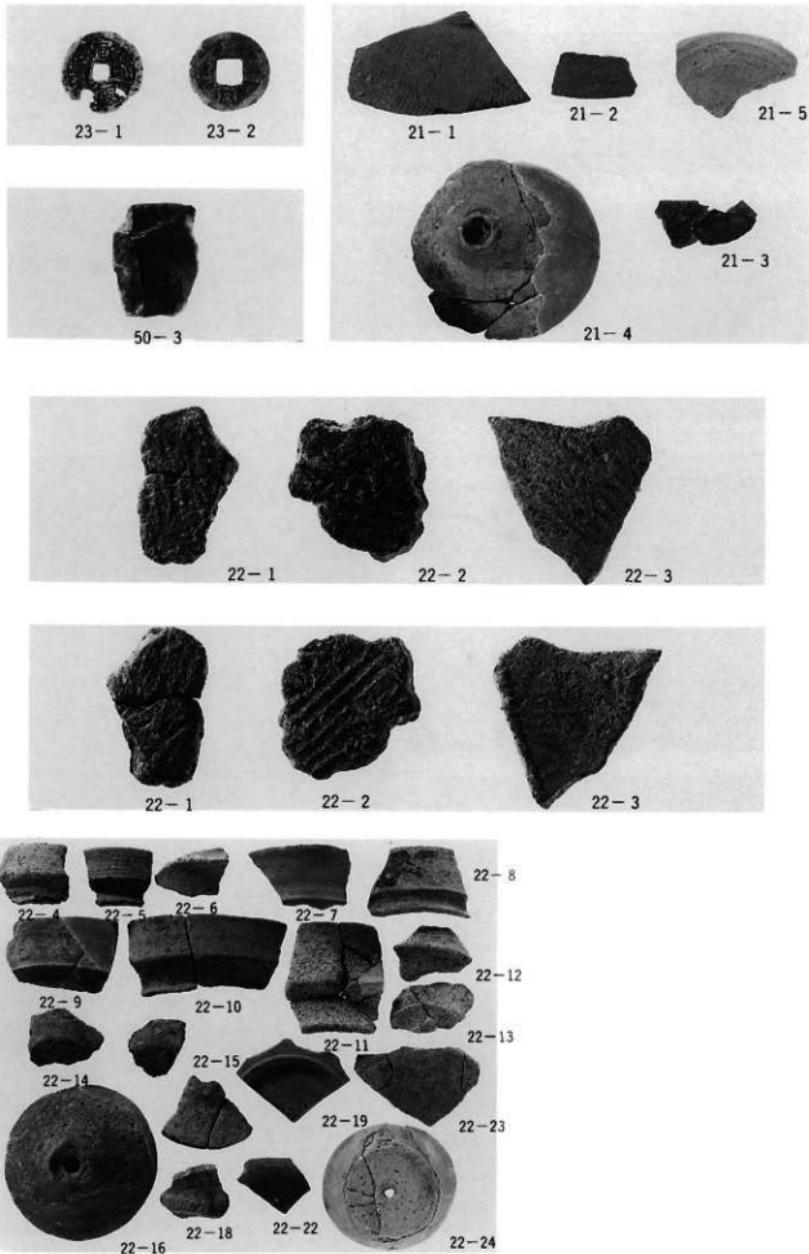
22-21



22-20

I区SB03 (8-1~14)、SK04 (11)、I区遺構外出土土器

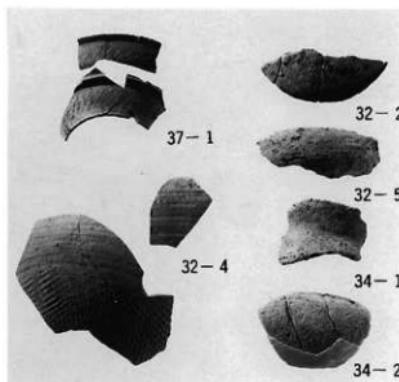
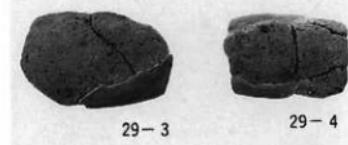
図版15 (柳II遺跡)



I区SK07 (21-1)、SD07 (21-2)、SD08 (21-3・4)、SD10 (21-5)

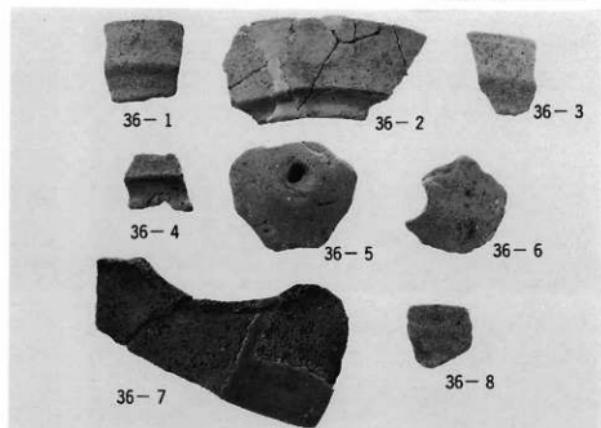
I区遺構外 (22-1~3、4~19、22~24、23-1・2、50-3) 出土遺物

図版16 (柳II遺跡)

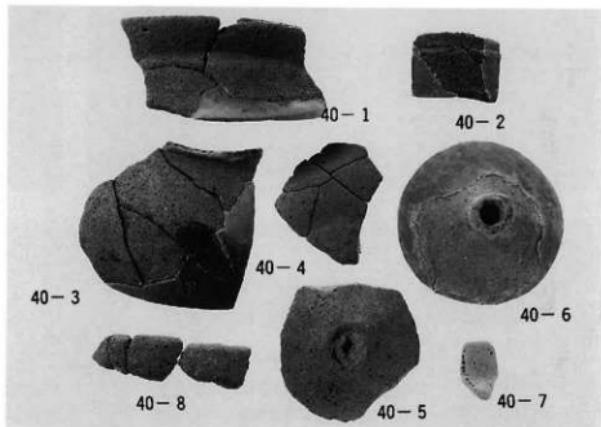


II区 S I 01 (29-1~3)、SK14 (29-5)、SB05 (32-1~6)
SB06 (34-1・2)、SB07 (37-1・3) 出土土器

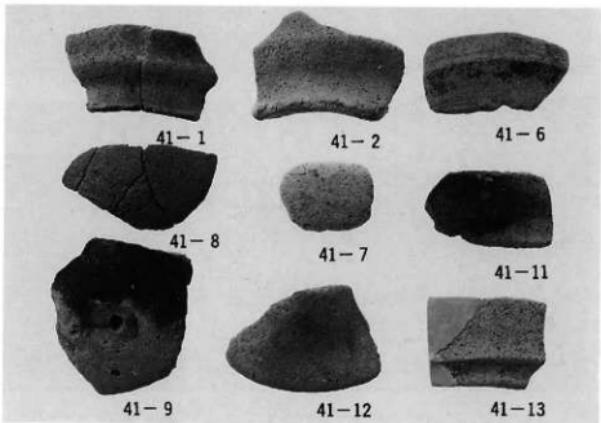
図版17 (柳II遺跡)



II区 S B 04出土土器

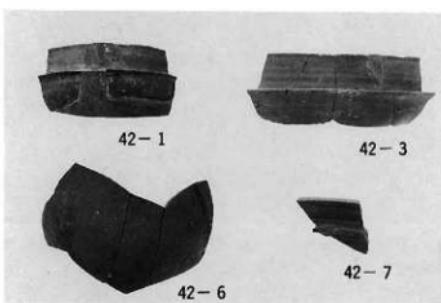


II区 S B 08出土土器

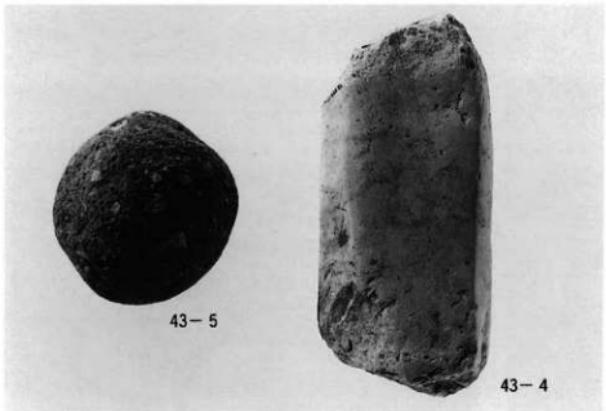
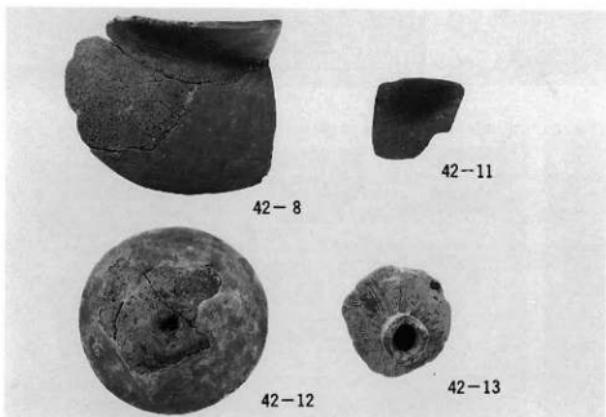
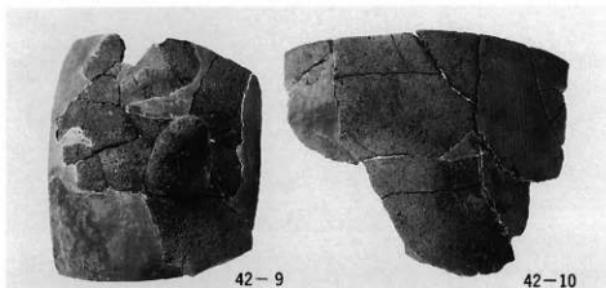


II区 S K 15・
S B 08出土土器

図版18 (柳II遺跡)

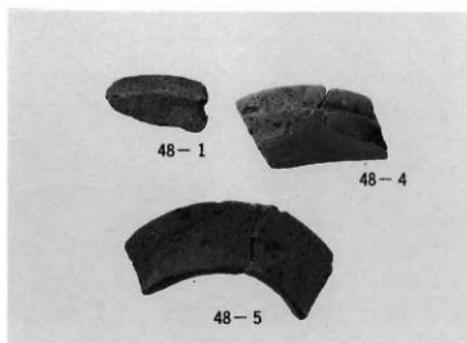
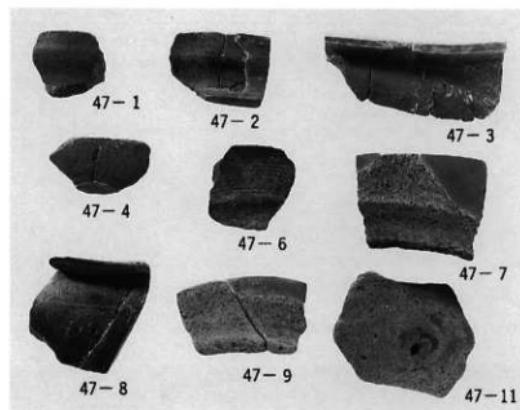


II区SK15 (41-3~5・10) SB08北西土器群 (42-1~7) 出土遺物



II区SB08北西土器群 (42-8~13)、SB08 (43-1~4)、SK15 (43-5) 出土遺物

図版20 (柳II遺跡)



II区 SK13 (47-1~12)、P81 (48-1~3)、P82 (48-4・5) 出土土器

図版21 (柳II遺跡)



49-20



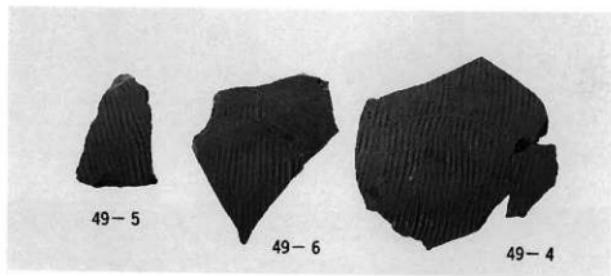
49-11



49-19



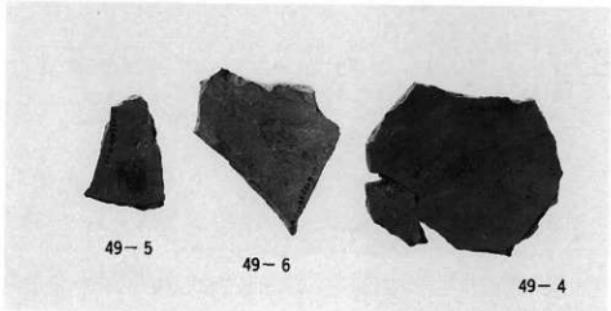
49-10



49-5

49-6

49-4

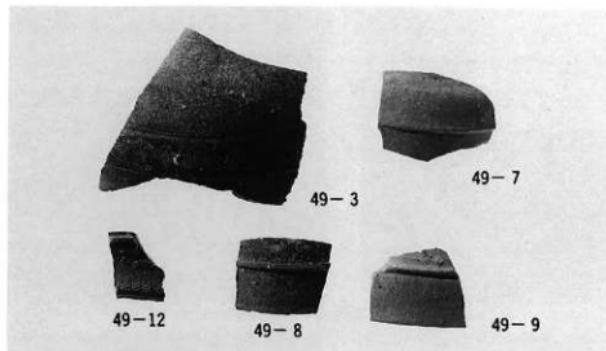


49-5

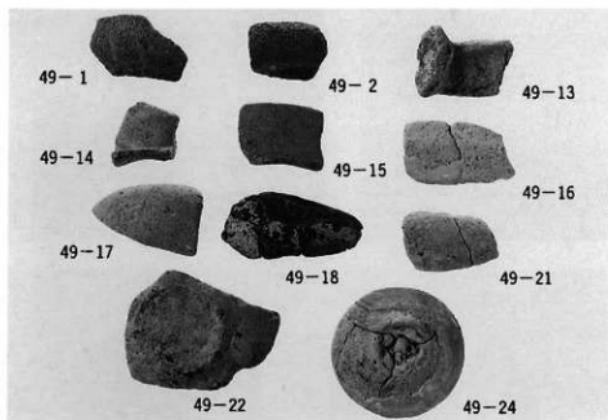
49-6

49-4

図版22 (柳II遺跡)



II区包含層出土石器



同上



II区包含層出土土器

図版23 (小久白墳墓群)



1 小久白墳墓群全景
(南上空より)



2 同 全景
(上空より)



3 同 (北西より)

図版24（小久白墳墓群）



1 小久白1号墓全景
(北西より)



2 同 全景
(南東より)



3 同 S X01土層断面



1 小久白墳墓群 SX01
(南西より)



2 同 近景
(北西より)

図版26 (小久白墳墓群)



1 小久白墳墓群
S X 02全景
(東より)

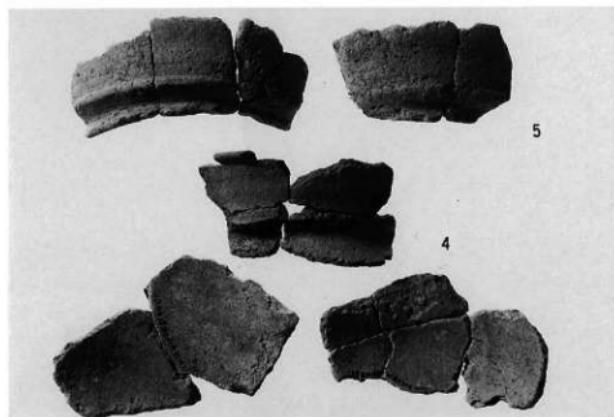
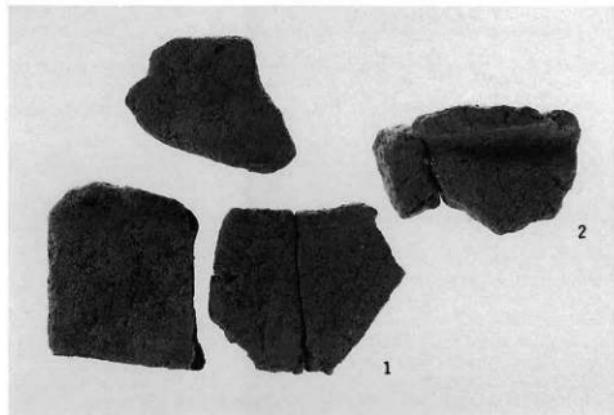


2 同 S X 03全景
(東より)



3 同 S X 03全景
(北東より)

図版27 (小久白墳墓群)

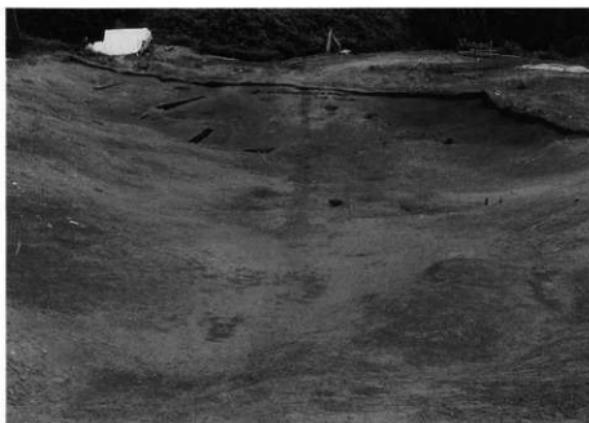


小久白墳墓群 S X02・S X03上面出土遺物

図版28（神庭谷遺跡）



1 神庭谷遺跡全景

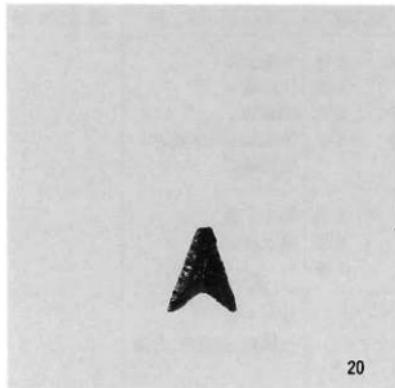
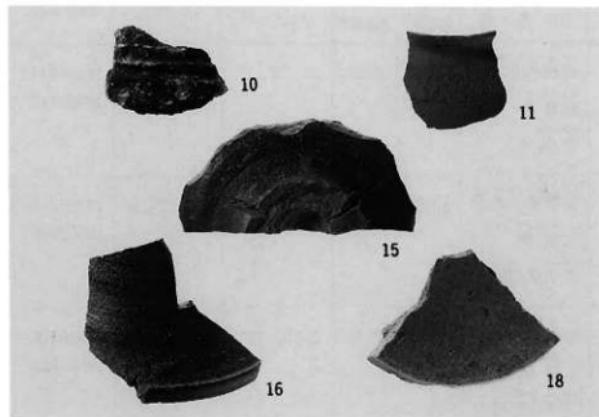
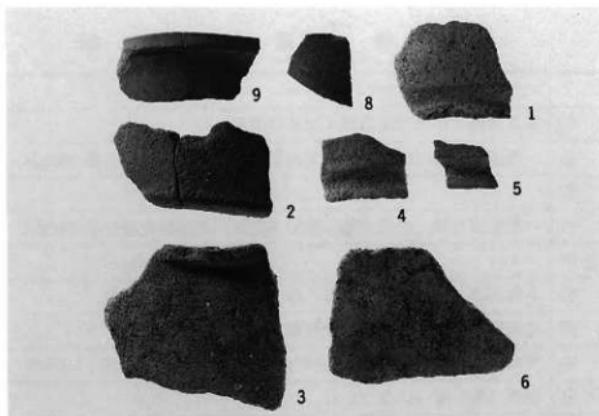


2 同 I区近景



3 同 II区近景

図版29 (神庭谷遺跡)



神庭谷遺跡出土遺物

報 告 書 抄 錄

フリガナ	ヤナギニイセキ・コクジラフンボグン・カンバダニイセキ							
書名	柳II遺跡・小久白墳墓群・神庭谷遺跡							
副書名	一般国道9号(安来道路)建設予定地内発掘調査報告書 西地区							
卷次	4							
シリーズ名	一般国道9号(安来道路)建設予定地内発掘調査報告書 西地区							
シリーズ番号	4							
編著者名	ト部吉博・片山寛志・福島 浩・池淵俊一・岩橋孝典							
編集機関	島根県教育委員会文化財課埋蔵文化財調査センター							
所在地	〒690-01 島根県松江市打出町33番地 TEL 0852-36-8608代							
発行年月日	西暦 1996年8月31日							
フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東経 ° ° ° °	調査期間	調査面積 m ²	調査原因	
柳II	島根県安来市 荒島町 字柳他	32206	0528	35°25'17"	133°12'22"	19950919-19960117	3,000	道路建設
小久白	島根県安来市 久白町 字小久白他	32206	0543	35°25'14"	133°12'15"	19950719-19950906	490	同上
神庭谷	島根県安来市 久白町 字神庭谷他	32206	0531	35°25'12"	133°12'06"	19950420-19950728	2,400	同上
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
柳 II	集落跡	弥生 古墳時代中期	掘立柱建物 土器棺墓 掘立柱建物 竪穴住居跡	2棟 1基 5棟 1棟	弥生土器 土師器 須恵器 水晶製勾玉未成品 各種砥石			
小久白	墳墓群	弥生	墳丘墓 土壤墓 土壤	1基 2基 1基	弥生土器 墓上標石			
神庭谷	包含層	弥生 古墳 奈良～平安			弥生土器 土師器、須恵器、石鏡			

平成 8 年（1996）8 月印刷

平成 8 年（1996）8 月発行

柳II遺跡・小久白墳墓群・神庭谷遺跡

一般国道 9 号（安来道路）建設予定地内

埋蔵文化財発掘調査報告書 西地区 IV

発 行 建設省松江国道工事事務所

島根県教育委員会

印 刷 鮎 柏 村 印 刷